

あさひ

あさひつ「面謁」(冬)御佛名(ハツツ)を見よ。
 名詞。名對面。
 あさひ(明景)(秋)秋の異名。
 あさひつ(名月)(秋)八月十五日の月をいふ。||明月。名高き月。芋名月。望月。今宵の月。今日の月。最中の月。||名月や朋にて詩の案じくせ。召波。
 あさひつ(名月)(秋)十五夜の月の異名。
 あさひつ(名月)(秋)名月や曇りながらも無提灯。屠龍。
 あさひつ(名月)(秋)名月に蝕あること。||蝕名月。月のはえ。
 あさひつ(名月)(秋)月の雨。
 あさひつ(名月)(秋)十五夜の月に蝕あること。月の暈を見よ。
 あさひつ(冥途鳥)(毒)ほごささすの異名。
 あさひつ(蝦蟇)(毒)芋虫の一種。菜の葉に多く生じ、緑色にして形芋虫に似て小なり。羽化して白蝶となる。||あなむし。
 あさひつ(妙音講)(毒)六月十六日、京都四圍寺家、其他琵琶を彈する家にて、妙音天(辨才天)のこと。琵琶を彈じて衆生を順解脱せしむる故斯道の神(す)の像前に、供物を捧げ管絃を催す祭式をいふ。
 あさひつ(若荷)(秋)山林園圃などに生ずる草。春宿根より苗を出す。形生薑の苗に似たり。之を若荷竹といひ、秋長じて二三尺となり、其根の旁に花を生ず。形荷の如く二三寸、採りて食用とす。之を若荷の子といふ。||蘆荷。||忘れては花さかせたる若荷哉。五明。あさひつ(若荷)(秋)能樂の黄石公なごの類に用ふる翁面の名。
 あさひつ(若荷)(毒)あながを見よ。||露の葉をたらぬきにけり若荷竹。||

あさひ

あさひつ(若荷)(秋)あながを見よ。
 仇落や柿に並びし若荷の子。道彦。
 あさひつ(若荷)(秋)あなが。||片かげや若荷の花の薄よ。||梅餌。
 あさひつ(若荷)(毒)正月三日、丹波國(以鹿)郡志賀村、オツキ社(祭神未詳)の社地に、寒を侵して三五聖の若荷生ずるを取て神供とし、里俗其多少にて其年の豊凶を卜すること。||此神の冥加願はず祭哉。||貞起。
 あさひつ(妙義山)上野北甘樂郡にあり。怪巖奇石重疊して日本第一の奇峰と稱せらる。山麓に妙義神社あり。

あさひ

あさひつ(妙見)光仁帝の時、開成皇子(桓武帝の御兄)攝津國舞尾寺に講堂を建て、八尺の白檀を得て像を造らんと思ひ給ひし其工なし。時に寶龜十一年七月五日、沙門妙見といふ者、十八人の弟子僧を伴ひて來り、香之を刻まんとて、千面千臂の觀音像及び四天王を彫刻し、三十日にして竣工す。八月十八日に至り、妙見寂然として運化し、弟子十八人し又、悉く消え失せしといふ。
 あさひつ(妙見)奈良朝時代の命婦。天平九年、正五位下を授けらる。歌をよくし、其歌萬葉集に出づ。
 あさひつ(妙見)北斗星を司る菩薩の名。
 あさひつ(妙見)妙見寺石堂(毒)(秋)正月十六日、及九月十六日に、下總國北相馬郡妙見寺の境内にて石を賣ることあり。馬一駄に價百文なりしといふ。
 あさひつ(妙國寺)和泉國堺にある日蓮宗の寺院。僧日院の開基にして、寺内に有名な蘇鐵の大木あり。
 あさひつ(妙心寺)開山忌(冬)十二月十二日、山城國葛野郡正法山妙心寺にて、開基、開山國師(名は慧玄、大燈國師の法弟、延文五年寂)の忌を修すること。||國水邊に落る椿や開山忌。青

あさひ

あさひつ(妙心寺)開山忌(冬)六月廿八日、京都花園妙心寺にて、空實の虫拂を行ひ、開山國師の袈裟、豐太閤の子、葉君の産衣の鏡等を参観せしむ。||國訪ひ寄りて拜む實や妙心寺。梅我。あさひつ(芽獨活)(毒)ウツに同じ。
 あさひつ(芽獨活)(毒)ウツに同じ。俗説に此菩薩の名を念じて眠れば、戀人を夢に見る。こゝを得といふ。
 あさひつ(妙法火)(秋)七月十六日、京都北山の松ヶ崎に、薪にて妙法の字形の火を點す、大文字の如し。施火の一。||國灯す火の光や妙の一字より何有。
 あさひつ(目赤)小兒などが眼の下脛を指にて引ひらげ、赤き部分を出して人を嘲ること。||あかんめ。赤ん目。
 あさひつ(女敵)妻が人と姦通したること。其夫、仇を報ずること。
 あさひつ(目髪)小兒の玩具。紙にて作り、眼より上に被る假面。
 あさひつ(和布刈)(毒)わづめかり。
 あさひつ(和布刈)豊國早稲明神にて行はれし。和布刈の神事の、こゝを作りし諸曲。

あさひ

あさひつ(目信時)(毒)かはづのめかりごき。
 あさひつ(和布刈神事)(冬)古へ十二月晦日、豊前國企救郡早稲明神(玉依姫外四座を祀る。一説に當社は龍神の旗にて神功皇后三侍を征し給ひし時、子珠、満珠の二玉を持ちて海路を守りしといふ)にて行ひし神事。此社は海邊にありて鳥居の下は石階あり直に海底に續き、干潮の日も其石階の窮まる處を知らず。此夜丑の刻、社人鎌を持ち、神寶の銀を胸に當て、石階を下れば、潮左右に乾き開くに乘じ、海底の和布を一鎌刈りて戻す。若誤つて二鎌を刈れば直に溺れ死す。而して終夜祝詞をなし、元旦に至り和布を供御とし、後之を國主に献すといふ。諸曲和布刈にも作れり。||國屋出してめかりの寒さ知る夜哉。||豊太。
 あさひつ(目離)目はなす。見ることを止む。
 あさひつ(目離)思ふ人に逢はぬこと。
 あさひつ(目鹿市)(秋)芝神明祭。
 あさひつ(目鹿)幻術を行ふ人をいふ。
 あさひつ(首層)奥州南部地方にて用ゐる層。列じ揃にて書きし層にて、無學の人にも分るやうにしたるもの。

あさひ

あさひつ(曲水宴)(毒)さよくするのえん。
 あさひつ(眩)めまひすること。
 あさひつ(目黒)武藏國在原郡目黒村の地。祐天寺、不動堂等を以て名あり。
 あさひつ(萎縮)落膽すること。衰ふること。
 あさひつ(女曹)賤の少女をいふ。
 あさひつ(目曹)賤の小女をいふ。
 あさひつ(目割)(毒)扇の小さきものを干して、葉に目を貫き、四五尾を列れたるもの。||鉄。||國目割焼く隣りに匂ふ挽茶かな。秋光。
 あさひつ(目荒立)(毒)(冬)いかきをふる。
 あさひつ(飯荒)(毒)メシザル。
 あさひつ(牝鹿)(秋)鹿の牝をいふ。
 あさひつ(飯荒)(毒)夏日、荒に飯を容れ置くもの。風を通し腐敗を防ぐ爲なりといふ。||國飯荒に夜は鳴てゐるいご。||
 あさひつ(飯酢)(毒)いすし。
 あさひつ(飯盛)旅宿にありて下女と娼婦を兼ねしものをいふ。
 あさひつ(眼白)(秋)秋群る小鳥、大き鷓鴣(アイ)の如く、眼邊に白濁あり。背翼共に淡緑に、腹部白し。性群居を好み、一

めづりなす

枝に集りて押合ふ。又人家に籠養す。目撃眼見。國寂さを押合ふてゐる目白々な霞夕。

めづりなす「目撃眼」眼白鳥は常に群を好み枝上にて、互に押合ひ中間のもの遂に押出さる。世に群争することの比喩とす。

めづりなす「目撃眼」五月の頃、小蛙を生たるま、懸酔に和して食ふもの。蛙の酔をわけて眼を擦るより名く。國語なれば目撃眼の酔にちぬ。青々。

めづりなす「目撃眼」編笠の一種。眼のあたるところのみ稍や荒く、他は細かく編みしもの。

めづりなす「女謡歌」(毒)をんなたうか。めづりなす「目高」(夏)漢川などに群る、小魚。大さずを出でず。首尾く大く、目高く出づ。丁班魚。夢魚。

めづりなす「女七夕」(秋)七夕の織女といふ。男七夕に對して。國浮草のうかれありくや女七夕 才廣。めづりなす「目垂顔」伏し目になること。又、耻へんこと。

めづりなす「眼路」目の見るところ。めづりなす「目近大名」能狂言の名。

めづりなす

めづりなす「目欠生薬」(秋)芝神明祭。めづりなす「目付柱」能舞臺の正面より左の角にある柱。

めづりなす「愛合月」(秋)七月の異名。めづりなす「著木」ト占の筮竹のこと。めづりなす「著花」(秋)草の名。高さ三四尺、

葉三葉。生し細長く鋸齒あり。秋、紫白花を開く。林の花に似て小し。葉を採りてト占の筮とす。|| 藍草。ガンギ草。鐵掃帚。めづりなす「目無達」目隠の戯をいふ。古語。

めづりなす「目不見鳥」(夏)セウメイ。めづりなす「目上書目」物事を明めんこと。念ふこと。いふ。

めづりなす「目計頭巾」(冬)ガンダウ頭巾の類をいふ。|| キヤ、頭巾。

めづりなす「益母草」(秋)ヤクモサワ。



(ぎぼごめ)

めづりなす

めづりなす「眼張輪」めずり輪のことなり。こいふ。

めづりなす「牙振柳」(春)芽柳。めづりなす「馬鳴菩薩」天竺波羅奈國の人。佛滅後六百年代の始に現れ周の顯王の三十七年歿す。淨土を説く大乘起信論を著す。

めづりなす「面鏡」(春)正月、信州飯田地方にて、風俗、徳鬼の類。其地の舊家に來り、面を被りて鎌倉治世の事を話しかし、節付して語り舞ふもの。國傳のなき世風ふて面被り。寛月。

めづりなす「面被」(秋)九品佛來迎會。めづりなす「面鏡」鏡室のこと。又、佛家の奥納戸をいふ。

めづりなす「面通」飯を盛る木製の器。めづりなす「面無千鳥」目隠しの遊戯のこと。

めづりなす「面鏡」兜に付くる具。鐵製の假面の如きものにて、顔を被ふもの。又、顔より以下を被ふもの、顔のみを被ふもの等あり。又、劍術の稽古などに用ゐる面をいふ。

めづりなす「目不眠」眼もまばゆきまでにのさ。めづりなす「目不休」睡さしせずの義。

も

めづりなす「目途」見る眼もはるかにの義。めづりなす「芽柳」(春)柳の芽の生ひ出しをいふ。|| 芽張り柳。國ほつかりと黄み出たり柳の芽。曉堂。めづりなす「目病辻」京都四條建仁寺町の角をいふ。地藏堂あり。めづりなす「火の燃ゆる」この形容。めづりなす「長唄の三味線の曲」一種。芝居の白(テリ)の間に引くもの。

めづりなす「裳」女の腰より下に着くる衣。カラヤヌの下袴の上に着るもの。又、僧の腰衣を云ふ。

めづりなす「帽子」まうす。めづりなす「家恬」秦の始皇の臣。始皇の命により、兵三十萬を率ゐて匈奴に備へ、萬里の長城を築けり。又、初めて兎毛を以て筆を製す。

めづりなす「燃退」薪などの本まで燃えゆくこと。めづりなす「帽額」御慶の上邊に添ひ縁を被ひし帟。後世、水引こいふもの。めづりなす「痘瘡」いしかさの時。

めづりなす

めづりなす「最上川」羽前國にある大河。めづりなす「藻刈」(夏)水中に繁茂する藻を刈取ること。國藻を刈るや煮もしば鳴く杜宇。乙二。

めづりなす「藻刈舟」(夏)藻刈る人の舟。|| 藻舟。

めづりなす「木工」大工のこと。めづりなす「木槿」(秋)むくろし。

めづりなす「木槿子」(秋)むくろのみ。めづりなす「木犀」(秋)山間に生ずる樹。葉は椿に似てや、長く、細き鋸齒あり。冬測ます。八月葉間に白又は黄赤等の小花を開き、香氣ありて遠く薫すること。沈丁花の如し。|| 麗桂。桂花。國木犀や物音絶し座禪堂。靈巖。

めづりなす「目代」國司の任に赴かざることを代りて其事を司る役。めづりなす「藻屑」藻の塵。水中の芥。

めづりなす

めづりなす「木工頭」むくろのかみ。めづりなす「木芙蓉」(秋)常に略して芙蓉このみいふ。灌木。一根に叢生し、高さは丈に至る。葉互生して桐の如く、五七の尖あり。八月葉間に花を開く。形芍薬に似て白、淡紅等の諸種あり。花期甚長し。國日を帯て芙蓉傾く恨かな蕪村。

めづりなす「木母寺」梅若寺ともいふ。武藏國葛飾郡隔田村に在り。梅若塚のある所にして貞元年間、忠圓阿闍梨の創立せるもの。

めづりなす「木母寺大念佛」(春)梅若祭。

めづりなす「土龍打」(春)うしろもちうち。めづりなす「土龍打」(春)うしろもちうち。

めづりなす「木蘭」(春)木蓮。めづりなす「木蘭舟」木蓮の材にて造りし舟。古へ支那にて優美なる遊船は必ずこれなりといふ。

めづりなす「土龍打」(春)うしろもちうち。めづりなす「木工寮」むくれう。

めづりなす「木蓮」(春)古名木蘭。多く庭院に植うる樹。辛夷に似て、高さ八九尺、乃至數丈に叢生す。葉長さ七八寸、春新

鳥

葉を出し季春枝上に一花づ、開花す。形蓮花に似て瓣狭く、色深紫にして内部紫白を帯び、瓣の如き香氣あり。其一種白花なるを白木蓮と稱す。又、支那の古書によれば、綠樹なるもの、其花の紅黄なるもありといふ。殊に其材は木質細にして黄色を帯び、支那にては古へ遊船を造りしといふ。(木蘭舟參照) 木蓮華。國鳴く鳥の聲も疊るや木蓮華 雅歌。

もれんげ(木蓮華)(春)木蓮。
もれんげ(木蓮子)(秋)むくろじ。
もろ(猛者)勇猛なる人。又、關東の人のこと。畿内の方言。

もじまり(文字韻)和歌の遊戯の一種。前句の終の文字と同音のものを後句の首にかけて次第に詠じ續るもの。

もじりのいし(文字撰石)岩代國信夫郡岡山村に在り。石の長さ二間、巾一間餘。古へ木葉を衣に摺る石なりしといふ。古歌を以て有名なり。

もじりばな(文字撰花)(夏)もちすり花。
もじり(文字止)連俳の用語。一句の終りを體言にて止むること。脇は必ず文字止にする掟なり。

もしほ(藻鹽)古へ、海濱に幾度も沙水

注

注ぎかけて乾し、其藻を燒きて採りし鹽。

もしほ(藻鹽草)藻鹽を取る爲にかき集めて沙水をそ、ける海濱をいふ。轉じて掻集むる雜語よりすべて文書の草稿を云ふ。

もじつり(門司祭)(秋)八月十五日、豊前國門司の入幡宮の祭禮。半人明神の神輿も同所に渡御す。

もす(鴟)(秋)小鳥、形鳩に似て小く、頭背は赤褐色、翅は淡黒青にて黒白の斑あり。咽喉白く、胸赤赤にして小波文あり。眼及嘴等鋭きこと鷹の如く、脚黒く、尾長し。常に小鳥、蛙、虫の類を捕へて食とす。秋の頃鳴く聲頗る高く喧し。百舌鳥。伯勞鳥。○鴟の草壘(カサ)。鴟の早鶩。鴟落(トビ)。○鴟鳴くや入日さしこむ女松原 凡兆。
もす(鴟)(秋)鴟を捕ふること。目を離したる鴟を、固として架頭に居るを待ちて捕ふこと。○ケラハゴ。國此森もさく過けり百舌落し 蕪村。
もす(茂助)物事に勤れたる人をいふ。伊勢の方言。

もす(藻鹽)(秋)草壘は草澤

鳥

(カサ)の意にして、鴟の草をくぐることなり。俳諧にては古より、速賢(カサ)と混じて同じ事とせり。鴟の早鶩の條參照。國草壘をうしなふ百舌の高音かな 蕪村。

もす(早鶩)(秋)夏の頃、百舌鳥(カサ)が其食とすべし小鳥、蛙などを捕り、草木の立枝に刺貫きて晒し置くこと。(俳諧にては古來より、草壘を混じて早鶩のこととし、例句も草壘に多く速賢には稀なり。前條參照) 國日のさして百舌の賢見る葉末かな 關東。

もたひ(鱈)酒を入る、瓶。

もた(鱈魚)一に白豚(カサ)と云ふ。鱈の一種、長さ三四尺、全身灰色にして肉白く脂多し。

もた(藻玉)熱地に産する植物の實。形圓くしてや、扁く、大き一二寸にして栗色なり。烟草入の根付又は管等に造る。

もた(陰曆の十五日をいふ)。

もた(持綱)(夏)四ツ手綱の類。川狩に用ゐるもの。國持綱に二日の月の架つな。

もた(餅梅)(夏)煮梅などの肉をいふ。詳ならず。

餅

もち(望顔)物事の満足すること。

もち(餅草)(春)蓬の異名。

もち(餅配)(冬)餅搗の時、搗きたる餅を知音に贈答すること。國我門へ來さうにしたり餅配り 一茶。

もち(餅配)(春)吉野の餅配。

もち(餅米洗)(冬)餅搗に用ゐる米を洗ふこと。國うたはらに尻なき妹や米洗 大江丸。

もち(餅酒)能狂言の名。

もち(望潮)陰曆十五日の滿潮をいふ。

もち(振擗花)(夏)草の名。莖尺にみたす。葉は稻の初生の葉の如く、四五月淡紅色の小花穂をなして開く、形紫蘇の如し。文字撰花。シンコバナ。水巴賦。

もち(餅搗)(冬)年の暮、新年の用に餅を搗くこと。○餅米洗ひ。餅搗。餅花。餅の札。買餅。引すり餅。餅配。國月代や三十日に近き餅の音桃 青。

もち(望月)(秋)名月。

もち(望月)小澤判部友房といふもの、近江國、守山の湯宿の主となりて、不圖、故主の妻子を宿し、折よくも泊り合せし敵、望月某を、討つことを作りし詭

餅

もち(望月)(秋)胸乘(カサ)に信濃國佐久郡望月の牧より買運する馬。國望月の駒とこそ見れ顔白 金泉。

もち(羊蹄)羊蹄(カサ)ツ、ツの一種。花黄なるもの。○岩ッ、ツ。羊蹄。國宮守はいつも留守もちつ、じ 萬井。

もち(羊蹄)羊蹄(カサ)カサネの色目の名、表紫、裏紅、又は表スハ、裏青。又は表薄色、裏こきスハ。

もち(望月)(秋)もちづき。

もち(網花)(夏)一にトリモチといふ。灌木。樹葉はネズモチに似て、廣く、四五月、細白花を開き實を結ぶ。其木皮を搗きてトリモチに製す。又、網の類の總稱。ネズモチ、カナメノハナ等參照。

もち(餅札)(冬)古へ江戸にて年の暮、餅を搗くこと、乞食の類、家々に来り、餅搗の祝として餅を乞ふ。其乞ひ得たる家は印として門の柱に紙札に判したるものを貼かくといふ。國弱法師我門ゆるせ餅の札 其角。

もち(望夜)(秋)十五夜。

もち(餅花)(冬)餅搗きの時、兒女の

餅

餅に、柳などの枯枝に餅の小粒を貼けて飯ぶこと。正花。又、マユダマの條參照。國れもころに餅花つけの小傾城 蘆白。

もち(餅花煎)(春)京都の俗に、餅花にしたる餅を貯へ置て、涅槃會の日煎りて供物とす。

もち(餅)もちに同じ。

もち(餅鏡)(春)か、みもち。

もち(餅杖)わ、みもち。

もち(餅蓬)(冬)餅搗の時、清き蓬の上に搗きたる餅を並べ置くもの。○青むしろ。國片寄せし琴や机や餅蓬 青々。

もち(餅雪)(冬)雪の白く積りしを餅に比へていふ。又、大なる片となりて降る雪。國餅雪に齒形をつける木履かな 重頼。

もち(海雲)(春)海草。形亂糸の如く、枝條あり、色青黒く滑にして、水面に浮び長さ數尺に至る。春季之を採りて酢などにつけ食用とす。○水雲。海藻。國海苔著にはれ出されたる海雲哉 大江丸。

もち(巻)巻を編みたる具。土を盛りて運ぶに用ゐるもの。

ものづから

ものづから「物相」飯を盛り置る器。
 ものづから「木荒」もこの方のまばらに粗きこと。
 ものづから「本荒萩」(秋)萩の下葉の散りて粗らなること。
 ものづから「基在」櫻井を見よ。
 ものづから「基後」右大臣藤原基家の男。從五位下左衛門佐となる。和歌を以て俊頼と拮抗す。識見卓絶、吟咏秀麗なり。雖も性疎傲にして人望なし。保延四年薨。髪して覺舜と改む。悦目紗の著あり。
 ものづから「元信」持野二世の名畫家。世に古法眼といふ。正信の子にして、初名は四郎次郎、後、大炊助薨して、永仙又は玉川と号す。足利義澄以下三代に仕へ、越前守となり、法眼に叙せらる。永祿二年十月歿。
 ものづから「末馬」延寶頃、若女形として流行せし俳優。
 ものづから「末女塚」昔、津の國蘆屋の里に英名日處女(ワタ)といふ女あり。二人の男に戀はれ、河上の水鳥を射たらん者に歸くべしといひしに、二人とも之を射中てしかば、爲方なくて、遂に生田川に身を投じて死せり。二人の男も女の塚の前に刺違へて死せしといふ。大

ものづから

和物語に見えたる事を作りし謡曲。
 ものづから「戻橋」京都一條堀川に架せる小橋。古へ三善清行の病死せしとき、其子淨藏法師、遂に紀州熊野より父に遇はんとして来りしが、此橋にて父の柩に會し、悲嘆之餘、神佛に祈しに死したる父の蘇りしといふ傳説あり。
 ものづから「最中月」(秋)名月。
 ものづから「藤住虫鳴」(秋)秋の頃、水中の藤に附着して鳴く虫。(一)に蝶の類なり。(二)ワレカラともいふ。古歌に多く詠まれしもの。藤に鳴く虫。折々や藤に鳴く虫の聲沈む。開夏。
 ものづから「海鳴虫」(秋)同前。
 ものづから「物平藏人」上西門院の藏人、藤原経尹の異名。徳大寺實定卿が高倉院皇后多子を訪れしに從ひ、實定の契りたる少侍従の歌に對し、物かはさ君がいひけむ鶴の音の今朝しといひに悲しがるらむと詠せしより此名を得たり。(待宵の侍従の條參照)
 ものづから「物事」物事を關すること。
 ものづから「物臭」(物臭太郎)古き御伽草紙の名。物臭き男の思ひしむ女と契りて立身すること。滑稽を交へて記せるもの。

ものづから

ものづから「物種賣」(毒)種物を賣る人。
 ものづから「初午」物種賣に日のあたる。藥材。もの「さいふものから」の意ある接續辭。例は「春はもの」は「春さいふもの」の義。
 ものづから「物部」上代の兵衛の武士をいふ。後に氏の名となる。
 ものづから「物本」書物に同じ。
 ものづから「物者附」冠り附の類。點者より「云々の物は」といふ語を出したるに、適當の語句を附けて優劣を判するもの。もの「は」。
 ものづから「蕪花」(蕪)流水の底に生ずる草。長さものは數尺に及び柳絲の如し。夏水面に玉露にして黄粟の白花を開く。河渡りかけて蕪の花覗く流かな。凡光。
 ものづから「物中」ものまを。
 ものづから「物申」他人の家を訪れしとき、入口にて案内を乞ふさいふ語。もの「し」。
 ものづから「物見車」元祿二年、可成が談林派の俳諧を論ぜし書。
 ものづから「物申」ものまを。
 ものづから「蕪伏」魚の名。形體に似て尾の首太く鱗堅し、全身黒く尾は赤みを

ものづから

ものづから「蕪舟」(蕪)蕪刈舟(ワカボネ)を器にかけ磨りて米とするを蕪磨りといふ。○蕪干。蕪盛。○蕪磨り埃にくもる月の門。秋夕。
 ものづから「紅絹」紅染の絹布。
 ものづから「紅高四天王」貞享元祿頃、江戸幕府の殿中にて衣服に紅絹の裏をつくることを許されし旗元老功の士四人ありしといふ。
 ものづから「採瓜」(夏) 越瓜(シロ)、胡瓜(ナツ)を薄く刻み、鹽を交へて洗ひて醋に和し食ふもの。○採瓜にいさゝかの酒すゝめけり。
 ものづから「蕪磨」(秋) 蕪を磨臼にかけて穀を去り、玄米にすること。
 ものづから「紅葉」(秋) 草に紅葉といへば風の紅葉をいふ。(風を除きては其樹名を冠して稱す) 黄葉。こうえふ。○初紅葉。薄紅葉。むら紅葉。下紅葉。柿の紅葉。紅葉の錦。照葉。かつ散る。紅葉狩。紅葉の舟。紅葉かはらけ。楳紅葉。ハ、ソ紅葉。漆紅葉。楸紅葉。ネ紅葉。メルテ紅葉。マユミ紅葉。柏紅葉。ナラ紅葉。柿紅葉。梅紅葉。櫻

ものづから

紅葉。マサキ紅葉。ニシキ紅葉。イナフ紅葉。葛紅葉。楓紅葉。オケスイ。(異名)色見草。錦草。妻戀草。ものづから「紅葉傘」中央の部分の青き蛇の目傘を云ふ。元祿頃流行せるもの。
 ものづから「紅葉舞」もみぢのさぬ。
 ものづから「紅葉且散」(冬) 且散るを見よ。
 ものづから「紅葉狩」(秋) 紅葉を觀賞して遊ぶこと。○紅葉見。○御持参の土産の味噌や紅葉狩。太福。
 ものづから「紅葉狩」平維茂、月隱山に鬼女を退治することを作りし謡曲。
 ものづから「紅葉散」(冬) 冬に入りて紅葉の散落すること。○散紅葉。○ちりそめて紅葉に寒し東福寺。涼苑。
 ものづから「紅葉月」(秋) 九月の異名。
 ものづから「紅葉豆腐」泉州堺にて賣る豆腐。豆腐の上に紅葉の形を印す。故に紅葉豆腐と買ふやうと音相同じきより、商人等の祝ひ名けしより始るといふ。
 ものづから「紅葉鳥」(秋) 鹿の異名。紅葉の頃啼く故にいふ。
 ものづから「紅葉土砂」(冬) 紅葉狩などの宴をいふもの。一説に菊の盃に

ものづから

對していふこと。○あらかねの名に土器の紅葉散。一説。
 ものづから「紅葉衣」(秋) カサネの色目の名。表黄、裏スハウ紅又は表紅、裏青。○燭つて見ばやす紅葉衣哉。巴人。
 ものづから「紅葉帳」(秋) 七夕の錦の戸帳をいふ。歌語。
 ものづから「紅葉錦」(秋) 紅葉の美しきを錦にたとへていふ。
 ものづから「紅葉橋」(秋) 鶴の橋。
 ものづから「紅葉舟」(秋) 紅葉にて屋根を葺きたる船。○紅葉のみ舟。
 ものづから「紅葉」(秋) もみぢ。
 ものづから「紅葉袋」種袋の異稱。關西にて多くいふ。其汁をもみ出して用ゐるよりかくいふ。
 ものづから「紅葉巻」(冬) 九月頃、近江琵琶湖に産する鮓。其鮓の紅色に變ずるものをいふ。其味常に勝りて宜し。○紅葉鮓文つけて來ぬ錦織寺。壽亭。
 ものづから「紅葉見」(秋) 紅葉狩。○紅葉見や小雨つれなき町外れ。召波。
 ものづから「紅葉」(秋) 紅葉を勸詞として用ゐる語。
 ものづから「蕪干」(秋) 蕪米を干すこと。
 ものづから「蕪盛」(秋) 蕪を干す語。

もんがく(文覺忌)(秋)七月十八日、一説に廿日、文覺(後白河院の武士、遠藤盛遠の僧名)の忌を修すること。○すきもの汝も、ばて文覺忌 青々。

もんじゆ(文嘉)天孫頃、陸奥國の刀工。源家の寶刀、鋭切、藤丸を鍛はしといふ。

もんじゆ(文珠)人の智を守る菩薩。文珠師利といふ。

もんじゆ(文珠尻)文珠師利を撰りたる語。男色の意をいふ。

もんじゆ(文珠會)(秋)七月八日、京都東寺、四寺(今西寺廢絶す)にて行ひし法會。文珠涅槃經に説く所に依り、賢者に施行をなし、罪障消滅を祈ること。仁明天皇の天長十年、大法師泰然、始めて之を行ひ、市中の諸寺又、東寺四寺に倣ひて行ふといふ。○文珠會や總に賢き兒はなし 鬼實。

もんじゆ(文珠會)(夏)橋立祭を見よ。

もんじゆ(門跡)法親王の住持として居給ふ寺院。又、専ら京都東西兩本願寺をいふ。

もんせん(文選)後武帝の太子、昭明の撰書。周末より六朝迄の詩文を集めしもの。

もんざ(門徒)一向宗のこと。

もんざ(主水)古へ宮内省に屬して、飲水、

水等の事を司りし役。

もんざ(故日)遊廓にて被服を着る祝日の稱。

もんざ(門院)女院(ヤウ)に同じ。

もんざ(桃)(春)桃の花。(秋)桃の實。

もんざ(百葉)(秋)イナヅマ。

もんざ(百箇池)(秋)七箇(ナ)の池をいふ。七夕星を百子姫(ヒヤコメ)といふより出たる語乎。一説に天の河の異稱なりといふ。○星合の盃に水や絃寄山。

もんざ(百子姫)(秋)七夕星の異名。七夕七姫の一。

もんざ(百鳴)(鳥)鳥の幾度となく鳴ること。

もんざ(桃尻)乗馬の術拙くして尻の据らぬこと。

もんざ(桃李)蕪村七部集の一。蕪村と几重の連句を集めし書。

もんざ(百千鳥)(春)春日諸鳥の群るをいふ。○川上は柳か梅か百千鳥其角。

もんざ(桃粥)(春)楊花粥。

もんざ(桃衣)(春)カサネの色目の名。表紅、裏紅梅、又は表白、裏紅。

もんざ(桃酒)(春)三月上巳(三月三

日)の節供に、桃花を浸けたる酒を汲めば、疫疾を除き、顔色を美にす。古へ支那より傳はれる俗。○桃花の酒。○いはけなき盃事や桃の酒 柳下。

もんざ(桃節句)(春)桃花の節。

もんざ(桃花)(春)三月、紅花を開く。

もんざ(桃花)(春)三月、紅花を開く。又、白花、緋花あり。種類多し。○短桃。毛桃。白桃。緋桃。源平桃。早桃。油桃(ダイキ)。一盞桃。枝垂桃。冬桃。(異名)三千代草。御酒古草。○桃咲さむ誰か食さしの實生より 几重。

もんざ(桃日)(春)桃花の節。○桃の日や下部酒もる蒸露 白雄。

もんざ(桃實)(秋)桃の實は夏の末より秋にかけて熟す。種類多し。(桃の花の條参照)。○桃の實や花の名残の紅すこし 桃左。

もんざ(百羽振)(秋)鳴の羽振(ハナ)。

もんざ(桃吹)(秋)秋、木綿(キタ)の實熟し、四裂して架を吐くをいふ。

もんざ(桃柳葺)(春)三月三日、播州明石の町家にて、軒に桃と柳を挿し、節句を祝ふこと。○桃柳くばりありくや女の子 羽紅。

もんざ(桃山)山城國伏見の地。豊太閤が聚舎を築きしところ。

もんざ(百夜草)(秋)菊の異名。

もんざ(桃吹)(秋)ももふく。

もんざ(露)露深く立籠めしを云ふ。俳諧にては雑とす。

もんざ(雀草)(春)櫻の異名。

もんざ(買沙)(夏)大阪天神祭に、神輿渡御の時、朝九ツまで河川の沙干すして渡御の易きをいふ。○夕榮や岸によるべのもらひ沙 奇淵。

もんざ(買盆)(秋)八月の頃、民家に踊などを行ふこと。豊年を祝ふためなりこと。

もんざ(買湯)(春)正月十六日(一説に正月三箇日、七月十五六日なり)、江戸市中の錢湯にて、其日の收入を三助(雇人)に與ふること。故に雇人の客に對する對遇よければ諸人多く入浴す。○買湯に販入連れて來りけり 紅露。

もんざ(鯨)(冬)鯨を漁する具。鯨の頭に兩鉤あるものに木柄を附し、鯨に網を付けて鯨に抛ち之を傷く。漁船より第一番に抛つを一の鯨といひ、二番を二の鯨といふ。○やす。○山嵐一二の鯨の帳つな 蕪村。

もんざ(森上野)伊勢國河野郡の地。

もんざ(守景)久隅氏、牛兵衛といひ、無

羅密と號す。探幽の門人にて名畫工の名あり。又茶事を善す。性磊落、恬淡、奇行に富む。延寶頃の人。

もんざ(守口渡)河内茨田郡守口、或は遠州地方などの名物。守口大根と稱する極めて細長き大根を糟漬したるもの。

もんざ(守武忌)(秋)八月八日、荒木田守武(伊勢の神官、連句に名あり。後人俳諧の祖とす)の忌を修すること。○世の中の月百首せん守武忌 百枝。○守武が獨吟千句を詠じたる書。

もんざ(守信)狩野探幽の名。

もんざ(盛久)平家の侍主馬の盛久、源氏に因はれ鎌倉に斬られんとせし時、親音經の功力にて一命を助けらるゝ事を作りし語曲。

もんざ(茂林)(夏)五月の異名。

もんざ(茂林寺)上州邑樂郡館林にある曹洞宗の寺院。文福茶釜を藏するを以て名あり。

もんざ(杜本祭)(冬)四月、十一月の上申日、河内國南河内郡駒谷村、杜本神社(祭神豊大人(ヒノヒ)、經津主命)の祭禮。上午日、朝廷より幣使立つ。

仁壽三年より始り、後中絶したるも、寛平元年再興す。○杜本の祭にとほん 綿得意 梅盛。

もんざ(守山)近江國にあり。美濃路の驛。

もんざ(諸舉)(冬)神樂歌の一。曲の歌ひ方を示したる名。

もんざ(兩片鳩)(秋)鷹のトヤ出を見よ。

もんざ(諸葉)(夏)賀茂祭を見よ。

もんざ(兩鳩)(秋)鷹のトヤ出を見よ。○兩鳥屋。青鷹。

もんざ(諸子)(春)諸子(シゴ)の略。江湖に産する小魚。形柳葉の如く長さ二三寸、頭小く扁くして、鱗細く、色淡黒にして腹白し。近江の湖邊坂本の諸子川、朽木等の名産にて味美なり。○肥。柳葉魚。初詣子。○ささ波や古き都の初詣子 鳴雪。

もんざ(蜀黍)(秋)たうきび。

もんざ(諸子鏡)(春)もろい。

もんざ(諸白髮)老人夫婦の白髮になれるもの。又、兩髪まで白きこと。

もんざ(師宣)豊川吉兵衛といふ。江戸神田の縫箔業なりしが、畫に妙を得て岩佐又平に私淑し、浮世繪の一派を起す。

老後友竹と名告り、故郷上總保多村へ

遷す。正徳四年歿。
もろはき(蒲葉草)(夏)賀茂葵。
もろみ(蒲味)(秋)酒を醸して未だ流さず、糟の交るもの。|| 結。際。餘韻流(ワビ)。酒酒(ワビ)。國 諸味くむ日和祝の山路かな 藤太。

もろむ(蒲向)(春)シダ(藤葉)をいふ。
|| 賀茂。
もろむ(蒲向)(春)シダ(藤葉)をいふ。
もろむ(蒲向)(春)シダ(藤葉)をいふ。

や

や 俳諧に用ゐるテニチハの内、最も用法多く、最も意味廣き切字。古來十五の用法ありと稱し來り。即ち題や、治定や、稱美や、嘆息や、願や、捨や、下知や、憂や、挑や、口合や、疑や、推量や、押や、腰や、問掛や等其名稱煩はしきも、究極すれば確定と疑問と命令との三意義に約せらる。但し普通文法のやと異なる點は、保許として結語を要せぬ場合多きと、此テニチハを入るゝときは多く終止言となるにあり。注意して古句を吟じ、或は自ら作句するときには自

然悟せらるべし。

やい(焼米)(秋)やきめ。
やい(焼米)(秋)やきめ。小兒なごが美を擲うるさき、美に菓子などを與ふること。|| やいせげ。

やい(炎花)(春)蔓草。竹木に結ひて長じ、葉はついでに似て薄く對生し、形状種々なり。七月葉間に筒状の白花を出す。大き三分ほどにて中心紫なり。其葉臭氣ある故に女青(クダ)といひ、又小兒戯れに花を身に貼りて炎に擬する故炎花といふ。|| 馬醫住める家の後や炎花 友聲。

やい(楊雄)西漢の人。名は雄、字は子雲。吃にして善く談ること能はず、然れども博學宏識にして、法言、大玄經等を著し文章を以て鳴る。初め成帝に仕へ後、遂に王莽に仕へて其徳を頌す。故に後世聖臣相半すといふ。
やい(婁由基)楚の恭王の將。射を善くす。嘗て、百歩を間て、柳葉を射之を貫く、又、楚王に白旗あり。王之を射れば、旗其矢を擲ちて戯る。基をして射らしめんとし、基弓を調へ、矢を矯め未だ發せざるに、旗を擲ちて泣き號

びたりといふ。

やい(楊愔)漢季宣帝の臣。光祿勳たり。性廉潔にして財を輕じ義を好む。然しもの好むて人の讒私を發さず、怨望多く、爲に見せられて庶人に爲る。愔、家居して羊を烹、斗酒を酌み、缶を打て世を慨せしといふ。

やい(楊貴妃)太真といふ。楊玄瑛の女、唐の玄宗皇帝の妃となる。容貌麗麗にして帝の寵を擅にし、遂に安祿山の亂を生ずるに至る。天寶十五年、馬嵬原に縊殺さる。又、楊貴妃の死後、皇帝悲嘆之餘、力士をして其行方を尋れしむること白樂天の長恨歌によりて作りし諸曲の名。

やい(楊貴妃) (春)櫻の一種。花八重にして輪大く、花瓣紅を含みて海棠の如き醉色あり。古へ興福寺の僧、玄宗といふもの、之を愛したれば名くこ傳ふれども、實は其美を貴妃に比したるより名けしものなり。|| 楊貴妃も散際のうき櫻かな 西峯。
やい(楊弓)遊戯に用ゐる弓。長さ三尺餘にて紫檀、花栢などの材にて作り中央の柄を角形とし、上下を纏きて張る。其的は七間半を距て、魚して射る。

古へ唐玄宗、楊貴妃と未央宮の楊にて作りしより起る。

やい(楊花) (春)支那の俗、寒食の日に洛陽の人、楊花(楊花)を粥としいふ。カラモノノカユの類(カ)を作り食すること。|| 一宿す寺の朝や楊の粥 青々。

やい(陽曲)王維、友の安西に使者を送りて陽關に至り、柳を折て「渭城朝雨浥輕塵、客舍青青柳色新。勸君更盡一杯酒、西出陽關無二故人。」の一絶を附す。後世、離別の席には三度此詩を誦するを習とし、之を陽關三疊の曲といふ。

やい(陽月) (冬)十月の異名。
やい(陽虎)古へ支那の匡國の惡人。其容貌、孔子と似たるを以て、孔子が匡國を通りしとき之を取違へられたりといふ。

やい(楊國忠)名は釗(セ)。唐玄宗の寵妃楊貴妃の從兄なり。玄宗帝に仕へ名を國忠と賜はる。嶺山と共に帝の寵を得て宰相となり權を恣にする。後、安祿山の亂に馬嵬原に殺さる。(なほ肉屏風の條参照)
やい(楊) (春)やま。

やい(楊子)名は朱、字は子居。周時代の學者。自己を主としたる宇宙觀を述ぶ。後世墨子と併稱せらる。

やい(楊柳)字は維祖。魏の曹操の臣。弱冠にして才智非凡なり、嘗て江南に至り曹操の隱語を解く。後、操の爲に其才を忌まれて殺さる。

やい(楊州)支那揚子江の河口、南方の地。
やい(楊子雲)楊雄(ヤウ)を見よ。
やい(楊枝貝) (春)備後國福の沖邊に多く生ずる貝。形細長く白くして楊枝の如しといふ。

やい(楊朱)楊子。
やい(楊春) (春)春の異名。
やい(楊) (春)春の頃吹く南風の雨を催すを云ふ。四國地方の語。
やい(楊子江)支那南方を流れ黃海に注ぐ大河。

やい(羊僧)破戒僧をいふ。
やい(羊山)楚の襄王が巫山の神女と契りしところ。(巫山夢(ヤウ)の條を見よ)。
やい(陽中) (春)二月の異名。
やい(羊腸)曲折繁き山路。
やい(楊梅) (夏)やましも。

やい(楊實)前漢の人。年九歳の時、華陰山の北に至り、一羽の黃雀が鶴の爲に捕たれて樹下に墜ち、蟻の爲に苦しめらるゝを見て、之を救ひ歸り、鶴箱の中に養ひて、黃花を餌とする。こ百餘日、毛羽齊ひて飛去る。其夜、黃衣の童子來り、我は西王母の使なりとて其仁愛を謝し白瓊四個を與へて、君が子孫の潔白にして位三事に登ること此瓊の如くならんことを。後果して其子孫榮え、太尉の職を繼ぐもの四世に及びしといふ。

やい(陽水) (夏)六月の異名。
やい(楊墨)楊子と墨子の併稱。
やい(陽明)支那明の大儒。王氏、名は守仁、字は伯安。陽明と號す。浙江省餘姚の人。初め朱學を宗せしが、後、知行合一の説を稱へ、傳習錄を撰す。嘉靖七年、安南に歿す。年五十七。其學を陽明學といひ、我國にては中江藤樹、熊澤蕃山等之を稱ふ。

やい(楊名介)源氏物語中の三箇の秘説の一なり。官名ありて實職なきこと。
やい(養老)美濃國養老の瀧の孝子の故事を述べし諸曲。

しく落ちず。青き時皮を料理に用ゐる又、花のみも用ゐる。○小袖。○黄ばむ袖に暮る、日のさす木の間哉。万歳。
ゆ [温泉] いでゆ。でゆ。○湯。
ゆらん [油雲] 雨雲をいふ。
ゆからかき [柚柑飾] (毒) 蓬萊産に柚、蜜柑等を飾ること。
ゆがび [獲] 弓を射る時、右手にかけて、弦を引くに用ゐる革手袋。
ゆかた [浴衣] (毒) 浴などするとき着る單衣。夏の衣とす。○ゆかたびら。○紫陽花や田の字盛しの湯浴衣。屠龍。
ゆかたのこ [湯帷子] (毒) ゆかた。
ゆかりのこ [緑色] 紫色をいふ。
ゆき (冬) (異名) 雪の花。六花。六出。六の花。玉塵。玉屑。○吹雪。大雪。粉雪。小米雪。ハダラ雪。シヅリ雪。カタビラ雪。餅雪。雪シマキ。雪明り。金雪。雪折れ。雪空。雪催。雪佛。雪布袋。雪兎。雪達磨。雪獅子。雪女。雪垣。雪つ辛。雪の山。雪香。雪の肌。雪消し。雪の朝。雪見舞。雪崩。
ゆき [籠] たら。
ゆき [刺] うつばをいふ。

ゆきあかり [雪明] (冬) 雪の積りしとき光線の反射によりて邊の明るきこと。○雪里へ出る鹿の背高し雪明り。太紙。
ゆきあそび [雪遊] (冬) 雪中にて種々の遊戯をする事。○雪丸。雪丸げ。雪達磨などをいふ。
ゆきあん [雪安居] (冬) 冬安居。
ゆきあらし [雪嵐] (冬) ふぶき。
ゆきあそび [雪遊] (冬) 雪にて兎の形を作る。雪を固く丸め、盆上などに置き、ユヅリハの葉を耳とし南天の實を目としたるもの。○雪兎耳から氷る朝かな。波瀾。
ゆきうち [雪打] (冬) 雪降。
ゆきおとし [雪起] (冬) 北國にて雪の降りんとする時雷鳴のあるをいふ。○雪作。○納豆するさざれや峰の雪作し。丈草。
ゆきかき [雪垣] (冬) 北國地方にて、軒下を往來する爲め、庇を限りて太き丸太を立かけ、實を結び垣とし、深雪の間其中を往來とす。○雪垣に我家うごく成にけり。夢水。
ゆきかき [雪消] (毒) ゆきげ [雪解]。
ゆきかき [雪消] (毒) 二月の異名。

ゆきくつ [雪沓] (冬) 藁又は獸皮などにて作り、雪中を歩むため穿く履。○綱貫。○立り。雪沓造る朝かな。幽室。
ゆきくさ [雪草] (冬) 雪の降らむとする前に起る雪。○雪草。○草臥れて狼行くなり雪草。踏通。
ゆきくさ [雪草] (冬) ゆきしよひ。ゆきくし。○雪草り身の上を鳴く鳥かな。丈草。
ゆきくさ [雪草] (冬) 雪しよひ。
ゆきくさ [雪草] (毒) 初春、野山の雪の解くること。○雪消 (ユキ) 雪とけ。○雪間。雪げ水。雪の雲。雪崩。雪汁。○雪門前や杖で作りし雪解川。一茶。
ゆきくさ [雪消] (冬) 世俗、雪降る頃、粉餅菓子を贈答すること。之を喰へば雪にあたらすといふより行はる。餅、粥などの暖食をなして寒氣を防ぎしより起りしもの。○雪消しの餅と橙くれにけり。露皎。
ゆきくさ [雪解] (毒) 大和國奈良春日社の邊にあり。古歌に多く詠せられし名所。
ゆきくさ [雪解水] (毒) 解けたる雪より出る水。
ゆきくさ [雪解] (冬) 雪まらげ。

ゆきこがし [雪掃] (冬) 雪まらげ。
ゆきこがし [雪掃] (冬) 雪多き地方にて雪中に竿を立て道路の便とす。又雪の淺深を量る爲なりといふ。○標 (シ) の竿。○雪竿に一夜明しの旅鴉。升六。○雪竿や四五年ぶりに降埋む。兎雀。
ゆきこがし [雪掃] (冬) 雪にて獅子の形を作り戯ること。○雪獅子の市に倒れぬ日の病。蕭知。
ゆきこがし [雪掃] (冬) しまさきに雪の降り添ふをいふ。○しまさき来る雪の黒みや雪の間。丈草。
ゆきこがし [雪汁] (毒) 雪のしづく。
ゆきこがし [雪空] (冬) 雪の降らんとする時の空。○白砂のど。が空やら雪の空。兎雀。
ゆきこがし [雪達磨] (冬) 雪にて達磨の形を作り戯ること。○雪川中へ投げ込んだり雪達磨。左入。
ゆきこがし [雪女郎] (冬) 雪女。
ゆきこがし [雪舞] (冬) 降雪を撮り堅めし。之を投合ふを雪舞、雪打と云ふ。○よき君の雪の襟にあづからん。召波。
ゆきこがし [雪解] (毒) ゆきげ。○雪解や妹が炬燵に足袋片足。蕪村。
ゆきこがし [雪投] (冬) 雪打ち。

ゆきくだら [雪崩] (毒) 積雪の下より解けて上方の崩れ落ちること。○雪崩。なだれ。
ゆきくさ [雪割] (冬) 雪降る時寒さを防ぐため粥を食ひて暖をとること。○雪消し。
ゆきくさ [雪残] (毒) 殘雪。
ゆきくさ [雪障] (冬) 樹木、竹石などに積りし雪のしづり落ちる音などをいふ。
ゆきくさ [雪障] (冬) 雪の聲。嵐雪。
ゆきくさ [雪下] (毒) 湿地陰處に生ずる草。一根に數葉布生し、葉は圓扁にして表は緑紫色に白紋、紫毛あり、裏は淡紫色にして毛なし。夏、莖を出し、更に分岐して各、四瓣の花を開く。二瓣は白く長く垂れ、二瓣は紅く短く並ぶ。根より細き紅色の線を出し、處々に葉を生ず。○鴨脚草。虎耳草。きんぎょ。 (一説に雪の下の名によりて冬季とするものあり。然れども花季によりて夏とするを正とす)。○日盛の花や涼しき雪の下。香舟。
ゆきくさ [雪下] 相模國鎌倉にある地名。
ゆきくさ [雪下衣] (冬) カサネの色日の名、表白、裏紅又は表白裏紅梅。

ゆきくさ [雪雪] (毒) 雪の解たる水。○雪汁。○石原や露の雪汁下走る。保吉。
ゆきくさ [雪高濱] 佐渡國羽茂郡小伯村の海濱。眺望よきところにて、古歌に詠せらる。
ゆきくさ [雪肌] (冬) 女の肌白きを雪に比へていふ。連俳に季とす。
ゆきくさ [雪果] (毒) 春の頃、雪の降り終るをいふ。又、二月十五日、涅槃會のころをいふ。雪の降り終りたるを涅槃會の佛の果に對していふ。○名境の雪。○一と曇り見せしばかりや雪の果。曲淵。
ゆきくさ [雪花] (冬) 雪の美稱。○研きなほす鏡も清し雪の花。芭蕉。
ゆきくさ [雪間] (毒) ゆきま。
ゆきくさ [雪信] 名は雪。匠貴と號す。久隅守景の女。狩野探幽の姪孫なり。清原某に嫁す。一説に清原孝信の女。○書法を探幽に學び、女雪信の名あり。元禄十一年歿。
ゆきくさ [雪佛] (冬) 雪佛。
ゆきくさ [雪山] (冬) 古く宮中にて、雪降りし時、藤壺の庭に雪の山を築き、遊

雪川中へ投げ込んだり雪達磨

雪崩

雪消

ゆきせんじやう

ふしの。冬の食品。○湯豆腐に獨秀
 峯の雪見かな 嘯山。
 ゆきせんじやう「湯殿山上」(夏)六月一日、
 出羽國湯殿山に行人等登山し、山上の
 湯殿山神社(大山祇命、大己貴命を祀
 る)に詣づること。○湯殿詣。○湯
 殿山錢ふむ道の涙かな 曾良。
 ゆきせんじやう「湯殿初」(春)新年、初めて湯
 殿にて沐浴すること。○初湯殿。初風
 呂。初湯。○湯殿さかへて去年と今年
 や初湯殿 百中。
 ゆきせんじやう「湯殿詣」(夏)ゆきせんじ
 やう。
 ゆきせん(油團)(夏)紙を厚く張合せて油
 を布きしもの。夏座布團の類。
 ゆきり「裕」物の餘裕あること。
 ゆな「湯女」温泉地にて浴客の給仕を爲
 し、或は色を賣る女の稱。
 ゆのはな「柚花」(夏)柚の花をいふ。摘み
 て料理のツマなどに用ゐる。○花柚。
 ゆのたけ「湯尾崎」陸前國南條郡湯尾村
 にあり。孫杵子の茶屋、城の址な
 どあり。○尾崎。
 ゆばさの「弓湯殿」古へ禁中に設けし御殿。
 射衛を行はせらるゝところ。

ゆきひのせん

ゆきひのせん「指喰女」仇めきたる女をい
 ふ。
 ゆき「木綿」麻の亞皮にて織りし白布。又、
 木綿のこと。
 ゆき「夕暮」(夏)夏の夕、小雛を市場
 又は街などに賣歩くもの。炎暑の時、
 日中は腐臭し易ければ、俗に夕河岸と
 稱して甚賞美す。○夜雛賣。小雛賣。
 ゆき「夕風」夕風や沙漏ちくれば小雛賣 整大。
 ゆき「夕霞」(春)夕の霞をいふ。○
 芥火の白き煙や夕霞 太紙。
 ゆき「夕顔」源氏物語中の人物。始め
 頭中将に愛せられ、後断ちて源氏に死
 じしが、河原院にて物怪に遇ひ俄に死
 す。又、源氏物語夕顔の巻のこゝを作
 りし謡曲の名。
 ゆき「夕顔」(夏)蔓草。春種を下し、竹
 木に纏ひて延ぶ。葉は冬瓜に似て精圓
 く柔毛あり。夏白花あり、夕に開き朝
 に萎む、秋瓜を結ぶ。(次條を見よ)(異
 名)黄昏草。○夕顔や子の這ふてあ
 る門庭 松香。
 ゆき「夕顔」(秋)夕顔の實は瓢
 箪に似て白く、首尾圓く相同じく、長さ
 ものは三四尺に及ぶ。肉を干瓢とし、
 又は中を空にして瓢(ひょう)に作る。○

ゆきやまのせん

夕顔やまのせん果は不形なる 古道。
 ゆきやま「つたう」(夕顔別當)(秋)ヒトリ虫の
 類。形大く細く、褐色にて頭と尾は金
 に似たり。秋の夕に夕顔の花に集り飛
 ぶこと甚猛く、其花蕊を吸ふ。○天蟻。
 ゆきやま「夕顔」(春)三月、夕顔の種
 を蒔くこと。○夕顔の種蒔うや誰が
 古屋敷 晩齋。
 ゆきやま「夕顔」(夏)コガネムシの
 類。好みて夕顔の花に集るをいふ。
 ゆきやま「木綿」馬のたてがみの白きも
 の。
 ゆきやま「結城」下總結城郡に屬す。結城朝
 光の古城址あり。結城袖の産地として
 名あり。
 ゆきやま「夕霧」(秋)夕暮の霧をいふ。
 ゆきやま「夕霧」源氏物語中の人物。源氏
 の長子にして母は養上なり。性質實に
 して學を好み右大将より大納言に至
 る。雲井の雁を妻り、又藤内侍に通す。
 ゆきやま「夕紅」夕陽の紅なるをいふ。
 ゆきやま「夕假粧」(夏)月見草。
 ゆきやま「夕卦問」夕暮、辻に出で初て目
 に觸れし人の詞を以て思ふ人の吉凶を
 占ふこと。連俳に戀の詞とす。
 ゆきやま「夕東風」(春)夕に吹く東風。

ゆき

ゆき「夕在」日暮をいふ。
 ゆき「夕有者」夕暮になればの義。
 ゆき「夕時雨」(冬)夕暮の時雨をい
 ふ。○琴箱を荷ひゆくなり夕時雨
 白煙。
 ゆき「木綿」玉串、注連などにかくる
 木綿のしをいふ。
 ゆき「木綿志天」(冬)神樂歌の大前張
 の曲の名。
 ゆき「夕涼」(夏)夏の夕の納涼をい
 ふ。○關王にひまをもちて夕涼
 蕪村。
 ゆき「夕節」(春)夕刻に催す節振舞を
 いふ。
 ゆき「夕立」(夏)夏日、俄に雲起りて
 大雨至るをいふ。○白雨。ヨダチ。
 ゆき「夕立」(冬)夕暮の波の立て
 る上を飛ぶ千鳥。○夕浪千鳥。
 ゆき「夕月」(秋)夕のみありて後は隠
 る、月。一日より十日頃迄なり。秋季
 にのみ云ふ。○夕月夜。宵月夜。
 ゆき「夕月夜」(秋)夕月。
 ゆき「夕附」(秋)夕暮の日。夕日。
 ゆき「夕月夜」(秋)夕月。

ゆき

ゆき「木綿作」(冬)神樂歌の曲の名。
 ゆき「木綿」鶴の異名。
 ゆき「太白星」夕暮に見ゆる金星。○ゆ
 きつ。
 ゆき「夕露」(秋)夕に降る露。○夕
 露やいくつもしほしき宙の穴 乙二。
 ゆき「夕波千鳥」(冬)夕千鳥。
 ゆき「夕鏡」(秋)おしろいの花の異
 名。
 ゆき「夕鏡」(秋)ゆふまじひ。
 ゆき「夕映」夕陽のものに映るをいふ。
 ゆき「夕映」(夏)夏越越(ツラツラ)。
 ゆき「夕映」(秋)宵のうらより眠ること。
 ○ゆふれまじひ。
 ゆき「夕飯鳥」(秋)ヒカラシ。
 ゆき「夕紅葉」(秋)夕暮に紅葉を見
 ること。
 ゆき「柚餅子」(秋)柚子の汁を絞りて味
 噌、米粉、砂糖などを交へ煮たるものに
 加へ、堅く捏れて蒸したる菓子。秋多
 く作る。○禪僧の世事に賢きゆべし
 かな 其岳。
 ゆき「弓師」弓を細工する人。
 ゆき「柚味増」(秋)秋熟したる柚の肉
 を去り、其殼に味噌を入れ、柚の汁を
 和し、皮のまゝ、火にかけ温めて食ふ。

ゆき

袖の香ありて味美し。○作れば袖
 味噌の釜を喰ひけり 成美。
 ゆき「弓取」ものふ。武士。
 ゆき「弓始」(春)正月七日、武家に弓
 初の儀式あり。徳川時代には將軍の上
 覽ありて甚盛大を極む。○射始。射始。
 ○法音に松のひびくや弓始 羊凡。
 ゆき「弓張月」(秋)月の盈ち或は虧
 けて半圓になり、弓を張れるに似たる
 をいふ。其盈つるときは七八日頃を上
 弦、虧くるときは二十三日頃を下弦
 とす。○弦月。恒月。
 ゆき「弓矢取」武士のこと。○弓取。
 ゆき「山城男山入」山城宮の神
 事に、勅使、神託を蒙ることを作りし
 謡曲。
 ゆき「夢殿」(夢)大和國法隆寺にある堂。聖
 徳太子禪定の室なりといふ。
 ゆき「夢通路」夢のうちに戀人に
 通ふをいふ。
 ゆき「夢野鹿」(秋)古へ攝津の刀我
 野といふ處に雌鹿の鹿あり、一夜雄鹿
 脊に霜ふり毛生へると夢みしを、雌鹿
 に語る。雌はかかれてより雄鹿が、法路
 の野鳥なる妾の許に通ふを妬み、そを

ゆめみつき

ゆり

ゆり

トして、草生ぞしは春に矢の立つ兆、霜降しは肉の鹽漬にせらるゝ兆なり。しし淡路に通はし舟に遇ひて射殺さるべしと。雄之を聞入すして妾の許に通ひしに果して船人に射殺されしといふ傳説。和歌に多く詠じ、又連俳に秋季とす。

ゆめみつき【夢見草】(毒) 櫻の異名。
 ゆめみつき【夢見月】(毒) 三月の異名。
 ゆめみつき【熊野】平宗盛の愛妾熊野、老母の病の爲め、暇を乞へども救されざりしを、花見の宴にて「如何にせん都の春も惜しけれと馴れしあづまの花やちるらん」と詠せしかば宗盛の心和解されて別れゆくことを作りし詠曲。
 ゆめみつき【由良渡】丹後國加佐郡の港。
 ゆめみつき【百合】百合の總稱。|| さゆり。百合の花。○白百合。紅百合。姫百合。山百合。鬼百合。車百合。兒百合。唐百合。秩百合。透百合(ユキカシ)。鹿子百合。黒百合。博多百合。鐵砲百合。糸百合。又、常に山百合をいふ稱。○百合寒し水懸ふ鳥の鳴くなへに 道産。

ゆり【百合】(毒) 支那の古俗、周の禮に四季國中の火を改むる事あり。唐の時は寒食の日、榆柳にて盛りたる火を取り、群臣に給ひ、之を各月に傳ふ。○榆柳の火に立つ民の煙哉 定武。
 ゆり【百合子】祇園の梶子の女。母と同じく歌に名あり。大雅堂の妻、主綱は百合子の女なり。
 ゆり【百合衣】(毒) カサネの色目の名、表赤、裏朽葉。
 ゆり【百合根】(毒) 早春の頃、百合の根を掘りて食用とするもの。(山百合の條参照)
 ゆり【ゆり】(百合根類) (毒) 百合の根。ゆりの根はなほくわす(百合花化蝶)(毒) 俗説に夏日、百合花化して蝶になるといふ。○ 國 百合の葉胡蝶の罷と成にけん 青々。
 ゆり【ゆり】(廣亮) 度公を見よ。
 ゆり【ゆり】(播磨) 頭に物を載せ荷ふとさ載く輪。
 ゆり【ゆり】(百合若) 嵯峨帝の朝の人。四條左大臣公光の子。勇猛にして九州の惣司となり豊後に下る。性睡を嗜み一睡すれば三日三夜悟めずといふ。其傳、正史には見えず、或は日本武尊を附會せしならんといふ。
 ゆり【ゆり】(播磨) 關子を器に容れ頭

に載せて歩歩さしものをいふ。ゆり【廣亮】支那廣東保昌にある山。梅の名所なり。
 ゆり【ゆり】(由良渡) 相模國鎌倉郡にあり。七里ヶ濱の東に連る海邊。|| 由比濱。
 ゆり【ゆり】(遠教經會) (毒) 二月九日より十五日まで、京都上立賣朱雀西なる瑞應山大報恩寺の禪堂にて、東山、智積院の僧徒集り、釋迦涅槃の時、佛弟子の爲に遠戒せる遠教經を誦じ、大念佛を修する式。其經を誦讀して撰するに依り、一に誦讀會といふ。○ 國に燃さめぬ寐耳や遠教經 青々。
 ゆり【ゆり】(維摩) 天竺、毘耶離城中に住せし優婆塞の名。常に一丈四方の岩窟に座禪し、訪者を説法得度せしといふ。釋迦と同時代の人。
 ゆり【ゆり】(維摩會) (毒) 十月十日より、十六日迄、奈良興福寺にて、維摩經を講じ、同寺の願主、藤原鎌足公の忌日の法會を修すること。鎌足公、生前維摩に歸依せられしを以てなりといふ。○ 維摩會や床も替らぬ祖師の筆 素丸。

よ

よ

よ

よ

よ【金】新田(アウ)のこと。
 よ【節】竹、葦などの節と節の間をいふ稱。
 よ【よ】(夜) 夜(毒) 夕曉。
 よ【よ】(廣野) 敵醫者をいふ。
 よ【よ】(雁州) 山城國の異稱。
 よ【よ】(用所) 用(アウ)のこと。
 よ【よ】(夜) 夜(毒) 曾我兄弟、仇討することを作りし詠曲。
 よ【よ】(用付) 連俳の用語。連句の前句の意を敷衍して附るを云ふ。多く嫌ふことなり。
 よ【よ】(夜) 夜(毒) 禁中の御神樂をいふ。又、里神樂の晝より夜にわたりて行はるゝをいふ。○ 夜神樂や押拭ひたる笛の霜 蝶夢。
 よ【よ】(横川) 近江國比叡山三塔の一にして、四塔の北にあり。
 よ【よ】(餘寒) (毒) 春になりて尙、寒氣烈しさをいふ。|| 春寒し。殘る寒さ。餘る寒さ。○ 人立の跡に鳩なく餘寒かな 石壁。
 よ【よ】(與助平) 天明頃、江戸神田小柳町に住みし藥賣。姓を中村といふ。又、轉じて膏藥賣の異稱。
 よ【よ】(夜) 夜(毒) 男女の間の通ふ夜疎くなり

ゆくを云ふ。
 よ【よ】(弁) 弁の小なるもの。
 よ【よ】(夜) 夜(毒) フスマの類。|| 被蓋。○ 獨寐や廣夜夜着の體を噛む 來山。
 よ【よ】(豊) 豊(仁) (秋) すすま。
 よ【よ】(夜) 夜(毒) 夜(毒) 更行くこと。
 よ【よ】(懸) 懸張りし傾つきをいふ。
 よ【よ】(浴佛) (毒) 佛生會。
 よ【よ】(餘花) (毒) 曉る花。○ 餘花未だきのふの酒や豆汁 召波。
 よ【よ】(餘月) (毒) 四月の異名。
 よ【よ】(夜) 夜(毒) よ、ひき。
 よ【よ】(横) 横(毒) 横に横引きたる懸。
 よ【よ】(横) 横(毒) 明がたの雲を云ふ。
 よ【よ】(横) 横(毒) 能狂言の名。
 よ【よ】(横) 横(毒) 宵橋敷。
 よ【よ】(横) 横(毒) 横さまに時雨の降ること。
 よ【よ】(横) 横(毒) 歌、連歌などにて題とせぬ俳諧の季題を云ふ。角力、陣の類。
 よ【よ】(余吳湖) 近江國伊香郡の西部にある湖水の名。
 よ【よ】(夜) 夜(毒) 冬夜、獵夫、狸を捕るため、獵犬を率ゐて山中に狩ること。|| よこぎき。○ 夜夜引や犬心得て山の道 子規。

よ【よ】(横) 横(毒) 織女の異名。
 よ【よ】(横) 横(毒) 金工横谷氏の影りし彫刻。横谷氏は後藤家の門弟にして横谷宗興より起り、其子宗興最も名手と稱せらる。
 よ【よ】(夜) 夜(毒) 月などを賞するによき頃の夜。
 よ【よ】(世) 世(毒) 榮花を極むること。
 よ【よ】(夜) 夜(毒) 月夜など櫻花を賞すること。又、江戸吉原の遊廓にては、花期、仲の町に櫻花を移し植ふ、灯を點じて客を待つ。之を夜櫻といふ。○ 夜櫻や宮挑灯の鼻の穴 屠龍。
 よ【よ】(與謝海) 丹後國與謝郡の海邊。
 よ【よ】(夜) 夜(毒) 秋の夜、寒氣の身に入むこと。(夜を寒み、寒き夜といへば冬なり) ○ おそはれし夢より暮る夜寒かな 青龍。
 よ【よ】(夜) 夜(毒) 尾張國愛智郡の地。
 よ【よ】(葦切鳥) (毒) 小鳥。形鶯に似て大きく、色も同じく、腹下白く、尾稍長し。河邊の葦原に居て、聲中、虫を捕り食ふ。鳴くこと甚喧しくケケシ〜といふ如し。|| 行々子。葦原夜。割葦鳥。新葦鳥。○ 割葦や燈火もるゝ夜の川 屠龍。

カサガサ

カサガサ(カサガサ) (夏) 夏にて張りし障子。障子。國家淺き衣桁の帯や障子。障子。青々。

カサガサ(カサガサ) (夏) よしすだれ。

カサガサ(カサガサ) (夏) 夏にて作りたる障子。夏日の用。ヨシズ。○霞屏風。霞。霞障子。霞月。

カサガサ(カサガサ) 三河國豊橋の別稱。又、山城國京都神樂岡の地。

カサガサ(カサガサ) (秋) 蘆葦の生ざる澤中に出る葦。色白く形小し、秋雨の時多く生ず。○蘆葦。○葦葦や時には浪の手にさばり。季。吉田。

カサガサ(カサガサ) (秋) 吉田淺間祭。

カサガサ(カサガサ) (吉田少將) 梅若丸の父なり。と云ふ。實傳詳ならず。

カサガサ(カサガサ) (吉田淺間祭) (秋) 七月廿二日、甲州吉田、淺間神社(木花開耶姫を祭る)の祭禮。前夜、各家の前に松薪を積み、或は筒形に組み、一齊に点火す。之を火祭といふ。當日神輿一基の外に、富士山の形したる神輿を出す。翌廿三日、神輿假宮を出で、裾野を渡御す。神官、丁、参詣人まで、悉く青芒を手にし従ふ。一に芒祭と稱す。

カサガサ

カサガサ(カサガサ) (吉田中納言) 萬里小路藤原卿をいふ。徒然草に、嘗て鎌倉の中書王にて朝の會ありしとき、雨降りて庭乾かざりしかば、佐々木入道政義といふ。入道して心願を説く。朝場に鶴居を布きて泥土の煩なし。人々感じ、之を中納言に語りしに、藤原卿よ、朝場の故實なる乾砂子の用意なきを嘲りしといふ。

カサガサ(カサガサ) (吉田天王祭) (夏) 六月十五日、三河國吉田午頭天王社(祭神京都祇園社と同じ)の祭禮。源朝朝、島山重忠などの装ひしたる馬上の武士行列し、浴衣、編笠を着し、笹に提灯を結びしを携へしもの之に従ふ。(吉田の花火の條参照)

カサガサ(カサガサ) (吉田大祓) (冬) 節分の夜、(正月)節分ある年は除夜、京都吉田社、卜部家にて祓を行ひ庭上に厄神塚を立て、疫神を封する神札を出す。正月十九日、又、祓を行ひて塚を撤す。之を清祓といふ。○厄塚立。○祓す。○人分出ぬ吉田殿。宋阿。

カサガサ(カサガサ) (吉田清祓) (春) 正月十九日、京都吉田社にて行ふ祓の式。卜部家にて齋場に壇を築き、八方を拜し、後、

カサガサ

カサガサ(カサガサ) (吉田中納言) 萬里小路藤原卿をいふ。徒然草に、嘗て鎌倉の中書王にて朝の會ありしとき、雨降りて庭乾かざりしかば、佐々木入道政義といふ。入道して心願を説く。朝場に鶴居を布きて泥土の煩なし。人々感じ、之を中納言に語りしに、藤原卿よ、朝場の故實なる乾砂子の用意なきを嘲りしといふ。

カサガサ(カサガサ) (吉田天王祭) (夏) 六月十五日、三河國吉田午頭天王社(祭神京都祇園社と同じ)の祭禮。源朝朝、島山重忠などの装ひしたる馬上の武士行列し、浴衣、編笠を着し、笹に提灯を結びしを携へしもの之に従ふ。(吉田の花火の條参照)

カサガサ(カサガサ) (吉田大祓) (冬) 節分の夜、(正月)節分ある年は除夜、京都吉田社、卜部家にて祓を行ひ庭上に厄神塚を立て、疫神を封する神札を出す。正月十九日、又、祓を行ひて塚を撤す。之を清祓といふ。○厄塚立。○祓す。○人分出ぬ吉田殿。宋阿。

カサガサ(カサガサ) (吉田清祓) (春) 正月十九日、京都吉田社にて行ふ祓の式。卜部家にて齋場に壇を築き、八方を拜し、後、

カサガサ(カサガサ) (吉田祭) (夏) 四月申子日(今新暦四月十八日)及十一月申日、京都吉田神樂岡、吉田神社(吉田宮參照)の祭禮。○若葉して祭る日並し。吉田のな。素白。

カサガサ(カサガサ) (義經勢) 裾に黒き縁を取りたる袴。

カサガサ(カサガサ) (夏) 霞障子の類。

カサガサ(カサガサ) (義仲忌) (春) 正月廿日、近江國栗津義仲寺にて、木曾義仲の忌を修すること。○國儀に頂羽本紀や義仲忌。青々。

カサガサ

カサガサ(カサガサ) 大和國吉野郡にあり。又、三吉野といふ。櫻花の名所。

カサガサ(カサガサ) 大和、紀伊兩國の堺にある川。

カサガサ(カサガサ) (春) 櫻の異名。

カサガサ(カサガサ) (吉野) 義經、吉野山を落つる時、義經を遠く落さん爲、靜、舞をなして吉野の衆徒を引止むることを作りし謡曲。

カサガサ(カサガサ) (吉野天人) 天女、吉野山の花に舞ふことを作りし謡曲。

カサガサ(カサガサ) 大和國吉野山にありし南朝の皇居。藤王堂の供僧坊なる寶藏院といへるを假に内裏とし給ひしもの。

カサガサ(カサガサ) (吉野會式) (春) 三月十一日、吉野藤王堂にて法華經千部の修行あり。同日子守明神、勝手明神(兩社共に役行者創建)にも法會ありて、兩社の神輿渡御す。之を花會式とも云ふ。○乞食の花にあつまる會式かな。獨石。

カサガサ(カサガサ) (吉野餅配) (春) 二月一日、和州吉野藤王權現堂にて、守僧(華供といふ)滿堂(饗法といふ)及神人等祈禱を修し、同山の諸堂社へ神酒及び餅を配り、後堂前の廣庭にて參詣に向ひ懸

カサガサ

カサガサ(カサガサ) (吉田中納言) 萬里小路藤原卿をいふ。徒然草に、嘗て鎌倉の中書王にて朝の會ありしとき、雨降りて庭乾かざりしかば、佐々木入道政義といふ。入道して心願を説く。朝場に鶴居を布きて泥土の煩なし。人々感じ、之を中納言に語りしに、藤原卿よ、朝場の故實なる乾砂子の用意なきを嘲りしといふ。

カサガサ(カサガサ) (吉田天王祭) (夏) 六月十五日、三河國吉田午頭天王社(祭神京都祇園社と同じ)の祭禮。源朝朝、島山重忠などの装ひしたる馬上の武士行列し、浴衣、編笠を着し、笹に提灯を結びしを携へしもの之に従ふ。(吉田の花火の條参照)

カサガサ(カサガサ) (吉田大祓) (冬) 節分の夜、(正月)節分ある年は除夜、京都吉田社、卜部家にて祓を行ひ庭上に厄神塚を立て、疫神を封する神札を出す。正月十九日、又、祓を行ひて塚を撤す。之を清祓といふ。○厄塚立。○祓す。○人分出ぬ吉田殿。宋阿。

カサガサ(カサガサ) (吉田清祓) (春) 正月十九日、京都吉田社にて行ふ祓の式。卜部家にて齋場に壇を築き、八方を拜し、後、

カサガサ(カサガサ) (義政忌) (春) 正月六日、京都今出川、相國寺に於て、足利八代將軍義政(義教の子、東山殿と稱す。延徳二年卒す。)の忌を修すること。

カサガサ(カサガサ) (吉水) 大和國吉野山中にあり。後醍醐帝の行宮たりし所。

カサガサ(カサガサ) (吉水知尚) 慈鎮のこと。

カサガサ(カサガサ) (吉水院) 居りしを以て此名あり。

カサガサ(カサガサ) (良峯宗貞) 僧正通昭が在俗の時の名。

カサガサ(カサガサ) (豫) 晋の人。初め范中行氏に仕

カサガサ

カサガサ(カサガサ) (吉野) 義經、吉野山を落つる時、義經を遠く落さん爲、靜、舞をなして吉野の衆徒を引止むることを作りし謡曲。

カサガサ(カサガサ) (吉野天人) 天女、吉野山の花に舞ふことを作りし謡曲。

カサガサ(カサガサ) 大和國吉野山にありし南朝の皇居。藤王堂の供僧坊なる寶藏院といへるを假に内裏とし給ひしもの。

カサガサ(カサガサ) (吉野會式) (春) 三月十一日、吉野藤王堂にて法華經千部の修行あり。同日子守明神、勝手明神(兩社共に役行者創建)にも法會ありて、兩社の神輿渡御す。之を花會式とも云ふ。○乞食の花にあつまる會式かな。獨石。

カサガサ(カサガサ) (吉野餅配) (春) 二月一日、和州吉野藤王權現堂にて、守僧(華供といふ)滿堂(饗法といふ)及神人等祈禱を修し、同山の諸堂社へ神酒及び餅を配り、後堂前の廣庭にて參詣に向ひ懸

カサガサ(カサガサ) (吉田中納言) 萬里小路藤原卿をいふ。徒然草に、嘗て鎌倉の中書王にて朝の會ありしとき、雨降りて庭乾かざりしかば、佐々木入道政義といふ。入道して心願を説く。朝場に鶴居を布きて泥土の煩なし。人々感じ、之を中納言に語りしに、藤原卿よ、朝場の故實なる乾砂子の用意なきを嘲りしといふ。

カサガサ(カサガサ) (吉田天王祭) (夏) 六月十五日、三河國吉田午頭天王社(祭神京都祇園社と同じ)の祭禮。源朝朝、島山重忠などの装ひしたる馬上の武士行列し、浴衣、編笠を着し、笹に提灯を結びしを携へしもの之に従ふ。(吉田の花火の條参照)

カサガサ(カサガサ) (吉田大祓) (冬) 節分の夜、(正月)節分ある年は除夜、京都吉田社、卜部家にて祓を行ひ庭上に厄神塚を立て、疫神を封する神札を出す。正月十九日、又、祓を行ひて塚を撤す。之を清祓といふ。○厄塚立。○祓す。○人分出ぬ吉田殿。宋阿。

カサガサ(カサガサ) (吉田清祓) (春) 正月十九日、京都吉田社にて行ふ祓の式。卜部家にて齋場に壇を築き、八方を拜し、後、

カサガサ(カサガサ) (義政忌) (春) 正月六日、京都今出川、相國寺に於て、足利八代將軍義政(義教の子、東山殿と稱す。延徳二年卒す。)の忌を修すること。

カサガサ(カサガサ) (吉水) 大和國吉野山中にあり。後醍醐帝の行宮たりし所。

カサガサ(カサガサ) (吉水知尚) 慈鎮のこと。

カサガサ(カサガサ) (吉水院) 居りしを以て此名あり。

カサガサ(カサガサ) (良峯宗貞) 僧正通昭が在俗の時の名。

カサガサ(カサガサ) (豫) 晋の人。初め范中行氏に仕

カサガサ(カサガサ) (後) 智伯に仕へて寵あり。智伯の趙襄子に殺さる、や、其仇を報ぜんとして、屢々妻を變じて之を窺ひしも遂げず。襄子其志を憐んで之を釋す。然れども豫譲更に其初志を更めず。身に漆を塗りて厲となり、炭を呑みて啞となりて襄子を覗ふ。襄子之を知りて遂に豫譲を圍み討たんとす。豫譲其逃げられざるを悟り、人をして襄子の衣を乞ひぬを抜いて三度躍りて之を撃ち、臂を報じ志を致して遂に諫に伏すといふ。

カサガサ(カサガサ) (吉原杖) 元祿頃、江戸吉原の遊廓へ通ふもの、多く杖をつけて日本堤を行きしをいふ。よしや風の一。浮世杖。

カサガサ(カサガサ) (吉原風) 元祿頃、江戸吉原の遊廓に遊ぶものの中に、吉原風をて、裾袴高くかき、大小を揃み挿にし、編笠深く冠り、浮世狂の扮装したるを云ふ。なほ吉原杖、吉原結の條参照。

カサガサ(カサガサ) (吉原結) 細の結方の名。吉原風の一。

カサガサ(カサガサ) (夜白草) (夏) 牡丹の異名。

カサガサ(カサガサ) (興次郎兵衛) 小兒の玩具。竹を削りて骨とし、紙を貼りて人形に作り、

まじりかめ

両手の如きものを針金ほどに細く削りし竹にて同じやうに附け、其端に土又はムクロシにて縛をつけ、中心となるべき人形の足のところを指頭に立て、釣合を取れば倒れざるやう作りしもの。

まじりかめ (吉岡藩) 憲法染のツツに同じ。また「縁」ゆかり。よるべ。たのみよる。また「寄見布」(秋) 七月、北海、松前にて六月の頃より別置きし見布を製して食料に作る。

まじりかめ (餘所心) よそよそしき心。また「粧山」(秋) 山粧ふ。また「桃山」(秋) 山粧ふ。また「餘桃罪」彌子娘(ヒシ)の故事より起る。人の愛憎は頼むに足らぬないふ。又、人を軽しめし罪をいふ。(彌子娘の條参照)

また「夜鷹」鳥の類。夜出て、小鳥を捕へ食ふ。怪鳥。又、夜(夜鷹)の(彌子娘)の。

また「夕立」(夏) ゆふだち。また「世縁」(春) 伊勢の世縁。また「四日市」伊勢國三重郡の街。また「四竹」樂器の一種。五寸位の竹片一個づつを両手に持ち拳を閉合して鳴らし拍子とするもの。長崎の一平治とす。

まじり

いふもの創めて作りしといふ。

また「四手」(夏) 四隅に竹を張りたる方形の網。水底に沈め網にて時々、引揚て魚を捕ふ。川狩に用ゐるを以て、季とす。又、四手。四月上旬に月は上り四手網。置人。

また「四手」(四手) 駕籠竹を四本の柱とし、底を竹籠の如く竹にて編みし駕籠。また「四手」(四手) 連併の用語。古體の附方の一。前句の景色に其時候の花弁などな附るを云ふ。

また「四時」(四時) 春夏秋冬の四季をいふ。また「四船」(四船) 古へ遣唐使を發する時出せし船をいふ。大使、副使、判官、主典の四人の船を仕立たる故名とす。

また「四橋」(四橋) 琵琶の異稱。また「四橋」(四橋) 大阪四橋堀に架する上繋、下繋の二橋と、長堀に架する吉野屋橋、辰屋橋をいふ。二流が十字形をなして架せしところへ、井字の如く四方に架け渡したるもの。各長さ二十間餘なり。

また「四衣」(四衣) 僧衣の一種。短き衣にて腰の邊より四つに裂けたるやう作りしもの。芝居にて石川五右衛門などに扮せ

まじり

るどき之を着る。

また「淀」山城國久世郡にある街。又、淀川の略稱。また「淀川」川の名。山城國久世郡より、宇治桂の二流を合して大阪に至り海に注ぐ。源江。よど。

また「淀川」(淀川) 貞徳の著。山崎宗鑑の犬筑波集を批評したるもの。一に新増大筑波集といふ。

また「淀川」(淀川) 花紫なるもの。また「淀川」(淀川) 名は茶茶。淺野長政の女にして秀吉の側となり、秀頼を生む。秀吉の歿後、秀頼を輔けて自ら威權を弄せしが、元和元年五月、大阪城没落の時生害す。

また「夜月出」(夜月出) 夜、外出すること。また「夜月出」(夜月出) 夜、外出すること。また「夜月出」(夜月出) 夜、外出すること。また「夜月出」(夜月出) 夜、外出すること。

また「夜月出」(夜月出) 夜、外出すること。また「夜月出」(夜月出) 夜、外出すること。また「夜月出」(夜月出) 夜、外出すること。また「夜月出」(夜月出) 夜、外出すること。

まじりかめ

神功皇后の御妹、淀姫なりといひ、一説に伊勢向の神とて、天照大神を祀るの祭禮。神輿上を渡御す。還御の時は、堤上築きを以て行列の前後を振へて再び元の道へ還る。故に俗に後が先になる淀祭といふ。

また「夜長」(秋) 秋の夜の長きこと。また「夜長」(秋) 秋の夜の長きこと。また「夜長」(秋) 秋の夜の長きこと。また「夜長」(秋) 秋の夜の長きこと。

また「夜長」(秋) 秋の夜の長きこと。また「夜長」(秋) 秋の夜の長きこと。また「夜長」(秋) 秋の夜の長きこと。また「夜長」(秋) 秋の夜の長きこと。

まじり

いふもの創めて作りしといふ。

また「四手」(夏) 四隅に竹を張りたる方形の網。水底に沈め網にて時々、引揚て魚を捕ふ。川狩に用ゐるを以て、季とす。又、四手。四月上旬に月は上り四手網。置人。

また「四手」(四手) 駕籠竹を四本の柱とし、底を竹籠の如く竹にて編みし駕籠。また「四手」(四手) 連併の用語。古體の附方の一。前句の景色に其時候の花弁などな附るを云ふ。

また「四時」(四時) 春夏秋冬の四季をいふ。また「四船」(四船) 古へ遣唐使を發する時出せし船をいふ。大使、副使、判官、主典の四人の船を仕立たる故名とす。

また「四橋」(四橋) 琵琶の異稱。また「四橋」(四橋) 大阪四橋堀に架する上繋、下繋の二橋と、長堀に架する吉野屋橋、辰屋橋をいふ。二流が十字形をなして架せしところへ、井字の如く四方に架け渡したるもの。各長さ二十間餘なり。

また「四衣」(四衣) 僧衣の一種。短き衣にて腰の邊より四つに裂けたるやう作りしもの。芝居にて石川五右衛門などに扮せ

まじり

るどき之を着る。

また「淀」山城國久世郡にある街。又、淀川の略稱。また「淀川」川の名。山城國久世郡より、宇治桂の二流を合して大阪に至り海に注ぐ。源江。よど。

また「淀川」(淀川) 貞徳の著。山崎宗鑑の犬筑波集を批評したるもの。一に新増大筑波集といふ。

また「淀川」(淀川) 花紫なるもの。また「淀川」(淀川) 名は茶茶。淺野長政の女にして秀吉の側となり、秀頼を生む。秀吉の歿後、秀頼を輔けて自ら威權を弄せしが、元和元年五月、大阪城没落の時生害す。

また「夜月出」(夜月出) 夜、外出すること。また「夜月出」(夜月出) 夜、外出すること。また「夜月出」(夜月出) 夜、外出すること。また「夜月出」(夜月出) 夜、外出すること。

また「夜月出」(夜月出) 夜、外出すること。また「夜月出」(夜月出) 夜、外出すること。また「夜月出」(夜月出) 夜、外出すること。また「夜月出」(夜月出) 夜、外出すること。

五ひき

五ひき(夜一夜)よすがら。よごほし。
 五ひき(宵秋)秋の宵。
 五ひき(宵僧)よひほし。
 五ひき(宵年)元日、新年をいふ。
 五ひき(宵春)春の宵。國討白。
 五ひき(宵法師)よひほし。
 五ひき(宵法師)古へ禁中にて、台密教の僧を招じ、天子の御身を加持祈禱せしめしをいふ。仁壽殿の次の間に召されて夜も修法す。東寺、叡山、三井寺の僧之に與る。嵯峨帝の弘仁年間、空海、護持僧となりしより起り、醍醐帝以來、毎日毎に御物物を賜ひ祈禱せしめらる。故に「みそ、法師」とし呼べり。光徳帝の時、道鏡等の内幸ありしより宵法師は猶かしきもの如く思はるゝに至れり。||宵の僧。夜居の僧。みそか法師。
 五ひき(呼屋)京阪にて遊廓の茶屋を云ふ。
 五ひき(青山) (豊) ホコケヤを見よ。國青山や入日まばゆき唐館 叙字。

五ひき

五ひき(宵闇) (秋) 二十日前後の夜の宵に月出す暗きをいふ。俳季にて特に入月に用ゐ、秋季の詞とす。||宵闇や手の届くもの萩也 萩。||
 五ひき(四葩花) (豊) 紫陽花(アザ)の異名。
 五ひき(呼子鳥) (豊) 古今集三鳥の一。諸説ありて詳ならず、或は猿なりといひ、山鳥なりといひ、鶯、郭公、山鶴などいふ。又、閉古鳥ともいふ。一説に、深山に棲む鳥にして形鳩に似て、頭より尾に至るまで淡黒く、腹赤く、嘴と脚は鳩より長くしてハシ麗に似たり。鳴く聲の物を呼ぶに似たれば名く。||ツ、ドリ。カンコ鳥(閉古鳥)異り喚子鳥の音か。|| 國 松風を首のきけり呼子鳥 言水。
 五ひき(夜振) (豊) 川符。|| 雨後の月誰そや夜振の原白き 蕪村。
 五ひき(丁) 古へ、廿一歳より六十歳までの男子、公役につくもの稱。
 五ひき(頭) 膝頭の後の窪みたるところの稱。|| ヒカガミ。
 五ひき(夜交) 隔夜に同じ。
 五ひき(四町) 源氏物語乙女の巻に出し故事。源氏、六條の京極に方四町を占

五ひき

めて宮殿を造營し、未申の町の殿は秋好中宮を容れ、丑寅の町の殿は花散里の君を容れ、戌亥の町の殿は明石の上を入れ、辰巳には自ら紫の上と共に棲み給ふ。各自好むところに從ひて庭園の模様を作り四時の眺めをつくし給ひしこと。||しまち。
 五ひき(黄泉) 死後、魂の行くところ。||冥土。よもつくに。よみぢ。
 五ひき(詠歌) 詠み出たる歌。
 五ひき(蘇生) 蘇生すること。||甦。
 五ひき(讀始) (豊) 正月、儒家にて經書の讀始をなすこと。其式、孝經の土章又は唐の杜審言が咏終南山の詩を讀ましむるを例とす。|| 讀始は今朝驚に習ひけり 左龍。
 五ひき(黄泉) よみ。
 五ひき(夜宮) 祭禮の前夜、夜籠りをして寝なごするをいふ。||宵宮。
 五ひき(宵宮落) (豊) 山王祭を見よ。
 五ひき(宵宮落) (豊) 山王祭を見よ。千
 五ひき(入風邑) 京都堀河の土俗。嫁入する娘を泊めて入浴させること。腹を調ふ呪なりといふ。
 五ひき(縁ヶ君) (豊) 新年に風をいふ

五ひき

祝語。|| 國 明る夜のほかに嬉し嫁が君 其角。
 五ひき(嫁萩) (豊) 嫁萩(アザ)。
 五ひき(嫁萩) 河内國志紀郡にある堤の名。
 五ひき(嫁萩) (豊) 田野に生ずる草。葉は菊に似、夏、紫黒色の莖を出すこと一二尺、梢に淡紫色の花を開く。單瓣の菊花の如し。春、嫩を摘みて食用とす。|| ヨメガハギ。オムギ。蕪。|| 味ひや櫻の花に嫁が萩 車來。
 五ひき(嫁五器) (秋) ドンケリ。
 五ひき(蓬) (豊) 原野に自生する草。莖白く直くして高さ四五尺に至る。葉は破れて五尖をなし、面は緑にして脊に白毛あり。艾(ア)は此白毛を採りて製したるもの。春其若葉を摘みて餅に和し食ふ。香氣あり。故に餅草の名あり。秋穂を出して細花を出し、實を結ぶ。|| 艾。|| 國 裏門の寺に蓬着す蓬哉 蕪村。
 五ひき(蓬鳥) 蓬菜の鳥をいふ。(蓬菜の條参照)
 五ひき(蓬宿) 蓬など茂りて庇れたる家。
 五ひき(蓬摘) (豊) 摘草を見よ。
 五ひき(蓬衣) (豊) カサネの色目の

五ひき

名、表白、裏青、又は表薄き萌黄、裏こき萌黄。
 五ひき(蓬矢) 蓬にて作りし矢。祭禮に桑葉、蓬矢のこと出しより、古へ宮中にて、男子御出生の時、大臣桑の弓、蓬の矢を執て天の四方を射る禮あり。又、桑弓、蓬矢にて世を治むるといふこと古歌などに多く詠せらる。
 五ひき(蓬生) 蓬などの生茂りて庇れたること。
 五ひき(蓬基) (豊) あやめふくを見よ。
 五ひき(蓬着) 蓬でなつかし不破の板庇。鈍谷。
 五ひき(蓬餅) (豊) 彼岸の頃、家々にて蓬の若葉を摘み、餅に和して搗きたるを互に贈答すること。||草餅。|| 國 句はしや誰しめし野の蓬餅 白雄。
 五ひき(終夜) 暮れてより明るるまで。||よしすから。夜一夜。
 五ひき(黄泉) よみ。
 五ひき(四方春) (豊) 歳旦の祝語。|| 國 目を明いて聞てあるなり四方の春 太紙。
 五ひき(四方山) 四方の山々。又、さまざまなること。
 五ひき(四十四) 連句の一體。五十韻の變數にして其二の真を入句とし、四十四

五ひき

句を一巻とするもの。
 五ひき(神子) 巫女のこと。
 五ひき(典力) 徳川氏の制にて、同心の諸組の隊にして目見得以下に班する士。
 五ひき(西北の風の名) 北國の語。
 五ひき(寄子) 養子を云ふ。
 五ひき(頼政) 源三位頼政の靈、旅僧に宇治合戦の物語をなすことを作りし謡曲。
 五ひき(頼政) 隨流の破邪顯正を談林派の人が反駁したる書。
 五ひき(頼政忌) (豊) 五月廿六日、源頼政(薨して眞運といひ、世に源三位入道といふ。和歌に名あり。治承四年平氏と戦ひ敗れて平等院に自刃す)の忌を修すること。|| 國 隆ふき音座敷や頼政忌 青々。
 五ひき(夜取水) (豊) 瀧の瀧。恩澤水、懸崖水ともいふ。女の經水を取りたるものといふ。
 五ひき(夜秋) (豊) 土用に入りて北風吹き氣候涼しきをいふ。
 五ひき(夜御殿) 天子の御座所をいふ。
 五ひき(夜衣返) 戀人を夢みんと思ふとき、腰衣を裏がへして着て寐ぬれば夢みるを得といふ古の俗説。

五五七

五五七のしき【衣錦】漢の武帝、宰相朱買臣に謂て曰く、富貴にして故郷に歸らざるは錦を着て夜ゆくがごとしと。朱買臣拜辭して故郷に歸りし故事よりすべて甲斐なきこと比へていふ。

五五八のしき【緑水】神前に供へたる水を云ふ。

五五九のしき【甲冑鏡割】(毒) 具足鏡開。五五九のしき【鏡草】(毒) 牡丹の異名。園花は風にちぎれたれども鏡草 不ト。

五六〇のしき【弱法師】河内高安の里なる通俊丸を追失ひしが、後其魂なるを怨み、攝津の天王寺に一七日の修行を引く。時に乞食の弱法師ありて其修行に列りしが、通俊丸を見れば、墓に失ひし我子俊徳丸なり。通俊丸に喜び夜に乘じて、父と名乗り共に故郷に還歸るといふことを作りし謠曲。

五六〇のしき【夜籠】夜も明けざるにの意。五六一のしき【横取臥】横に臥し寐ること。五六一のしき【横取臥】(毒) 六月、十二月の晦日夜、天皇、皇后、東宮の御丈(ツツ)を、節折の命婦して、竹にて量らしむること二度、初度を荒節(ツツ)、次を和節(ツツ)といひ、宮主に竹を切りあてがはしめ、

ら

之を以て御成する式。國君が代や長きためしなるとる節折 湖春。

【塵】塵の牡と普通の馬の牝と交りて生めるもの。甚だ強健にしてよく重荷を負ひ遠きに行く。然れども更に繁殖せず。

【來】山城國にありし刀工の名。國行、國使、國村等は世に高名なり。

【鶴】(信天翁) (ア、ワドリ) の異稱。

【頼家】(頼家) 實相坊と號す。延暦寺の僧。白河帝、頼家に皇子出生の祈願をなさしめ、願ゆるに其望むところを以てせんご約しが、其効現はれて中宮賢子、皇子を生む。然れども帝、約を果し給はざりしかば憤懣して食を絶ら果徳元年、飢へて死す。其怨靈と云なりて害をなしといふ。

【來迎】佛などの出現すること。

【來迎】(來迎) 寛文頃、流行せし玩具商人。紙又は木にて作りし佛の像に、黄色の紙にて扇形の後光を付け、之を張貫の筒の中に疊み納め、中心にあ



(實 來)

る竹の柄にて自在に出入、閉閉するやう作りし。

の。其柄を葉にさし並べて擔ひ、御來迎御來迎と呼び歩き賣る。

【雷魚】(冬) ハ、ハ、ハ。

【雷丸】(雷丸) 源頼光をいふ。

【雷丸】(雷丸) 竹林中に生ずる植物。塊状をなし形槩の如く、外黒く内白く重くして堅し。削りて薬用とす。

【來山忌】(來山忌) (冬) 十月三日、小西來山(十萬堂、湛々翁と號す。宗因門の佛入。大阪今宮に住す。享保元年没)の忌を修すること。園山茶花を机の塵や來山忌 背々。

【魯子】(魯子) 酒器の名。又栗栗を盛るものといふ。形高杯に似て縁高く、内は朱塗、外は黒塗なるもの。

【雷鳥】(雷鳥) 高山の頂に棲む鳥。形地に似て羽色、黄黒斑又は淡褐、白毛を雜へ、眼の上に美しき赤斑あり。脚及指にも褐毛又は白毛を生ず。冬に至れば

五五八

全身白色に變ず。

【雷電】雷公の神靈、雷電となつて悪臣を取殺さんとすることを作りし謠曲。

【禮拜講】(毒) 三月十二、十三日、比叡山延暦寺、大宮權現社にて、法華八講を修す。之を本禮拜講といひ、同月廿四、廿五日、同山十禪師社にて行ふを新禮拜講とす。傳へいふ、昔時叡山の門衆、儒者に傾きしを山王大師歎て昇天し給はんとし、全山の草木の色を變ぜしむ。門衆大に驚きて法華八講を修し、其怒を慰めしより起ること。天齋禮拜講。園禮拜講清きにかへれ三千坊 友元。

【雷打石】太古の民の武器なりとて古墳、土中より發見する石器。長さ三四寸、斧又は矢尻の如き形し、多く黒褐、灰色なり。

【老翁】(老翁) オイウケイス。

【朗詠集】和漢古今の詩歌の佳作を集めし書。四條公任卿の撰みしもの。

【亂】(亂) 亂りがはしきこと。騒しきこと。

【珊瑚】(珊瑚) 青珊瑚をいふ。

五五九

【浪化忌】(浪化忌) (冬) 十月九日、浪化(東本願寺の連枝、越前中井波瑞泉寺の住職、芭蕉門の俳人)の忌。園山茶花の陰に、います。浪化佛 櫻真。

【癆瘵氣質】(癆瘵氣質) 肺病にかゝりし人といふ。

【老莊】(老莊) 老子と莊子をいふ。

【老子】(老子) 楚の人。姓は李、名は耳、字は伯陽、周室衰へて散關を出る時、令尹闕喜の爲に道德經(世に老子といふ)を書殘すといふ。

【老子經】(老子經) 老子の道德を説きし書。老子。

【狼籍】(狼籍) 亂暴すること。

【狼籍】(狼籍) 物の散亂れさま。

【可憐】(可憐) 可憐に見ゆること。

【老杜】(老杜) 杜子美をいふ。老は推稱なり。

【老梅】(老梅) 香の名。沈の一種。

【老武者】(老武者) 能狂言の名。

【羅漢】(羅漢) 佛の稱號。阿羅漢の略。後世に再生せざる者の意。十六羅漢、五百羅漢等あり。常に瘦骨稜々たる風に畫る。

【洛陽の略】(洛陽の略) 洛陽の略。

【樂阿彌】(樂阿彌) 元和頃の人。何處の産

五六〇

なるやを知られず。常に赤き手拭を冠り小唄を誦ひて江戸の町を歩行き、人々に鏡を與へて身を養ふに餘れば、他の人に施し、又、或時は借馬に乗り、供を雇ひて引連れ、芝愛宕山に詣りしなど奇行多かりしといふ。

【樂阿彌】(樂阿彌) 能狂言の名。

【落居】(落居) 落着に同じ。

【落句】(落句) 詩歌の終の句をいふ。

【落花】(落花) 櫻花の散ること。散る花。落花かな 几童。

【落款】(落款) 書畫に筆者の署名、印を捺すこと。

【落慶】(落慶) 工事の落成したる祝をいふ。

【落索】(落索) 食餘したる酒肴をいふ。又、伊勢國にて魚肉のアラのこと。

【落子】(落子) 輪盤のこ。

【落柿舎】(落柿舎) 山城國嵯峨小倉山の麓にある向井去來の棲みし舊庵。又、去來の別號。

【落日】(落日) 太陽の入りんとするをいふ。

【落首】(落首) 風刺の意ある詩歌を落書すること。

ろくろくしよ

ろくろくしよ「落書」ろくろくしよ。又「落飾」遊藝して僧鉢となること。

ろくろくしよ「落題」題意に外れて詠みし詩歌。又、俳諧にては題を前書として、句中にはたゞ其意のみを詠み、題の文字を現さぬをいふ。即ち次の例の如し。

春 雨
綱が立て綱が鳴の雨夜かな

人の世や長閑なる日の寺林

ろくろくしよ「樂天」白樂天のこと。

ろくろくしよ「落梅風」(夏)五月に吹く風をいふ。

ろくろくしよ「駱賓王」盛唐の詩人。七歳にして詩をよくし、後、王勃等と共に文章の四傑と稱せらる。後人、其文を集めて駱丞集といふ。

ろくろくしよ「洛陽」支那の都の名より轉じて我國の帝都をいふ名。即ち京都のこと。略して洛とのみいふ。

ろくろくしよ「洛陽花」(夏)大和撫子。

ろくろくしよ「樂徳」文徳の頃、秀吉の聚樂第にありしとき、其地の土を以て陶工、朝四郎の燒き初し茶碗の名。手づくれにして色白く質脆し。後京都の名産となる。

ろくろくしよ

ろくろくしよ「羅什」鳩摩羅什(ジワシ)又は羅什三藏といふ。天然の僧。支那に歸化し宮女に四人の子を産ましむ。法華、維摩等の經文を漢譯せり。

ろくろくしよ「羅生門」京都舊内裏の朱雀門に對して南にありし大門。又、波邊綱、羅生門の鬼と謂ふことを作りし談曲。

ろくろくしよ「羅刹」黒身、赤髮にして縁眼の鬼。人を食ふといふ。

ろくろくしよ「棘蓮」(夏)其根塊を汎稱し、手こす。蕪の類。葉は根元より叢生し、蕪に似て細く、三稜にして内空なり。秋、數葉を出して小紫花開る。ニラの花より大く、實もニラに似て根は野蕪の如し。夏、根の傍に子根を生ず。之を漬物などにして食ふ。

ろくろくしよ「辣蕪漬」(夏)前を見よ。

ろくろくしよ「羅庚」北海に産する海獸。其毛皮は價甚高し。

ろくろくしよ「羅次」物の順序をいふ。

ろくろくしよ「羅久貝」螺貝、アラム貝、下りては鮑貝の類の内面の青白色に紫線を帯びたるを漆器の面に嵌入したるもの。

ろくろくしよ「羅」(秋)ふらばいふ。

ろくろくしよ

ろくろくしよ「羅」(冬)十二月の異名。臘日をもいふ。

ろくろくしよ「羅浮山」支那湖南省洞庭湖の南にある山。麓に梅樹多く、仙女樓むといふ。(羅浮仙女を見よ)

ろくろくしよ「臘日」(冬)支那の古俗。冬至後第三の戌日に臘神を祀ること。其稱時代により異り、夏に嘉平、殷に清祀、周に蜡祭、漢に改て臘といふ。臘祭。臘月。

ろくろくしよ「羅浮仙女」傳説に支那羅浮山の梅樹に棲むといふ仙女。南人、趙師雄(其傳參照)曾て此山に遊び、日暮れて一美女に逢ふ。淡粧素服、精麗にして芳香人を襲ふ。師雄相携へて飲し醉臥す。覺めて後、四邊を見れば身は大梅樹下において月既に傾けり。其女は即ち梅の精なりしといふ。

ろくろくしよ「臘梅」(冬)灌木。叢生して大なるは丈餘に至る。葉長三三四寸、狭くして尖り肌粗なり。冬の末、九瓣の花を開き下垂す。萼縁に細長く黄白色にして蜜蠟の如く、内に紫黒の小蠟丸出す。其香梅の如く質穢に結ぶ。臘

ろくろくしよ

梅も咲て落着く花屋かな 浮來。

ろくろくしよ「臘八」(冬)十二月八日。古へ釋迦如来が檀特山にて修行十二年の後、此日菩提樹の下にて、曉の星を見て忽然、大悟し初て成道出山したる日なりとて、佛徒之を尊み、臘八粥とて、昆布、大豆、串柿、粉薬等を混じたる粥を作り吹ふ。一に温精粥(ワカシ)といふ。又禪家にては釋迦の成道に倣ひて、十二月一日より八日まで、大接心と稱し、晝夜座禪して閉眼せんと修行す。成道會。臘八や和尚漸くねびまさり雁宕。

ろくろくしよ「臘八粥」(冬)前を見よ。

ろくろくしよ「臘八の粥や佛のれぶり精 關更。

ろくろくしよ「蠟淚」蠟燭の蠟の燃えて流るること。

ろくろくしよ「炭酸」炭酸を水に溶解せるもの。夏の飲料。圓賣れ残る雨の夕のラムネ哉 守水老。

ろくろくしよ「想像」意を示す語。

ろくろくしよ「想像」想像の鳥。風凰に似て五彩、青色多し。祥瑞あれば現るといふ。

ろくろくしよ「備衣」備衣などの縁につくる横幅の帛。

ろくろくしよ「蘭」(秋)人家に植盆盆栽とする草。

ろくろくしよ

葉に根より叢生して細長く高さ一二尺に至り冬枯れす。秋の初葉を抽て、一室に數花互生す。瓣は上左右の三方に開きて反り、内の二瓣は相對して前方に垂れ共に青黄に紅線あり。他の一瓣は黄白色に紅點あり。香氣幽高にして受すべし。春蘭に對し秋蘭の名あり。

蘭 詩を作る姿勢ちけり蘭の花 朋竹。

ろくろくしよ「蘭」(夏)老鸞。

ろくろくしよ「蘭」(夏)老鸞。

ろくろくしよ「蘭」(夏)老鸞。

ろくろくしよ「蘭」(夏)老鸞。

ろくろくしよ「蘭」(夏)老鸞。

ろくろくしよ「蘭」(夏)老鸞。

ろくろくしよ「蘭」(夏)老鸞。

ろくろくしよ「蘭」(夏)老鸞。

ろくろくしよ「蘭」(夏)老鸞。

ろくろくしよ「蘭」(夏)老鸞。

ろくろくしよ

蘭の葉其他の芳草を湯に入れ、沐浴すれば邪疫を祓ふといふ。蘭湯に浴し錦を着たりけり 碧梧桐。

ろくろくしよ「蘭」(夏)老鸞。

ろくろくしよ「蘭」(夏)老鸞。

ろくろくしよ「蘭」(夏)老鸞。

ろくろくしよ「蘭」(夏)老鸞。

ろくろくしよ「蘭」(夏)老鸞。

ろくろくしよ「蘭」(夏)老鸞。

ろくろくしよ「蘭」(夏)老鸞。

ろくろくしよ「蘭」(夏)老鸞。

ろくろくしよ「蘭」(夏)老鸞。

ろくろくしよ「蘭」(夏)老鸞。

ろくろくしよ「蘭」(夏)老鸞。

ろくろくしよ「蘭」(夏)老鸞。

あがら

事より出づ。

りかか(柳下惠)支那春秋時代の賢者。又の名は展獲、字は季。魯の僖公に仕へ士師となり、三度黜けられしも耻せせず。其事蹟多く経書に出づ。其弟に笠陌あり。

りかんにく(龍眼肉)熱地に産する龍眼といふ喬木の實。形モクゲンシの如く圓く、外皮褐色にして細かき皺あり。殻中に玉石色の肉あり。乾燥せしものは黒褐にして味甘く、荔枝の如し。砂糖液として食ひ、又、薬用とす。

りかづつ(琉球龍馬)一(季)ヒラトツ、ツ。

りかげん(劉阮)漢の明帝の時、劉晨、阮肇と云ふ二人、薬を探らんとて天臺山に入り、迷ふて仙境に至り、仙女と契る。半年の後、家に還れば既に七代の子孫なりしといふ故事。

りかげん(龍華會)一(聖)佛生會をいふ。彌勒菩薩、龍華と名くる菩提樹の下にて說法せしを以て、龍華會といひしを、轉じて釋迦降誕會の稱とす。

りか(輪鼓)鼓の胴の如く長くして中の括れし形をいふ。立鼓。

あぐろ

樓樂院と號す。關白基熙の子。産髪して貞覺といひ樓樂院と號す。

りか(柳子厚)柳宗元。

りか(流傳)一(季)曲水の宴をいふ。

りか(龍樹)四天生の高僧。馬鳴菩薩の弟子迦毘羅尊者に從ひて修行す。釋迦後五百年に於て大乘佛教を宣布し、諸宗の中興の祖にして大智度論を作る。龍樹菩薩。

りか(劉松年)錢唐の人。畫に名あり。清波門に居するを以て、世人晴門劉と呼ぶ。宋の寧宗の時、「晴隱圖」を畫して進獻す。

りか(柳絮之才)晋の謝安が雪の降るは何に似ると問ひしとき、其兄謝奕の子の耶、「鹽を空中に撒く」と答へたるに、謝奕の女、道暹は、「未だ柳絮の風によりて起るに若む」と答へたる。故事より、女子の文學の才あるをいふ。

りか(龍泉太阿)晋の時、雷煥といふ者天文を考へ、龍泉の豐城の地中より掘出せし二口の寶劍の名。後水中に入り双龍と化すといふ。

りか(柳宗元)唐の文人。字は子厚、河東の人。文章をよくし、韓退之と名を齊す。

あぐろ

りか(陸連)泉州堺、願本寺の僧、白菴と號す。後、遷俗して薬種商となる。性音楽を好み、一種の俗謡を謡ひ初む。陸連節といひ、今の燈明の源をなす。文殊師利の人。

りか(龍體)一(秋)りんたう。

りか(龍登天)一(季)龍は春分に雲氣を得て昇天し、秋分に淵に潜むと云傳ふ。故に古來季とし味す。龍天に我詩神に上るべし。青々。

りか(龍燈)一(秋)七月十三日夜、越中國新川郡眼目山(ツツジ)の庭の松に、燈火自ら現出す。一は立山より來り、一は海中より來る。之を山燈龍燈といふ。不知火の一種なり。龍燈や空をさくもる宵の程。知中。

りか(陸冬)一(季)十二月の異名。

りか(龍頭大)一(聖)稻荷祭を見よ。王の鼻。

りか(龍鬚)一(聖)ばてもんぞう。

りか(劉邦)漢高祖のこと。

りか(劉伯倫)劉伶を見よ。

りか(劉備)蜀漢、昭烈帝の名。

りか(龍鬚)花産の類。細鬚を五色に染めて織りしもの。

りか(龍紋)織物の名。白地の紺布に

あぐろ

て、地厚く、隸糸の織目を高く出したるもの。古へカミシモに用ゐしもの。

りか(龍門山)一(聖)鯉山(龍門)。

りか(劉郎)天臺山に仙女と契りし劉晨(リウケン)を見よの故事より起り、遊治郎の稱。

りか(柳里巷)柳澤淇園をいふ。名は里巷、字は公美。和州郡山の藩士性不羈、而も博學多識にして、人の師たる。技十六に及び、尤も書畫に秀たり。常に客を愛し、其賢愚貴賤を分つことなし。池大雅とは最も好かりしといふ。寶曆八年歿。

りか(劉伶)晋人。字は伯倫。容貌甚だ醜にして志氣曠達、建威將軍となる。竹林七賢の一人なり。酒を嗜み、酒壺を携へ、勸を荷はせて往き、曰く我死せば必ず其死したる處に埋めよと。

りか(龍王祭)一(聖)六月三日、淡路國由良濱の海中、西南に突出せる大石の上にて、由良八幡の祠宮、供物を備へ祭儀をなすこと。此時數萬の龜群りて祭儀了るまで去らずといふ。

りか(李延年)漢武帝の寵臣。李夫人の嫡弟。

りか(利休)名は宗昂。泉州堺の人。田中氏、初名は興四郎。十七歳にして茶事を紹臨に學び、信長に仕へしが後、秀吉に侍して恩遇せらる。晩年利休居士の號を賜り、掃菴と號し、千家の祖となる。庵は大徳寺の名僧古溪に學ぶ。後、秀吉の怒に關れて死を賜はり天正十九年二月、年七十一にして歿す。

りか(利休忌)一(季)二月廿八日、京都紫野、大徳寺聚光院に於て、利休の忌を修す。茶家にて此日茶會を催す。

りか(利休忌)大名に問ふ風加減。珠樹。

りか(鯉魚風)一(秋)九月の頃吹く風をいふ。李賀の詩に門前流水江陵道、鯉魚風起芙蓉老とあり。

りか(陸羽)唐の隱士。字は鴻漸。茶を嗜み、茶經三篇を著す。

りか(陸凱)支那三國の時、吳の陸遜の族子。字は敬風。孫皓に仕へて丞相となる。范滂宗と友とし善し。曾て江南にて梅花一枝を折り長安に詣り、范曄に贈る。其詩、折花逢驛使。寄與隴頭人。江南無所有。聊贈一枝春。

りか(陸機)晋の陸機、京師に在る時、弟の同大の頭を書簡を結付け、家郷に送りしに、犬復た返事を待て再び浴

に歸りしといふ故事。

りか(陸軍始)一(季)新曆正月八日、東京青山に於て、都下の陸軍の各隊を召集し、天皇陛下臨御ありて、觀兵式を行ひ給ふこと。國松の陸軍始終りけり。夏大。

りか(六花)一(冬)雪の異名。

りか(六藝)禮樂射御書數の六種をいふ。

りか(六韜)太公望の作りしといふ兵法書の名。文武龍虎豹犬の六韜に分つ。

りか(李廣)前漢の人。其家代々射法に長ず。武帝景帝の二代に仕へ、匈奴を討ちて功あり。曾て山中に獵し、石を虎と誤りて射しに之を貫きしと云ふ。

りか(龍體)楚の屈原の辭賦を集めしもの。又、屈原の作の外、其門下、後人の作を集めしを楚辭といふ。

りか(驪山)支那陝西、西安府にある山。古へ唐の玄宗、ここに華清宮(驪山宮)といふを營み、楊貴妃と共に温泉に浴したること。

りか(李斯)秦の人。荀子に從ひて帝王の術を學び、秦に仕へ始皇を佐けて天下を一統し丞相となる。苛法を布き、天

あぐろ

あぐろ

あぐろ

りやうせん

りやうせん【兩嶺】連俳の用語。連句を二人にて付けあふこと。(獨吟に對して)

りやうせん【兩嶺】連俳の用語。連句に、神紙、釋教に戀を結ばば次の附句は其何れも、縁ふないふ。

りやうせん【涼月】(秋)七月の異名。

りやうせん【夏月】(冬)十月の異名。

りやうせん【兩河川】(夏)八月初旬、東都兩河川、兩國橋邊にて、花火を打上げ遊船多く出づること。國音聞や女着飾る川開。翠華。

りやうせん【涼傘】(夏)ひがき。

りやうせん【梁山伯】小説水滸傳に出し百八人の豪傑の集りしところ。轉じて一般に豪傑の集ることを。

りやうせん【兩社祭】(夏)五月廿三日、江州坂本なる若宮權現、酒井明神の兩社(同所の産沙神)の祭禮。

りやうせん【靈鷲山】わしのやま。

りやうせん【夏宵】(秋)十五夜。

りやうせん【兩大師詣】(春)正月三日、江戸上野、兩大師堂(慈惠大師、真源僧正。慈惠大師、天海僧正の像を安置す。)に諸人參詣すること。

りやうせん【靈塵抄】神樂、備馬樂の歌を註釋したる書。後白河法皇の作。

りやうせん

りやうせん【兩物】(春)正月、開豆(ヒラマシ)、開午房(ヒラマシ)の二品を小土器に盛り、練煮膳の傍に置くもの。又料理の物とも云ふ。國 天地に祝ひくらべよ兩の物竹亭。

りやうせん【合法】(春)山野に自生する樹。山茶の一種にして、高さ五七尺、樹皮灰白、葉は茶又は櫻の若葉に似て、四五葉一所に簇生す。秋穂をなして五瓣の小白花を開く。實は圓くして小く熟すれば褐色なり。春三月頃、其若葉を採り、飯に交へ炊きて合法飯とし、又葉を蒸し乾したるものを煮て茶の如く飲料とす。||はたつもり。山茶科。國 山里や旅にしあれば合法飯。糖雨。

りやうせん【兩部】佛教の本地垂迹説により、神佛混合して教を立たる宗派。又、儒教を加へ兩部習合と云ふ。

りやうせん【夏辨】江州志賀の人。南都東大寺の別當にして僧正となる。聖武帝の信を得て、十六丈の盧舎茶佛を建立す。寶龜四年十一月十六日没。

りやうせん【梁山伯】諸葛孔明の作りし詩。齊の勇士田馮、公捷、古治の三人が、二桃を争ひて共に命を殞せしを嘆じ、竊に當時三國割據の意を偶せしも

りやうせん

りやうせん【夏夜】(秋)十五夜をいふ。||夏宵。

りやうせん【兩六波羅】北條氏の時代に、京都六波羅にありて京を鎮護せし役所をいふ。

りやうせん【夏宵】(秋)十五夜をいふ。

りやうせん【夏宵】(秋)十五夜をいふ。

りやうせん【夏宵】(秋)十五夜をいふ。

りやうせん【夏宵】(秋)十五夜をいふ。

りやうせん【夏宵】(秋)十五夜をいふ。

りやうせん【夏宵】(秋)十五夜をいふ。

りやうせん【夏宵】(秋)十五夜をいふ。

りやうせん【夏宵】(秋)十五夜をいふ。

りやうせん【夏宵】(秋)十五夜をいふ。

りやうせん【夏宵】(秋)十五夜をいふ。

りやうせん【夏宵】(秋)十五夜をいふ。

りやうせん【夏宵】(秋)十五夜をいふ。

りやうせん【夏宵】(秋)十五夜をいふ。

りやうせん【夏宵】(秋)十五夜をいふ。

りやうせん【夏宵】(秋)十五夜をいふ。

りやうせん【夏宵】(秋)十五夜をいふ。

りやうせん【夏宵】(秋)十五夜をいふ。

りやうせん

りやうせん

りやうせん

りやうせん【呂度劍】呂度は魏の人。昔て刀工、其佩ぶる處の劍を相して曰く、必ず三公に昇りて此劍を佩ぶべしと。

りやうせん【呂度】王祥に謂て曰く、苟も其人に非れば劍或は害をなさんとして之を王祥に與へしに、果して三公となれり云ふ故事。

りやうせん【呂后】漢高祖の后。性剛毅にして、高祖を輔けて天下を平ぐ。高祖、戚夫人を愛し其生子、如意を立て、儲貳とせんすとす。呂后張良に謀り、南山四皓を召して其子の輔佐とし帝の心を定む。高祖崩じて後、戚夫人を殺し、惠帝の喪を發して後、遂に呂氏の一族を内外に居らしめ、政を執るといふ。

りやうせん【魯人】(魯)唐の代にありし俗。魯人形の類にして、三月、魯人を設け餅餅を食ふといふ。

りやうせん【呂尙】周時代の賢者。老いて東海に釣る。時に周の文王將に獲せんとしてトせしに「龍に非ず、鱗に非ず、鱗に非ず獲る所、龍王の輔ならん」といふ。果して渭水の邊に呂尙に遇ひ、大に悦び「之れ先君太公の望む人なり」とて、太公望と號び、共に車に乗りて歸り、立て、師となし師尙父といふ。

りやうせん【呂馬童】楚の項羽に仕へし馬丁

の名。

りやうせん【呂翁】盧生に邯鄲の枕を貸せし道士。(盧生の條參照)

りやうせん【魯藩】(魯)魯の藩。

りやうせん【李陵】(李)李陵の臣。侯賢を以て丞相に上り、常に計を以て人を傾く、世人評して口に蜜あり、腹に劍ありと云ふ。

りやうせん【李陵】前漢武帝の臣。李廣の子。匈奴を討つて利あらず、遂に之に降る。蘇武が漢に歸る時、河梁に於て詩を作て別を惜む。後世五言詩の始なりといふ。

りやうせん【梨園】劇藝のこゝ。轉じて俳優をいふ。

る

る【場】(る)【の】(る)。

る【場】(る)【の】(る)。

る【場】(る)【の】(る)。

る【場】(る)【の】(る)。

る【場】(る)【の】(る)。

る【場】(る)【の】(る)。

る【場】(る)【の】(る)。

る【場】(る)【の】(る)。

る【場】(る)【の】(る)。

る【場】(る)【の】(る)。

る【場】(る)【の】(る)。

る【場】(る)【の】(る)。

る【場】(る)【の】(る)。

る【場】(る)【の】(る)。

る【場】(る)【の】(る)。

る【場】(る)【の】(る)。

る【場】(る)【の】(る)。

る【場】(る)【の】(る)。

る【場】(る)【の】(る)。

る【場】(る)【の】(る)。

る(誄)人の死を悼み生前の行徳を述ぶる文章。
るあかむ(類柑子)其の佛文、隨筆を集めし書。
るたけ(類題)和歌又は俳諧を題によりて分類すること。

れ

れいあん(靈運)南岳を説く。四月一日より十日まで、江戸深川、道本山靈岸寺にて靈陀經千部の讀誦會をなす式。
れいげつ(冷月)二月の異名。
れいげつ(冷月)七月の異名。
れいし(靈芝)菌の名。山中の樹下、石間などに生ず。形松茸の如く、莖の色紫赤にして光澤あり、堅くして食ふべからず。干して机上などの飾とす。紫芝。
れいじ(荔枝)秋。荔枝の略。菓。各種を下し、長ずれば細き莖を引く。其葉葡萄に似て大さ七寸許、五七枚にして縁齒あり。七八月、葉間に五瓣の黄花を開き後實を結ぶ。長三四寸、疣

多く初め縁にして實に變じ、熟すれば裂けて紅肉を露はす。肉は六七分の數をなし多く重なる。味甚甘し。苦瓜。如意配。葉荔枝。園尾上より夕日か、やくつるれいし柏十。
れいし(靈絲絛)長命藤。
れいし(靈枝梅)梅の一種。摩耶紅梅とも名く。紅花にして、冬より二月迄開花し、花は枝間に密に並びつく。
れいじん(靈辰)人日。
れいじん(俗人)樂人ないふ。
れいじん(麗人行)唐の杜少陵が作りし詩。楊國忠と號國夫人と、譽を並べて往來するを、時人、目を蔽ひしといふ意を圖るもの。
れいじや(麗者)新年の回禮する人。國飲すきた麗者の面へ餘寒かな 召波。



(枝 葉)

れいじゆん(麗春花)ひなげし。
れんが(連歌)古へは二人にて三十一文字の和歌を應答して作るもの。上の五七五を發句といひ、下の七七を擧句(テグ)といふ。足利時代より次第に複雑になり、五十韻、百韻等の法式生じ、更に分れて俳諧の連句起るに至れり。
れんが(連歌)古へは二人にて三十一文字の和歌を應答して作るもの。上の五七五を發句といひ、下の七七を擧句(テグ)といふ。足利時代より次第に複雑になり、五十韻、百韻等の法式生じ、更に分れて俳諧の連句起るに至れり。
れんが(連歌)古へは二人にて三十一文字の和歌を應答して作るもの。上の五七五を發句といひ、下の七七を擧句(テグ)といふ。足利時代より次第に複雑になり、五十韻、百韻等の法式生じ、更に分れて俳諧の連句起るに至れり。

る

な

な

位下に叙せらる。足利義隆、義満の二代に仕へ、九州の探題として、屢々、菊地氏と戦ひ、足利氏に盡す。了俊學を好み逸作多し。徒然草を拾輯したるも其人なりしといふ。
れんが(連歌)古へは二人にて三十一文字の和歌を應答して作るもの。上の五七五を發句といひ、下の七七を擧句(テグ)といふ。足利時代より次第に複雑になり、五十韻、百韻等の法式生じ、更に分れて俳諧の連句起るに至れり。
れんが(連歌)古へは二人にて三十一文字の和歌を應答して作るもの。上の五七五を發句といひ、下の七七を擧句(テグ)といふ。足利時代より次第に複雑になり、五十韻、百韻等の法式生じ、更に分れて俳諧の連句起るに至れり。
れんが(連歌)古へは二人にて三十一文字の和歌を應答して作るもの。上の五七五を發句といひ、下の七七を擧句(テグ)といふ。足利時代より次第に複雑になり、五十韻、百韻等の法式生じ、更に分れて俳諧の連句起るに至れり。



(まだれ)

れんが(連歌)古へは二人にて三十一文字の和歌を應答して作るもの。上の五七五を發句といひ、下の七七を擧句(テグ)といふ。足利時代より次第に複雑になり、五十韻、百韻等の法式生じ、更に分れて俳諧の連句起るに至れり。
れんが(連歌)古へは二人にて三十一文字の和歌を應答して作るもの。上の五七五を發句といひ、下の七七を擧句(テグ)といふ。足利時代より次第に複雑になり、五十韻、百韻等の法式生じ、更に分れて俳諧の連句起るに至れり。
れんが(連歌)古へは二人にて三十一文字の和歌を應答して作るもの。上の五七五を發句といひ、下の七七を擧句(テグ)といふ。足利時代より次第に複雑になり、五十韻、百韻等の法式生じ、更に分れて俳諧の連句起るに至れり。
れんが(連歌)古へは二人にて三十一文字の和歌を應答して作るもの。上の五七五を發句といひ、下の七七を擧句(テグ)といふ。足利時代より次第に複雑になり、五十韻、百韻等の法式生じ、更に分れて俳諧の連句起るに至れり。

れんが(連歌)古へは二人にて三十一文字の和歌を應答して作るもの。上の五七五を發句といひ、下の七七を擧句(テグ)といふ。足利時代より次第に複雑になり、五十韻、百韻等の法式生じ、更に分れて俳諧の連句起るに至れり。
れんが(連歌)古へは二人にて三十一文字の和歌を應答して作るもの。上の五七五を發句といひ、下の七七を擧句(テグ)といふ。足利時代より次第に複雑になり、五十韻、百韻等の法式生じ、更に分れて俳諧の連句起るに至れり。
れんが(連歌)古へは二人にて三十一文字の和歌を應答して作るもの。上の五七五を發句といひ、下の七七を擧句(テグ)といふ。足利時代より次第に複雑になり、五十韻、百韻等の法式生じ、更に分れて俳諧の連句起るに至れり。
れんが(連歌)古へは二人にて三十一文字の和歌を應答して作るもの。上の五七五を發句といひ、下の七七を擧句(テグ)といふ。足利時代より次第に複雑になり、五十韻、百韻等の法式生じ、更に分れて俳諧の連句起るに至れり。

る

な

な

れんげさろ

れんげさろ「蓮華草」(毒)野生の小草。春苗を出す、葉はエンジュの初生の葉に似て對生し、莖枝地上に延びて蔓の如く、節より莖を出す。三月の頃、莖頭に淡紫花を開く、形蓮花の如くにして、小さくして愛らし。其多き處は地上鋪を敷く如し。後黒き三稜の實を結ぶ。五形花。紫雲花。碎米密花。ゲンゲ。團手に餘るげんぐの束拾にけり子規。

れんげつじ「蓮華節」(毒)ツ、ウの一種。其花の形蓮花の如くなればいふ。

れんげつじん「蓮華王院」京都東山の麓にある三十三間堂の稱。

れんげつじん「蓮華會」(夏)竹生島祭(マツブリ)鞍馬竹伎。

れんげつじん「蓮華子」窓にある格子をいふ。

れんげつじん「蓮華社」晋の惠遠法師が、盧山虎溪の東林寺に住して白蓮社を結び、劉遺民、宗炳等の詩友と會し、共に佛道を修したる會。

れんげつじん「蓮生」熊谷直實の法名なりと云傳ふ。又、宇都宮彌三郎頼綱、元久二年八月、黒谷の法然上人の門に入り、剃髮して蓮生と云ふ。頼綱は爲家の門に入りて和歌をよくす。前説は事實を誤る

れんげつじん

ものならんといふ。

れんげつじん「連雀」(秋)山中に棲み群をなす小禽。形雀より大く、全身灰紅色にして首に冠毛あり。嘴黒く、尾黒くして末は深紅なり。其翼の末紅なるを辨連雀といひ、黄なるを黃連雀といふ。羽毛美なれど聲は好からず。連雀の尾をいだるるや谷の水一晴。

れんげつじん「連雀」(夏)四月一日、大和地方にて、村々舉りて業を休み遊樂すること。

れんげつじん「連雀」板の臺に二本の棒を渡したるもの。數人にて昇き人を乗せて川を流るに用ゐるもの。

れんげつじん「連中」貴人の妻を敬稱していふ。

れんげつじん「連著」樵夫などが薪を賣ひ、又は山路などにて荷を賣ひ時用ゐるもの。二片の板に繩を付け、時に兩腕を通して脊につくもの。連尺。

れんげつじん「蓮如忌」(春)三月廿五日、京都西本願寺にて、蓮如上人(同寺八世、圓策法師、兼壽と稱す)親鸞後の高僧。明應八年(寂)の忌を修し、鹿子の御影といふを出す。蓮如忌や蓮すなごりの一在所 青々。

れんげつじん「蓮頰」蓮の將臣。宰相、間相如が職

れんげつじん

功なきに官位已れが上にあるを嫉み、途上に要撃せんとして、後、事を耻ぢ肉袒に荊棘を賣ひ、相如の許に至り罪を謝し交を結ぶ。年七十餘にして氣力衰えず、甲冑を着け馬に乗りて獵用ゐらるべきを誇りしといふ。

れんげつじん「連併」俳諧の連句をいふ。付合。

れんげつじん「蓮華水」(冬)よるさる水。

れんげつじん「蓮々」戀ひしたふさま。

ろ

ろ「蓮」(冬)床を穿ちて火を置くもの。茶室は方一尺四寸を定とし、寒國、山家のは甚大なり。蓮屋裏。地盤。蓮。松風や爐に富士を焼く四屋形 其角。

ろ「露友」秋江露友といふ。明和安永頃行はれし長唄節の名人。一派をなして秋江節といふ。

ろ「羅」(羅紙王)牢者を遊せし尤に由り牢番の箱入牢せしを、其女なる都の白拍子、祇王尋れ來りて觀音を祈る功力により割手の刀折れて助命せらるゝことを作りし謡曲。

ろく

ろく「漏刻」水時計を見よ。

ろくじん「羅人」馬士。うまた。

ろくじん「龍太鼓」九州松浦某、罪によりて入牢せられしに或夜、牢を破りて逃れしかば其妻を描へ、首に鼓を付けて一時宛時を打たしむ、女終に狂氣して夫を思ふ情切なるにより再び鼓されて二世の契を結ばしむることを作りし謡曲。

ろくじん「羅羅」疎酸鐵をいふ。緑色の礦物にして染物、又は臭氣を除くに用ゐる。

ろくじん「羅羅」(秋)はつしほを見よ。

ろくじん「六阿彌陀」(春)(秋)彼岸中日に、六箇所の寺院の阿彌陀佛に詣つること。東都にて上野島村西福寺、下沼田延命院、四ヶ原無量寺、田嶋興樂寺、下谷長福寺、龜井戸普光寺の六所は行基作の六體の像を分置し最も有名なり。六阿彌陀かけて鳴らん子規其角。

ろくじん「六入」(春)載入。六餅や十五かしのならかよひ 琴堂。

ろくじん「鹿賣」(冬)薬味(カヒ)。鹿賣前後賣れけり、棠耶。 鹿賣

ろくじん「六花」(冬)雪の異名。

ろく

ろく「六月」(夏)「異名」林鐘。季夏。瓜期。且月。逐月。朔月。陽水。風待月。鳴神月。常夏月。水無月。蝶の羽月。 六月や旅人に逢ふ夜の山標堂。

ろく「六月節」(夏)野香菊。

ろく「六月節」(夏)燕の王、禪者の言を信じ、都行を厭に下す。行天を仰て哭きしに盛夏霜降りしと云ふ故事。(都行(王)の條参照)。

ろく「六月會」(夏)みなづき。

ろく「六月會」(夏)佛敎にて、聖觀音、千手觀音、馬頭觀音、十一面觀音、准謁觀音、如意輪觀音をいふ。

ろく「六根」佛敎に眼耳鼻舌身意の六をいふ。

ろく「六齋念佛」(秋)孟蘭盆の頃、京都近在の農夫の催す踊。も空也念佛より起りしものにして、後、笛太鼓を加へ「豫廻」「獅子」の曲を舞ふ。後更に「八島」「煙」「蘆田川」などの古き謡物より脱化せしものを作り、近時は能樂、狂言などより換作したるもの多く出て、三絃をも交うるに至れり。現時京の近郷に三十餘の組ありて、市中に至り之を行ふ。六齋踊。六齋

ろく

や鳥羽 四條は 芋の露 四明。

ろく「六羅」馬士(馬)の類をいふ。

ろく「羅」(唐)唐の玄宗の臣。姓は安氏、も營州の羅胡なり。

ろく「玄宗」開元二十四年、幽州の節度使、張守珪に捕へられしも、玄宗其才勇を惜みて之を用ゐ、名を厚明と賜ふ。羅山巧言を以て重用せられ、又、玄宗の愛姫、楊貴妃が兒となりて常に宮掖に出入す。天寶十四年、叛を企



(佛念堂六)

KV2

て遂に長安を陥れ、僭して大燕皇帝と
いふ。僅に年餘にして其子安慶緒の爲
に殺さる。
ろくじ「六時」長朝、日中、日没、初夜、中夜、
後夜の總稱。
ろくじ「六時堂」大阪四天王寺中にある
堂の名。
ろくじ「六情」喜怒哀樂愛惡の總稱。
ろくじ「六尺」武家などに抱へられし駕
昇人足のこと。又、酒造家の下男をい
ふ。陸尺。
ろくじ「鹿茸」鹿の胃肉を乾したるも
の。香料とす。又、鹿の鬚角。
ろくじ「六勝寺」古へ山城國にありし、
尊勝寺、成勝寺、延勝寺、最勝寺、圓勝
寺、法勝寺の六寺。概ね廢絶す。
ろくじ「六所明神祭」(夏)五
月五日、武藏國府中町、六所明神(大國
魂神社)といふ。大己貴尊以下六座を祀
る(の祭禮。暗夜に及び神幸あり、翌日
田植神事あり。國玉宿から馬で見に
ゆく祭儀。連子。
ろくじ「六時禮讚」淨土宗にて六時
に行ふ勤經を云ふ。
ろくじ「六孫王祭」(秋)實永祭を
見よ。

KV564

ろくじ「六代梅」(春)梅の一種。花重
瓣にして香の時紅くして開けば白し。
ろくじ「六代御前」平維盛の女。平
氏、西海に敗れし後、文覺上人の爲に助
命せられ、別髪して妙覺尼と云ふ。
ろくじ「六道鏡」佛道にて死人を葬る
時、三途川の渡し賃なりて棺に入る
六文の鏡。多く鏡の形を紙に押し
代とす。
ろくじ「六道参」(秋)七月九日、京
都五條、建仁寺の傍なる珍聖寺(古へ小
野基が此所より冥土へ行て歸れりとい
へる傳説に依り、六道の辻と稱ぶ)に諸
人參詣して寺鐘を撞く。之を迎鐘(ハ
カ)といひ、又、樹の枝を買ひて歸り、
之を各自の靈棚に置く。これ聖靈は横
の葉に乗り來る故なりと。○横賣。横
買。國飼虫も捨て、六道参りかな
雪崩。
ろくじ「六地藏参」(秋)地藏祭。
ろくじ「六塵」佛教に色、聲、香、味、觸、
法の六をいふ。
ろくじ「六條御息所」源氏物語
に出でし人物。十六歳にて時の東宮の
妃となりしが後、源氏と通ず、嘗て加茂
祭の時、葵上と車を争ひ深く之を怨む。

KV648

葵上の死は御息所の執念なりといふ。
ろくじ「六餅」(春)餛入を見よ。
ろくじ「六方」ろつばう。
ろくじ「六波羅」京都六波羅にありし平
氏の邸宅。平忠盛始めて築きときは方
一町なりしが、清盛に至りて、南は七條
より北は五條を限り、二十餘町五千二
百餘宇に及びりといふ。
ろくじ「六波羅禿」平清盛、京都六波
羅にありて、三百人の禿に赤き直垂を
着せしめたるものを、常に洛中を徘徊
せしめて、已れを講訪する者を搜り捕
へしめしといふ。
ろくじ「六波羅密」佛教にいふ六の救
の道。布施、持戒、忍辱、精進、靜慮、智
恵の總稱。
ろくじ「六部」諸國の靈場を巡拜する行脚
僧、又は巡禮者。
ろくじ「六辨梅」(春)梅の一種。花六
瓣にして紅白あり。
ろくじ「六味」苦、酸、甘、辛、鹹、淡の六を
いふ。又、佛説には、乳、酪、生酥、熟酥、
醍醐、淡の總稱。
ろくじ「六陽」(夏)四月の異名。
ろくじ「鹿野苑」釋迦の初めて説法せし
地。

KV2

ろくじ「用里」漢惠帝の輔佐となりし商山
四皓の一人。
ろくじ「六里松」丹後國天の橋立の松
をいふ。詩人などの稱したるもの。六
里は支那の里數にて六丁一里によりて
算す。
ろくじ「六六魚」鯉のこと。
ろくじ「鹿王院舍利開帳」
(冬)十月十五日、山城嵯峨、鹿王院に
て佛牙舍利を開帳し、會式を行ふこと。
ろくじ「六衛」禁裡の守護を司る。左右の
近衛、左右の衛門、左右の兵衛の總稱。
ろくじ「鹿苑寺」金剛寺をいふ。
ろくじ「蓮宮」托鉢をなす僧。轉じて乞食
のこと。
ろくじ「支那江西省にある山。古來
景勝を以て名あり。
ろくじ「盧生」古へ唐土、蜀の國の少年、盧
生といふもの、邯鄲の里にて粟飯一炊
の間に、帝王となりて榮華を盡したる
ことを夢み、覺めて後、茫然として名利
の念を捨てたりといふ故事。(なほ邯
鄲の條參照)
ろくじ「露川貴」享保四年支考が、尾張
の露川の俳調が師風に違ふを責し文。
ろくじ「盧炭進」(冬)古へ唐の制

KV564

に、十月朔日、煙爐の炭を官人より宮中
に獻すること。
ろくじ「路地笠」茶會に降雨ありし時、路
次の間に懸すため用ふる竹の子笠をい
ふ。
ろくじ「六方」萬治寛文頃、江戸市中を排
徊せし快客の組をいふ。即ち鐵砲組、
笠籠組、鶴籠組、吉屋組、大小神祇組、唐
犬組の六なり。又、其男達の動作の荒
く、日常の言語も片言を好み、涙をナ
ダ、事だなコンダなど或は詰め或は延
して用ふるをいふ。後に芝居にて所
作又は花道の引ッ、みに、足踏を高く
し、威張りし見得などするを六方とい
へり。
ろくじ「六方俳諧」奴律諧。
ろくじ「盧同」唐の詩人。玉川子と號す。
茶を好み詩に巧なり。又、茶を愛して
茶の歌を作る。
ろくじ「盧名彦」(春)ろふさぎ。國
憲がんと今日も過ぎけり爐の名彦。此
柱。
ろくじ「魯褒」錢神論(ロン)の條を見よ。
ろくじ「紹羽織」(夏)夏羽織。
ろくじ「魯般」支那戰國時代楚の臣。公輸
と云ふ。楚の宋を攻むるとき、雲梯を

KV648

設けて戰ふ。然れども墨子の備に敵せ
ずして九度敗られしといふ。
ろくじ「盧開」(冬)十月、(多く亥の日を
用ふる)人家に爐を切り設くること。
又、十月初旬、茶家にて爐を開き、茶會
を催すこと。國盧開や雪中庵の露酒
蕪村。
ろくじ「盧葦」(春)冬季、防寒の爲設け
たる爐、火爐を翌春三月頃になり暖に
向へば之を葦ぐ。茶家の爐も此頃葦ぎ
て風爐と代え茶會を催す。盧葦の名殘。
國盧ふさいて、主は旅に出られけり
自珍。
ろくじ「盧縁」爐の縁にはめたる木匡。×
リロアチ。ヤゲノロアチの條參照。
ろくじ「船籠」船の籠を當つること。ろに
小さく突出し木。船ほぞに嵌めるもの。
ろくじ「論義」寺院にて經文を講論するこ
と。又、謡曲の節(ノ)の名。又、近江國
の湖邊にて風の方の定まらぬをい
ふ。
ろくじ「路蓮坊主」能狂言の名。
ろくじ「路温舒」前漢の人。字は長君。
事廉にして大義に通ず。少時、羊を牧
ふて、澤中の蒲を取り殺して小簡となし
編て書を寫し學ぶ。後、獄吏より逆む

わいへん 倭馬樂の曲名。字は介甫。中山と號す。性執拗にして矯世變俗の志あり。神宗の信を得て參政となり、新法を出す。富國、強兵策を稱し、青田の法を設けて田租を騰にし、賦欲を重くす。後、宰相となり、荆國公に封ぜられ、國政を執る。六年、天下其政の苛刻なるを咎め、懇請出せしを以て終に辭し去る。又、詩文をよくし、臨川集の著あり。唐宋八大家の一人と稱せらる。

わ

わいへん(我家) 倭馬樂の曲名。字は介甫。中山と號す。性執拗にして矯世變俗の志あり。神宗の信を得て參政となり、新法を出す。富國、強兵策を稱し、青田の法を設けて田租を騰にし、賦欲を重くす。後、宰相となり、荆國公に封ぜられ、國政を執る。六年、天下其政の苛刻なるを咎め、懇請出せしを以て終に辭し去る。又、詩文をよくし、臨川集の著あり。唐宋八大家の一人と稱せらる。

わくわく(王瓜) (秋) 烏瓜。君王の德に民の化するこ。 かつわ(王化) 君王の德に民の化するこ。 わるん(王獸之) けんしを見よ。 わるん(王獸之) けんしを見よ。 尺餘。 葉細。 長く。 野生。 秋初。 葉間。 紫花を開く。 其根を薬用とす。 山。 杖。 國。 黄芩や淺茅が宿の露の朝。 天。 藤。



(黄芩)

わくまん(王曼) 支那三國時代、魏の人。字は仲宣。博學多識にして、よく物事を暗んず。蔡邕、之を畜せし、遇々、我門を過ぐるに聞き、服を倒にして迎へしといふ。 わく(王) 帝王の軍をいふ。 わく(王思) 魏の人。豫州刺史となり、官九卿に至り列侯に封ぜらる。然れども其性甚苛急なり。嘗て筆を執り書を作るとき、蠅筆端に集る。驅り追つて再

わいへん

が筆を執れば復来る。是の如きこと再三、思慮自ら起て蠅を逐ふと雖も一疋も捕ふべからず。遂に運つて筆を地に擲ち踏みて之を驅りしといふ。 わく(王子猷) 晋人。王羲之の子。名は徽之。性放恣にして、官を棄て、會稽山下に隱棲し、竹を愛して、何ぞ一日も此君無る可んやといへりといふ。 わく(王簡) 魏の人。字は叔治。七歳の時、社日に當つて母を亡し、其日毎に哀むこと甚し、里人爲に社日を廢せしと云ふ。 わく(黄鐘) わうしきて。 わく(王子喬) 支那列仙傳中の人物。周の靈王の太子にして、好んで笙を吹く。一日仙人と嵩高山に上り、昔餘年を過ぎて後、相負といふものに見えて曰く、七月七日我を峻嶺山に待つべし。其日に至り、喬、白鶴に乗り山頭より雲中に入りしといふ。 わく(王守仁) 王陽明。 わく(王述) 晋人。字は懷祖。貴に安んじて閑達を求めず。蘇陽管人に散す。然れども常に性急なるを累す。嘗て鶏卵を食んとし、箸を以て刺さん。すれども能はず、怒つて之を地に擲しに圓轉して止らず。傾ち林を下り履を以て踏めども又意の如くならず。遂に口中に内れ嚼碎きて之を吐きしといふ。後、大に沈靜を以て處りしといふ。 わく(王春) (春) 春の異名。 わく(王春月) (春) 一月の異名。 わく(黄芩) (秋) 葉は互生し五尖又は七尖にして刻あり。秋初、五瓣の淡黄花を開く。大き三四寸、且に開き午に萎み暮に落つ。 二、さるるあふ

わいへん

行列は仕丁、管人、武人、武士(甲) 着け長刀 をつ田 樂童 八人(各花笠を頂く)あり。門前に七度半の使立ちて後、田樂を催す。此日、江戸及近郷より参詣の者、竹串にて作りたる槍を納め、社内にあるものを乞ひ受て踊る。故に槍祭といふ。 王子田樂。 國。 青輪の鎗槍きゆく祭かな 参入。 わく(王實) 晋人。嘗て山中に、木を伐らんとして入りしに、仙人の碁を圍めるを見てありしに傍に置きし斧の柄朽ちて、數星霜を経たりといふ。 わく(王子猷) (冬) 十二月晦日の夜、武蔵國北豐島郡王子村、稻荷社の



兒童樂田 士武(祭現權子王)

邊なる裝束に狐火の燃ゆるを、農民望みて明年の豊凶を卜す。 四年 一夜王子の狐見にゆかん 葉室。 わく(王子猷) (秋) 王子猷現祭。 わく(王祥) 晋の人。字は休復。王覽の兄にして、性至孝。母朱氏之を遇すること不慈なれど、祥愈々恭謹なり。父母疾めば衣を解くことなくして、日夜看護し、湯藥必ず自ら嘗む。嘗て天寒く水凍るとき母、魚を欲す。祥、衣を解き氷を割りて求めんとす。水自ら解けて双鯉躍り出づ。母又、黄雀の矢を思ふ。時に黄雀數十、其毒に入る。襦里驚嘆して其至孝を賞すといふ。 わく(王城) 宮城。帝城。 わく(王昌齡) 盛唐の詩人。字は少伯。其詩最も宮詞に長す。 わく(往生院) 山城國嵯峨清涼寺の西にありし寺。後に妓王寺といふ。 平清盛の愛姫、妓王の通世せしところ。 又、瀬口時頼が入道せし所なりといふ。 わく(王戎) 晋人。字は濬沖。王渾の子なり。幼より穎悟にして、神彩秀徹、眼光爛々として日を見れども眩せず。時人評して、巖下の電の如しといふ。

わいへん

わいへん

わさび



(わさび)

わさび(王生)前漢の人。よく黄老の言をなす。時に廷尉、張釋之、賢者の名あり。王生之に類を結ばしむ。人其無禮を告め、張氏を辱めたるを責む。王生曰く吾は老て賤し、今天下の名臣に類を結ばしめたるは、我身一生の中の榮譽たるを欲してなりと答へしといふ。

わさび(黄精)古来アマトコロと開すれども、ナルコユリを正しとす。(アマトコロ参照)

わさび(黄精)十月頃、奥州南部より江戸に來り、黄精を賣歩行くもの。

わさび(玉照君)照君を見よ。(なほ毛延壽の條参照)

わさび(王樓)唐の學者。字は無功、東車子と號す。性酒を嗜み、五斗を飲むも

わさび

更に亂れず。時人五斗先生と呼ぶ。

わさび(王孫)公子王孫と連れて貴公子を指すこと。又、つちばり、つくばれ草、たたくり等を云ひ、支那の俗には猿を呼んで王孫と云へり。

わさび(王導)晋の名臣。字は義弘。元帝に仕へ、太傅となり、始興公に封ぜらる。其兄、王敦の反するや大義を以て之を亡す。

わさび(黄疽病)血の中に膿汁の混入するより發する病。身體悉く黄色を呈す。

わさび(王冲)魏の人。少にして聰察、疑なり。其六七歳なりし時、吳の孫權、大衆を得て、其量を量らんを欲し、其法を群臣に問へども知るものなし。王冲曰く、象を大船に乗せ、船の水に入りし所へ印し、更に他の重量の物を乗せ、其量を取らべしと。諸人其願智に驚きしといふ。

わさび(王通)隋の大儒。字は仲淹。文中子を著して論語に擬す。

わさび(王敦)晋人。字は處仲。嘗て、色を食り體爲に弊る。左右之を諷むる者ありしかば直に後閣を開きて、婢妾數十人を逐ひしといふ。

わさび



(梅黄)

わさび(王鼻)夏、稻荷祭を見よ。龍頭太。

わさび(黄梅)梅生の灌木、高さ三五尺、節多く、初春、六瓣の黄花を開く、梅や、梅の花に似て筒状をなす。花終りて葉生ず。迎春花。黄梅や枝はみどりの春の色。

わさび(黄精)さばた。

わさび(黄精)山城國宇治にあり。萬福寺といふ。黄精宗の本山にして、元禪師の開基なり。

わさび(黄精)源宗の一派。我國にては承應中、隱元禪師より起る。

わさび(黄精)黄精開山忌(壽)三月三日、山城國黄精山萬福寺にて、開祖隱元禪師(明の人、後水尾帝に召されて歸化す。延寶元年寂す。大光普照禪師といふ)の忌を修すこと。隱元忌。

わさび(黄精)黄精水灯會(秋)水燈

わさび

わさび(黄精)正月元日より三日まで、山城國黄精山萬福寺にて、寺僧、狂言踊などして戯ること。

わさび(黄精)古へ武家にて行ふ節振舞の類、後に世俗の節振舞(ハチマタ)にもいふ。完飯。(セチの條参照)

わさび(王父)祖父のこと。

わさび(王母)祖母のこと。

わさび(王哀)魏の儒者。家貧しくして助け遣る人あれども受けず。屢召さるれども、官に就かず。性至孝にして、父の墓側に住み、旦夕拜跪す。墓前の柏樹、涕涙の爲に枯る。又、母の雷を畏れしを思ひ、雷鳴ある毎に墓に至りて哀こゝに在り安んぜよといへり。後、晋の天下たるに及び、晋に臣たるを耻ぢ、終世、四面して坐せざりしといふ。

わさび(王勃)唐の詩人。字は子安、王通の孫なり。天資穎敏、幼より文辭をよきし、最も詩賦に長ず。其詩文を作るや、先、墨數升を磨し、酒を滿引して後、面を覆ひて臥し、覺むるに及び直に筆を呵して篇を成し、一字をも改めず、時人之を應稱さいふ。

わさび

わさび(王猛)晋の人。字は景略。初め華山に隱れぬしが、其友、桓温、關に入る時、猛に會す。猛、猛袍を着、狐を捫り、自若として世事を談じ、傍らに人なきが如しといふ。

わさび(王莽)前漢孝元后の弟王曼が子なり。孝平帝の五年臘日、椒酒に毒を置き帝を殺し、後自ら帝位に即き國號を新と改む。田法鑄錢の法を苛刻にし、民大に困む。幾くもなく後漢光武帝に亡さる。

わさび(王濛)晋人。字は仲祖。容姿甚美なり。嘗て鏡を視て其父の字を稱して曰く王文開、此の如き兒を生むやと。又其家貧にして帽敗る。即自ら市に入り之を買ふ。婦あり、其美貌を悦び遣るに新帽を以てせりといふ。

わさび(王陽明)陽明を見よ。

わさび(王祥)晋人。字は玄通、王祥の弟なり。母朱氏、王祥を遇すること無道にして、數々祥を楚遣す。覽之を見れば常に涕泣抱持し、母を諫めて之を止む。其父の死後、王祥其聲あり。母之を惡み密に欲殺せんことを。祥之を知り、起ちて其毒盃を取らんことを。祥又之を覺りて争うて與へず、遂に母の心を

わさび

厭さしめしといふ。

わさび(王陵母)前漢の王陵、高祖に屬し、黨數千人を聚む。高祖、項羽を討つに及び、羽、陵の母を取り軍中に置き以て陵を招く。陵が母私かに使者を送り陵に告て曰く、善く漢王に事へよ。漢王は長者なり。老母あるを以て二心を持つること勿れ。妾即ち死を以て使を送る。遂に劍に伏して死す。

わさび(女王孫)壽(壽)正月八日、禁中承明門にて、女王(皇女皇孫の内親王の宣下なき方)に蘇を賜ふこと。其蘇法、人別に絹二疋綿六屯なりといふ。(女王孫は王孫と讀む)。國女王孫やればまきりたる御笑顏、子規。

わさび(王維)字は摩詰。盛唐の詩人。兼て山水の畫法に精しく、南畫の祖たり。

わさび(若帖)小帖。國若帖や谷の小帖も一葉ゆく、蘇村。

わさび(我庵)寶曆十二年、樗良及其の門派の句を集めし書。

わさび(若夷)壽(壽)京阪地方にて、元日、紙札に福神(惠比壽神)の像を畫きたるを、市中の家々に賣歩くもの。諸人之を門戸に貼りて福を祈る。國世の業や罷はあれども若蛭子、山姥。

わかもち

日なな思ひそ若布刈 風密。
 わかもち(若餅)(春)正月三ヶ日に搗く餅。若は祝語にして、暮に搗く餅に對していふ。國若餅にさぶさ搗込む梅の花 一茶。
 わかやが(若思)年若く思はるゝこと。
 わかやま(若山節)元祿頃、若山五郎兵衛と云ふ者の語り始めし淨瑠璃の一派。芝居の狂言の間に用ゐるもの。
 わかれぢも(別霜)(春)忘れ霜。
 わかれのし(別霜)(秋)野の宮の別を見よ。
 わかを(若男)能樂の面の名。女郎花などに用ゐるもの。
 わかを(若女)能樂の面の名。熊野などに用ゐる美しき女の面。
 わか(脇)連句の第二句目をいふ。(連句作法に詳し)。又、謡曲中の副主人公をいふ。
 わきた(脇起)古人の發句を立句として脇の句以下を附くる連句の一體。
 わき(脇師)能樂のシテに對する役をいふ。略してワキ。
 わきたち(脇立)佛像などの本尊の左右に侍する佛をいふ。不動明王に侍する。

わかば

制喧迦、昆彌羅の二童子の類。
 わかば(脇止)腋のころを縫ひ塞ぎし衣。女子の年老いしもの着るもの。
 〓脇ふさぎ。
 わかば(脇濱)攝津國兵庫港をいふ。
 わかば(脇柱)能舞臺の前部の右方にある柱。〓大臣柱。
 わかば(脇塞)脇ごめ。
 わかば(吾妹子)女を親みて呼ぶ稱。
 わかば(脇母古)(冬)神樂歌の大前張の曲の名。
 わかば(脇輪)三幅對の幅物の、左右のものを。中央を中尊といふに對して。
 わかば(脇腰)元祿頃、芝居の三番叟の後になす狂言。
 わかば(脇火鉢)(冬)火鉢の一種。周圍に棒を付けしもの。國黒塚やつばね女のわく火鉢 言水。
 わかば(病葉)(夏)植物の葉の、暑氣に蒸されて黄色となり、又は飢み落つるもの。國病葉を土にもなす蜘蛛の糸 鳥光。
 わかば(選進)たまさかにの義。
 わかば(和光同塵)神佛が其本地の光を和げ、我國に垂跡して、塵の世に交ること。即ち、佛が神體となりて人間

わか

を教ふこと。
 わか(和景)(春)春の異名。
 わか(輪袈裟)袈裟の一種。古は廣き袈裟をたたみて小くし首より胸にかけしもの。後時して幅二寸ほどに環の如く作りしもの。
 わか(和事師)芝居にて男女戀慕の態を専ら演ずる役者をいふ。
 わか(和琴)やまと琴。あづま琴。
 わか(和御料)親しきものを呼ぶ稱。
 〓汝。
 わか(早瓜)(夏)さうり。
 わか(早瓜供)(夏)さうりをぐうす。
 わか(團扇君)戯れに、いたづらに、好事にの意ある語。又、俗語にいつそのこと云ふ義なりとも云へり。
 わか(柚米)(秋)魂棚に供ふる早稲をいふ。國わさ米や之も知行の買物 秀子。
 わか(早酒)(秋)新酒。
 わか(早苗)(夏)さなへ。
 わか(浅鍋)土鍋。はうろく。
 わか(和佐笑祭)(冬)十月上旬日、紀伊國日高郡丹生村、上下和佐村の鎮守、丹生明神の祭禮。祭式に村民

わか

等竹串に果物を貫きしを挿げ、社前にて大聲に笑ふ事あり。
 わか(山葵)(春)山中の水近き處に生ずる草。苗は蕨の如く、葉は圓く五尖にして鋸齒あり。春、莖を出して四瓣の白花を開き後、葉を結ぶ。根は味甚辛く、春之を細り、鹽りおろして、魚鮓の味を助くるに用ゐる。莖葉は酒精漬などす。國蕎麥うてば山葵ありやと夕かな 召波。
 わか(山葵花)(春)わかびを見よ。
 わか(和讀)佛經の趣旨を和らげて説きしもの。
 わか(和讀譯)(冬)念佛、真言宗などにて冬、和讀を稱ふる譯を備すこと。
 〓附笑いて和讀の宿の主かな 珠鳴。
 わか(冬)鶯鳥中最も大にして猛く、脚嘴黄にして大く、背と翅は黒くして白き斑あり。腹は白くして腹に黒斑あり。深山の太木に棲み、狐狸或は小兒などを捕り食ふ。〓鳴。國夕嵐鶯に逸れたる雀矢かな 滿々。
 わか(鶯)鶯の如く猛く物をつかむこと。
 わか(鶯巢)(春)鶯の巢の棹の枯柱に日は入る 凡光。

わか

わかのやま(鷺山)釋迦が籠りて法を説きしこと。山の名。〓鷺鷺山。又、比叡山の異稱。
 わかの(鷺尾)名は經春。三郎と稱す。源平一の谷の合戦に、鶴越の間道を案内して平家を討ちし獵夫。後義經の臣となる。
 わか(輪島塗)能登國風至郡輪島より産する漆器。同所の海上にて風たる日和を見て塗り造ること云ふ。
 わか(輪炭)(冬)茶室に用ゐる炭の稱。平たく大に切りたるもの。國輪炭切りにて時雨るをまつ釜日かな 長流。
 わか(忘扇)(秋)扇忘る。
 わか(忘扇)(夏)扇の鳥屋(入)入をいふ。
 わか(忘扇)愛さを忘るゝため、手すさびに貝を拾ふこと。
 わか(忘草)(夏)くわんざう。
 わか(忘草)(春)八十八夜に降る霜。春霜を置くこと。此節を限すれば、別れ霜さといふ。農家にて、此霜諸木の嫩芽に甚だ害あれば、霜被ひを設けて防ぎ、山城宇治の茶園は殊に之を恐れ、て腹腹を施しおき、之を過ぐれば腹を除く。(八十八夜をも見よ) 國花すき

わか

て吉野出る日や忘霜 凡菫。
 わか(忘音)忘れたるやうに、絶えだに鳴くこと。虫などにいふ。
 わか(忘花)(冬)錦り花。
 わか(忘水)野中又は樹陰などにある水溜りをいふ。人により知られざればいふこと。
 わか(早稻)(秋)稻の熟すること早きもの。國早稻刈つて落付願や小百姓 乃龍。
 わか(和清天)(夏)四月の氣候をいふ。白樂天の詩「孟夏清和天」より出づ。
 わか(早稻酒)(秋)新酒をいふ。國早稻酒にもの、床しき在郷哉 白雄。
 わか(早稻田)(秋)早稻の買りし田。
 わか(冬)冬季衣類に用ゐる眞綿、木綿等をいふ。(綿取、新綿を除く外の綿は悉冬季す)
 わか(綿入)(冬)綿を入れし衣類。〓布子。綿子。國留守勝の夜を守る妻の綿子かな 召波。
 わか(綿打)(冬)木綿の架を打ちて製すること。國綿打も何ぞ眼へよ雨の 暮。
 わか(馬香)(春)わたこ。
 わか(私大)(冬)奥州南部にて、十

綿

子

綿

二月小の月に當れば、翌月朔日即ち正月元日を私に晦日と定めて、諸事を済ます風習をいふ。|| 南部私大。津輕私大。
 わたし(綿) (冬) 木綿の實の核を取去るに用ゐるもの。車の形の具。|| 綿車。綿繰車。攪車。|| 綿繰や岩にせかるゝ水の音。睡車。
 わたし(綿車) (冬) 綿を絞る。|| 攪車。
 わたし(綿衣) (冬) 綿にて衣の形を作り、之に所々、絹を縫加へたるもの。冬季寒を凌ぐため用ゐる。|| 綿子。綿入を見よ。|| 着試めして捨られぬ思ひ綿子哉。笑來。
 わたし(綿香) (春) 淡水に産する魚。形餅に似て大き六七寸、鱗細くして白く、脂多く腸甚苦し、酢漬として食ふ。近江琵琶湖に多く産す。|| 黄鰮魚。ワカカ。
 わたし(綿) (秋) わたし。
 わたし(海) うみ。
 わたし(海) 廊下。ほそごの。
 わたし(綿取) (秋) 秋、木綿を摘み取る。|| 綿取。木綿取。新綿。|| 木綿取る雨雲立ちぬ生駒山 其角。
 わたし(渡津) 攝津國西成郡にあり。古へ源義経と梶原景時と逆轉の事を争ひしころ。

しころ。
 わたし(綿披) (夏) 夏衣に布子の綿を披去りて裕とすること。|| 綿披いておます施主あり旅の宿 太紙。
 わたし(海底) 海の底をいふ。
 わたし(綿花) (夏) 木綿(ワタ)の花をいふ。|| 綿の花雨には遠きさかり成升六。
 わたし(海原) 廣き海をいふ。|| 和田原。
 わたし(和田岬) 攝津國八郡郡の岬をいふ。本間孫四郎が遠矢の跡あり。
 わたし(綿朝子) (冬) 眞綿をつみひろげて作り、冬寒さを防ぐため婦女の被るもの。京にて婦女多く用ゐる。唯妓女の單のみ用ゐず。|| 國聲もせて暗き夜船や綿朝子 太紙。
 わたし(綿花) (春) かざしのわた。
 わたし(夏) 初夏、木綿の種を蒔くころ。
 わたし(移轉) 居を移すこと。|| 轉宅。
 わたし(綿虫) (秋) 木綿につく害虫をいふ。



ふ。|| 國鴉のこそばやゆなり綿の虫野曉。
 わたし(綿弓) (冬) 木綿を打ち柔げ製する弓形の具。|| 綿弓や琵琶になくささむ竹の奥 桃青。
 わたし(度會川) 伊勢國宮川の別稱。
 わたし(度會宮) 伊勢太神宮をいふ。
 わたし(度會新嘗會) (秋) 神嘗祭(カムヤリ)を見よ。
 わたし(渡) 渡船をいふ。
 わたし(渡徒士) 徳川時代に一定の主人なくして所々に雇はれりり武士。
 わたし(渡壺詞) 芝居にて一續きの壺詞を數人に分けていふもの。
 わたし(渡鳥) (秋) 秋の頃、雁鴨又は小鳥の類の群飛して來るをいふ。|| 小鳥渡。朝鳥渡。|| 山鼻や波りつきたる鳥の聲 丈草。
 わたし(渡雁) (秋) はつ雁。
 わたし(和銅) 元明帝の時の年號。其初年に初めて通貨を鑄たり。
 わたし(王仁) 應神帝の時、百濟より來朝せし學者。太子菟道稚郎子に典籍を遺む。浪花津の梅の歌を讀みて名高し。
 わたし(綿足) 人の歩行の態をいふ。其足の先の外に向く外ソニ、内に向く

綿

子

綿

を内ソニこいふ。又、女子が外髭に歩くをいふ。
 わたし(綿口) 神殿側面などの拜殿の前に掛置く具。綿にて圓く編み餘の如く作り、下に長さ口あり。長くよれる布綿を振り打ちて鳴らすもの。
 わたし(作) 閑寂なること。
 わたし(作歌) 作しよのあまりに誅出づる歌。
 わたし(作) 仕しげの義。
 わたし(作助) (冬) 袴の一種。冬開花す。白、薄紅等にして形小なり。|| 作助に寺の數寄屋の寒さかな 令球。
 わたし(作) 仕しげの義。
 わたし(作) 仕しける人。
 わたし(作) 正保頃、大阪錦町の輪岡屋にして久右衛門といふ。富家の間え高かりしが、榎城松山に關染みて、烟花の遊に耽り、遂に家産を失ふ。後世、草紙、淨瑠璃に其事蹟を作れり。
 わたし(作) 柔弱なるものをいふ。
 わたし(作) (春) 正月、蕪にて盒子(碗の類)の如く編みたるものを、門松に結びつけて、日々供物を入れて備ふこと。|| 古道や松にかけたる蕪盒子 升六。

わたし(蕪餅) 農家にて、蕪を製し柔げんため、蕪打石におき槌にて打つこと。
 わたし(青前魚) (冬) 鯛(ウ)の大なるもの。
 わたし(蕪頭巾) (冬) 蕪にて作りし頭巾。獵人農夫等の被るもの。|| 大原女を妻に持つ身や蕪頭巾 東洋城。
 わたし(蕪餅) (冬) 十一月中卯日、殿上酒酌の翌日、舞姫の介錯する童女、及び下仕(カマエ)を、清涼殿に召して見そなはず式。童女、下仕は舞姫一人に二人あり。
 わたし(蕪餅) (秋) 古へ年中にて行ひたる角力會の一種。(相撲の條參照)
 わたし(蕪餅) (春) 山野に自生する草。春初宿根より芽を發生す。巻曲して拳の如し、之を早蕪、初蕪、蕪手、蕪餅、蕪餅といひ、食用とす。後葉開きて形鳳尾の如く、葉高さ三四尺に及ぶ。根を粉にし餅を製る之を蕪餅といふ。「異名」紫の塵。山根草。|| 上達女紫の塵つまれけり 桃岡。
 わたし(笑) 翁の笑を含みし顔の能面。融、阿漕等に用ゐるもの。
 わたし(笑) (春) 新春、初めて嬉笑すること。|| 初笑。|| 國笑初さすや畫出

し嫁が君 桑夫。
 わたし(笑) (秋) 風の樹に生ずる雨。毒ありて人之を食へば笑を催す。
 わたし(蕪餅) (春) 蕪の芽の巻曲したる形を人の拳に比へていふ。
 わたし(笑) (冬) 笑みたるやうに。柔きて。|| 和。
 わたし(蕪餅) (春) 蕪の條を見よ。
 わたし(蕪餅) 蕪にて作りし圓き座蒲團を云ふ。|| 蕪餅。
 わたし(蕪餅) 蕪の條の條、男女の逢はんとする時、女の方へ男より蕪を二本結びたるを贈る。女逢はんと思へば共に引結び、逢はれば引離し返すと云ふ。
 わたし(笑) 笑みたるやうに。柔きて。|| 和。
 わたし(蕪餅) 竹、籐などにて編み、上下に合するやう作りし食器。飯などを入れ替ふもの。|| 蕪餅。
 わたし(蕪餅) 蕪餅に用ゐる炭の稱。堅に割りたるもの。
 わたし(蕪餅) 旅泊、青樓などにて一室内

あざむし

に屏風などにて仕切り、其兩方に寢床を作りて客を入るゝもの。
わびなし「無和理」ことわりなく、詮方なく、是非なく。
わびなき「割膝」狭き室に多人敷込み合ひて座すること。割膝。
われかのしき「我彼妻」戀に心を奪はれて我身を忘れたるをいふ。
われかの(秋)もにすむじしの條を見よ。
われもか「吾亦紅」(秋)草の名。高さ三四尺、葉は藤の葉に似て鋸齒あり。一室より數り數り。
十葉 蕪生
し、
秋葉
を出
して
葉頭
に紫黒色の細花球をなし桑實の如し。又紅、白、粉紅なるものあり。地輪、香水香。圓しやんとして千草の中に我水香 路通。
わあめ「和郎女」婦女を親みて呼ぶ語。
わあん「和酌」他人の作りたる詩と同韻字



(いかにれわ)

を用ひて作詩すること。贈答の詩などになすもの。

あ

あ「蘭」(夏)水田に栽ふ又は原野の湿地に自生する草。葉は圓葉の如く、長くして直く、密に叢生し、三四尺に達す。中に白髓あり、之を採りて燈心を製す。夏、葉頭に絲毛の如き花を生ず、刈りて席、編笠などに製す。フト井、ホソ井の二種あり。虎鬚草。燈心草。莞。
あ「蓬蓬」よろめくさま。曲れるさま。
あ「蘭植」(冬)冬、蘭草の苗を植うること。蘭植うや田面に水入る人の影 北河。
あ「あざむし」(唐)唐玄宗の朝の人。蘇州の刺史たりしに因り蘇州と号す。性高潔にして常に香を焚き地を掃ひて坐す。其詩冲澹にして世人陶淵明に比す。
あ「あざむし」(夏)夏の末、蘭を刈り、干して席に製すること。あざむし。蘭干。夢國水損も知らず今年も刈割かな 夢

あな

あな「猪口」(秋)いくちだけ。
あな「猪口茸」(秋)同上。
あな「居杭」能狂言の名。居杭。
あな「居杭」土橋のこと。
あな「居草履」あざむしを見よ。
あな「居金剛」同上。
あな「居龍」(春)正月十日、攝津西宮大神宮なる姪子神の祭に、氏子の村民、九日の朝より夜に至り戸を閉て出ず。門松を遊にして家に籠る。これ此日悪鬼の遊行するを避くる爲なり。之を居龍といふ。明朝戸を開きて各自社参す。(十日夷参照) 居居(りりや)聞くものささく派の音 何虹。
あな「居草履」聞にて細かく編みし草履。古へ女子の用あしもの。後世草履に用ふる。あなげ。あなごう。
あな「居草履」(春)畫巻を見よ。
あな「居草履」(夏)井戸管。
あな「居草履」(冬)井戸管。
あな「居草履」(春)居のこ。
あな「居草履」(夏)居のこ。
あな「居草履」(冬)居のこ。
あな「居草履」(春)居のこ。
あな「居草履」(夏)居のこ。
あな「居草履」(冬)居のこ。
あな「居草履」(春)居のこ。
あな「居草履」(夏)居のこ。
あな「居草履」(冬)居のこ。

あな

あな「(草)天」佛説に佛法を守護する神。俗に疾く走る。この語とす。
あな「(井筒)伊勢物語に出でし、紀有常の女と、業平と契りし筒井筒の事な木として、在原寺に有常が女の靈現れて旅館に音を語る。この作りし謡曲。
あな「(井筒前)在原業平と契りし、紀有常の女をいふ。
あな「(井手蛙)ながらのいんなくづを見よ。
あな「(井手左大臣)橘の諸兄の稱のこと。
あな「(井堤里)山城國喜歌に在り。玉水の里ともいふ。井堤左大臣諸兄の館址其東南にあり。井出の玉川は其四を流る。
あな「(井手下組)大和物語にありし故事より出づ。別れたる男女の再び回り廻りて契ること。
あな「(井手玉川)井堤の里の傍を流るゝ河。古へ山吹、蛙の名所なりしところ。
あな「(井手館)工藤祐経が富士の巻狩に宿りし館。曾我兄弟のために討れしところ。
あな「(井戸管) (夏) 夏日、井戸を浚ひ

あな

て其芥を除き、濁水を改むること。後、井に蓋をし燈火、盛鹽などす。井の神へ供へ祀る。魚なり。井戸浚。井浚す。晒井。晒井や稍静りて水の音 百明。
あな「(井戸浚) (夏) 井戸管。
あな「(井茶碗) 豊公が征韓の時、井戸左馬弁の朝野より持歸り、豊公に獻じたる茶碗の名。
あな「(維那) ついな。
あな「(田舎柿) (秋) 柿の一種。實大にして濃し。サハシ柿とす。
あな「(亥中月) (秋) 更待月(ツキ)。酒屋にはもう騒てや居ん亥中月 引牛。
あな「(猪無野) 攝津國河邊郡伊丹の傍にある地。
あな「(井奈野) (冬) 神樂歌の大前張の曲の名。 猪氷るばかりやゐなの離波がた。元山。
あな「(猪苗代) 岩代國耶麻郡猪苗代湖の邊にある地。
あな「(猪苗代茶屋) けんさいを見よ。
あな「(居成) (春) 春秋の出代(ア)に交代せず、そのまゝ、勤続する奴婢をい

あな

あな「(猪)はしたの鼻が低きにありかな 瓶川。
あな「(蘭金佛) (夏) 四月八日より七月中旬まで、伊勢松原の地方にて、夕暮より兒童、鉦を叩き念佛を唱へるること。
あな「(井頭) 武藏國四多摩郡吉祥寺村にある池。神田上水の源泉なり。
あな「(亥子) (冬) むのこ餅。
あな「(亥子餅) (冬) 十月には北斗の斗柄、亥に指し向ふこと。此月初亥の日亥刻に餅を食へば病なしと傳へ、上下共に餅を食ふを例とす。古は禁中にて初亥日、内膳寮より餅を獻じ、朝餉に之を奉る。大豆、小豆、大角豆、胡麻、栗、柿、糖の七種を混じて作るといふ。民家にも各餅を作り食ひ、又は贈答す。一説に猪は多子にして一年十二子、同年は十三子を生む、故に、婦人之を羨みて亥子を祝ふなりと。又、古は攝津國能勢郡八木村の門大夫なるもの、毎歲業程へ亥子餅を調製したれば、之を能勢餅とし八木の亥子餅ともいふ。 國重箱に載たばしる亥子かな 沾水。
あな「(猪) (冬) しし。

あはれ

あふた

あはれ

あ

あはれは「蘭花」(夏)蘭(花)を見よ。蘭の花にひたし、水の濁れ。此節。
あはれは「猪早太」源頼政の郎等。頼政宮中にて怪を射し、其怪獸を仕留めしといふ。
あはれは「射場初」(冬)十月五日、朝廷にて明年正月賭弓(弓)を行ふため射場を開き初むる式。天子弓場殿に出御し群臣と共に射藝を御覽せらる。國語に時雨起すや射場始。立園。
あはれは「井開」(春)包井開く。
あはれは「居故郷」我住む家の荒たるをいふ。
あはれは「蘭干」(夏)蘭干を見よ。
あはれは「居待月」(秋)八月十八日の月。座して待つ意。座待月。園牛は讀む明石の巻や居待月。幸日。
あはれは「院家」永祿三年、本願寺の徒なる十箇寺に院號を敷されしものをいふ。
あはれは「院參」上皇の御所に參仕すること。
あはれは「院代」善化宗(ユウケン)にて住持を呼ぶ。有聖のものなり。
あはれは「院拜禮」(春)元日、宮中にて朝拜ある時、仙洞御所(上皇の御殿)にて院參の人々、各拜賀を行ふ式。

あふたは「韻差」詩の韻字を隠してそれを言ひ中つる遊戯。
あふたは「韻差」李由の編したる書。許六の俳文及び門人の連俳を集めしもの。
あふたは「守宮印」(夏)守宮を搗くを見よ。
あふたは「守宮印」守宮の血を女の腕に塗れば不貞あるものは洗ふも落ちずといふ故事より連俳に戀の詞とす。虫の印。
あふたは「守宮搗」(夏)五月五日、支那の古俗に守宮を取て飼ひ、体を赤く彩り、次の年の同日に之を搗きて人の臂に塗る。犯すことあれば忽ち消ゆといふ。守宮のしるし。園守宮つくく王の秘事現ひけり。青々。
あふたは「位決定」(春)二月中旬、禁中にて、四位以下の男女に、位官に應じて大藏の鞍を割當て、大辨、申文を奏する式。
あふたは「圍爐裏」(冬)爐の大なるもの。
あふたは「圍爐裏開」(冬)冬の初に圍爐裏を開くこと。
あふたは「圍爐裏蓋」(春)爐蓋ぎ。

あはれは「繪合」古へ貴人、女孺などが繪巻の類を持出し左右に分ちて優劣を列する遊戯。
あはれは「繪扇」(夏)種々の繪様ある扇。
あはれは「繪扇」(夏)種々の繪様ある扇。園花鳥も裏繪は薄き扇か。太武。
あはれは「衛玠」晉人。容儀頗る端麗なり。嘗て羊車に乗りて市を行く。人見て五人と爲し、京中の人、之を視んて群衆すること堵の如し。會ま廿七歳にして殺せしかばこれ衆人に看殺されたるなりと云はる。
あはれは「衛夫人」晉の李矩の妻、奕に學び能書の名高し。
あはれは「繪扇扇」(夏)種々の繪様ある扇。園繪扇扇のそれも清十郎にお夏かな。無村。
あはれは「慧可」支那北魏の人。正光二年の冬、滎陽を嵩山の少林寺に訪ひしに達磨事に托して面せず。慧可即ち、門に立ちて明日を待ち、積雪膝を没するも屈せず。遂に許されて道を聴き、後其衣鉢を傳へて禪宗の第二祖となる。

あはれ

あはれ

あはれ

あはれは「會下」禪家の學徒をいふ。又、其學寮をいふ。エケ。
あはれは「垣下」主人を補けて賓客を招待する人。古語。
あはれは「回向院」東都本所、兩國橋の東にある寺院。圓豐山無緣寺といふ。本尊は阿彌陀如来にて、無緣の人を拜るところ。
あはれは「回向院施餓鬼」(秋)七月七日、東都兩回向院にて、無緣佛のため行ふ施餓鬼會。
あはれは「繪轎子」(夏)繪轎ある轎子。園新尼の着つ、おかしや繪轎子。召波。
あはれは「女萎」(春)水邊に生ずる莖草。根に小塊ありて、味みぐしといふ。一説に芥の異名なりといふ。俳諧にては多く後者とせり。園いさ、かの遊びやみぐに小風呂敷。道彦。
あはれは「青字」(秋)字の一種。子、細長さものと、塊状をなすものとあり。よく煮ざれば食ふべからず。
あはれは「秋」苛烈なる味をいふ。俗にみぐいといふ。
あはれは「女萎」(春)エケを見よ。
あはれは「笑蘭花」(春)小米花(ハナ)の

あはれは「會下」エケ。
あはれは「遠隔日」父母、先祖などの忌日をいふ。
あはれは「眞刺」鷹の餌にする小鳥を差し捕ふこと。
あはれは「眞刺」眞刺十王。能狂言の名。
あはれは「衛士」古へ禁中守護のため、諸國より召したる武士。轉じて仕丁を云はらはせり。
あはれは「會式」(冬)おめい、かう。
あはれは「繪島」淡路の北の海中にある島。多く播州明石より眺めたる景を稱す。
あはれは「悪心」次を見よ。
あはれは「悪心僧都忌」(夏)六月十日、比叡山悪心院及び、京都京極繪師安養寺にて悪心僧都(名は源信、佛像彫刻に名あり。寛仁元年寂)の忌を修すること。源信忌。園涼しげに立つる蓮華や源信忌。青々。
あはれは「會者定難」佛説に會ふものは必ず難るといふ意にて、生者必滅と共に無常をいふ語。
あはれは「畫双六」(春)正月の遊にする道中双六などの類をいふ。双六盤に對していふ。○淨土双六。道中双六。園

あはれは「繪扇」武者、龍などの繪を畫さし、かのぼり。
あはれは「繪多村」種々の部落をなせる村。
あはれは「越後屋」江戸日本橋駿河町の呉服商、三井家のこと。延寶元年、八郎右衛門高利の創業とす。
あはれは「越」支那戰國時代の國名。吳越の條参照。
あはれは「越中梅」(春)梅の一種。大花にして、白く淡紅を帯ぶ。豊後梅に似たり。園越中梅二月の雪の時得たり。千竹。
あはれは「越王臺」越王勾踐が、吳を平けて後、築きたる高臺。
あはれは「越天樂」雅樂の名。
あはれは「繪所」古へ禁中にありて繪畫のこころを司りし役所。
あはれは「惠雨」空華子と號す。香道茶道をよくし、書畫に名あり。又、物の香を懐き分くに妙を得たり。嘗て雪の日に小兒が、雪兔を作りて持來りしに、こは門前の魚店の雪なりとて之を言ひ中てしと。又、或家に秘藏せる名香紅麴、紛失して幕府に之を訴ふ。惠雨之を聞き、一日、街頭に出しに、異香の漂するをさ

をいのまか

をいのまか(老版)山城國乙訓郡にあり。山城及丹波の國境の山路なり。

をかき(岡崎)東海道三河國にある市街。又、京の東北、聖護院、黒谷に接したる地。

をかき(岡崎)東海道岡崎の驛にて流行せし俗曲。其唄に合せ踊るを岡崎踊といふ。

をかき(岡崎)九月十六日、京都岡崎、東天王社(午頭天王を祀る。吉田山の同社に對して東天王社といふ)の祭禮。犬靈の鈴といふを出す。

をかき(岡崎)やまのりの末の古太鼓。風狀をかき(岡崎)岡崎節を見よ。

をかか(岡崎)能狂言の名。又、煎餅の異名。

をかか(岡崎)古今集三木の一。實物詳ならず。

をかか(岡崎)同(番)サツキツ、シマ。同じ。ニツ、シ。山ツ、シ。苗字。をかか(岡崎)船に乘らすして岸にありて釣すること。

をかか(岡崎)屋根の端に二列又は一列に布く瓦。竹筒を二つに割りし如き形のもの。ニツ瓦。筒瓦。

をかか(岡崎)大晦日の夜、岡に登りをかか(岡崎)大晦日の夜、岡に登り

を逆に着て

を逆に着て我家の方を望めば、明年の吉凶見ゆるといふ俗。逆さ登。此村に長生多き岡見かな。召波。

をかか(麻幹)麻の莖の糸を取去りたる殻をいふ。孟蘭盆に用ゐて供物の箸さし、又、迎火、送火を焚く料とす。

をかか(麻幹)七月十日前後、又は盆市に麻幹を荷ひて賣歩くもの。麻木賣。因果はかく骨で候とや等殻賣。膠太。

をかか(麻幹)魂(マ)團に供ふる麻柯の箸。麻木の箸。團あはれめや麻木の箸の長短。也有。

をかか(秋)水邊又は陸地に繁殖する草。花葉共に芽に似て長大なり。莖は芦の如くにて節の間短く、秋花を開く、淡紫にして後白し。秋の聲。秋の風。萩原。折々や雨月にさる萩の聲。雪芝。

をかか(小水曾女)信濃國木曾山中に、柴賣る女をいふ。

をかか(秋)萩の聲。萩の葉に風渡りて音するをいふ。萩の風。萩の風。北より來り西よりす。几童。

を野のほま

を野のほま(秋)今の陸前國宮城郡の海邊の古稱。

をかか(秋)草の芽を見よ。萩もゆる。萩の芽や螢の干等がちらはだし。底以。

をかか(秋)萩は假の稱にて、草の焼原と同意なり。すがるの萩さし。一説に、萩の初生の芽黒きを、焼原の草の黒きに比へたる稱なりといふ。萩音もなき萩の焼原春寂し。萩音。

をかか(秋)萩の茂りし原。萩原に捨て、ありけり風の神。太鼓。

をかか(秋)萩の芽。萩若菜(番)二月頃、萩の芽生じ、葉を出したるもの。

をかか(小倉色紙)二月の異名。をかか(小倉色紙)古へ、定家卿が小倉山の山莊にて百人一首の歌を書きたる色紙。

をかか(巨椋池)山城國久世郡に屬す。方一里の湖水。一に大池と云ふ、古へ宇治川に注ぎ更に流れて淀川に入りし所とす。

をかか(小倉祭)九月十五日、山城久世郡小倉村、巨椋神社(春日體神を

をいのまか

をいのまか(老版)山城國乙訓郡にあり。山城及丹波の國境の山路なり。

をかき(岡崎)東海道三河國にある市街。又、京の東北、聖護院、黒谷に接したる地。

をかき(岡崎)東海道岡崎の驛にて流行せし俗曲。其唄に合せ踊るを岡崎踊といふ。

をかき(岡崎)九月十六日、京都岡崎、東天王社(午頭天王を祀る。吉田山の同社に對して東天王社といふ)の祭禮。犬靈の鈴といふを出す。

をかき(岡崎)やまのりの末の古太鼓。風狀をかき(岡崎)岡崎節を見よ。

をかか(岡崎)能狂言の名。又、煎餅の異名。

をかか(岡崎)古今集三木の一。實物詳ならず。

をかか(岡崎)同(番)サツキツ、シマ。同じ。ニツ、シ。山ツ、シ。苗字。をかか(岡崎)船に乘らすして岸にありて釣すること。

をかか(岡崎)屋根の端に二列又は一列に布く瓦。竹筒を二つに割りし如き形のもの。ニツ瓦。筒瓦。

をかか(岡崎)大晦日の夜、岡に登りをかか(岡崎)大晦日の夜、岡に登り

をかか(麻幹)麻の莖の糸を取去りたる殻をいふ。孟蘭盆に用ゐて供物の箸さし、又、迎火、送火を焚く料とす。

をかか(麻幹)七月十日前後、又は盆市に麻幹を荷ひて賣歩くもの。麻木賣。因果はかく骨で候とや等殻賣。膠太。

をかか(麻幹)魂(マ)團に供ふる麻柯の箸。麻木の箸。團あはれめや麻木の箸の長短。也有。

をかか(秋)水邊又は陸地に繁殖する草。花葉共に芽に似て長大なり。莖は芦の如くにて節の間短く、秋花を開く、淡紫にして後白し。秋の聲。秋の風。萩原。折々や雨月にさる萩の聲。雪芝。

をかか(小水曾女)信濃國木曾山中に、柴賣る女をいふ。

を逆に着て

を逆に着て我家の方を望めば、明年の吉凶見ゆるといふ俗。逆さ登。此村に長生多き岡見かな。召波。

をかか(麻幹)麻の莖の糸を取去りたる殻をいふ。孟蘭盆に用ゐて供物の箸さし、又、迎火、送火を焚く料とす。

をかか(麻幹)七月十日前後、又は盆市に麻幹を荷ひて賣歩くもの。麻木賣。因果はかく骨で候とや等殻賣。膠太。

をかか(麻幹)魂(マ)團に供ふる麻柯の箸。麻木の箸。團あはれめや麻木の箸の長短。也有。

をかか(秋)水邊又は陸地に繁殖する草。花葉共に芽に似て長大なり。莖は芦の如くにて節の間短く、秋花を開く、淡紫にして後白し。秋の聲。秋の風。萩原。折々や雨月にさる萩の聲。雪芝。

を野のほま

を野のほま(秋)今の陸前國宮城郡の海邊の古稱。

をかか(秋)草の芽を見よ。萩もゆる。萩の芽や螢の干等がちらはだし。底以。

をかか(秋)萩は假の稱にて、草の焼原と同意なり。すがるの萩さし。一説に、萩の初生の芽黒きを、焼原の草の黒きに比へたる稱なりといふ。萩音もなき萩の焼原春寂し。萩音。

をかか(秋)萩の茂りし原。萩原に捨て、ありけり風の神。太鼓。

をかか(秋)萩の芽。萩若菜(番)二月頃、萩の芽生じ、葉を出したるもの。

をかか(小倉色紙)

をかか(小倉色紙)古へ、定家卿が小倉山の山莊にて百人一首の歌を書きたる色紙。

をかか(巨椋池)山城國久世郡に屬す。方一里の湖水。一に大池と云ふ、古へ宇治川に注ぎ更に流れて淀川に入りし所とす。

をかか(小倉祭)九月十五日、山城久世郡小倉村、巨椋神社(春日體神を

をかか(小倉祭)九月十五日、山城久世郡小倉村、巨椋神社(春日體神を

をんな

をんな

をんな

る、女子。
をんな (小忌) (冬) をみこころも。
をんな (小忌衣) (冬) 小忌(大嘗、新嘗、豊明(アガリ)節會等に齋戒すること)に用ゐる衣、白布を青摺にして袴衣の如く製し、右肩に赤紐二條を附く。略して小忌ともいふ。青摺の衣、山藍袖。おほみ。おみのそで。古き世の見ゆる小忌の摺衣。優々。
をんな (女郎花) (秋) 草の名。春宿根より生じ、莖圓くして高さ三四尺、葉は菊に似て岐深く、毛ありて對生す。秋、莖頭に數條の小枝を分ちて花簇り附く。若は深黄色にして、粟粒の如く、開けば五出にして色や、淡し。をみなべし。をみなめし。散踏。薄吹く中にも立てり女郎花。雪弓。
をんな (女郎花) (秋) 同前。
をんな (女郎花) (秋) 七月の異名。
をんな (女郎花) (秋) カサネの色目の名、芙蓉、裏黄。
をんな (女郎花) (秋) なみなへしに同じ。又、戀の恨にて投身して死したる女の塚より女郎花の生ひ出し、こゝを作れる謡曲。

をんな (小忌袖) (冬) をみこころも。
をんな (遠志) (秋) 姫萩ともいふ故に、萩の字を以て秋季とす。山野に自生する草。苗高さ三四寸、一根に數莖を生じ、葉圓くして萩の如く、三月頃、萩の花に似たる深紫花を開き、實を結ぶ。大さ二三分にし、て圓なり。
 根を藥用とす。
をんな (圓城寺) 近江國志賀郡長等山に在り。一に三井寺ともいふ。天台宗、寺門派の本山にして弘文帝の皇子、大友與多王の御創建なり。
をんな (温石) (冬) 輕石又は山鹽を火に燒き布に包みて身に當て冬の寒を防ぐもの。温石や駕の窓から暖乞一雨。
をんな (女歌舞伎) 慶長中、出雲國より起りし女の歌舞伎。京四條河原は最も盛んにして後江戸にも來りしが寛



(じんを)

永の末年、風俗を亂す故を以て悉く禁ぜらる。
をんな (女正月) (春) 正月十七日、松の内は婦女事多く閑暇なき故、此日を以て遊び樂しむこと。團入口にすれ入る日や女正月。青々。
をんな (女親位) (春) によじよる。
をんな (女節分) (春) 女せつぶん。
をんな (女節分) (春) 正月十九日、京師の女子多く、吉田の清拔に參詣す。節分は家事多くして尼神詣をなす事能はず、今日を以て節分の厄抜に代ふこと。女せちぶ。
をんな (女大學) 女子の修身書家の教を假名文にて記し、書。具原登軒の著なりといふ。
をんな (女踏歌) (春) 正月十六日、行はる、踏歌。樂終りて後舞妓、紫宸殿の南庭をめぐる式あり。中古より男踏歌絶えたらば女踏歌の日を以て節會とす。團。灯を奪ふ女踏歌や月と梅東居。
をんな (女使) (春) (冬) 二月及十一月の春日祭に差し遣はさるる内侍の稱。
をんな (女文字) 平假字のこと。

をんな

をんな

をんな

をんな (女禮) (春) 女禮者。
をんな (女禮者) (春) 婦女の年禮をいふ。女禮。團。行ちかふ女禮者のままひかな。青々。○一年を飾り盡すや女禮。喧風。
をんな (温風) (夏) 季夏に吹く風。(温風至るを見よ)。
をんな (温風至) (夏) 七十二候の一、六月節の第一候。
をんな (輻輳車) 古へ秦始皇、行幸の途にて崩御せし時、輿を秘して其遺骸を寒温自由なる車に載せ歸りし故事より、輿に用ゐる車をいふ。
をんな (遠流) 古へ流罪の最も重きをいふ。伊豆、安房、常陸、佐渡、隱岐、土佐等へ流刑するもの。
をんな (王莽時) 日の暮を云ふ。
をんな (侍從) こしもを云ふ。
をんな (遊女の別稱)。
をんな (遊女) 承應の頃、小山次郎三郎といふ人の使ひ始めし、淨瑠璃芝居の操人形をいふ。
をんな (小弓御所) 下總國千葉郡蘇我野にありし足利義明の居城。後、北條の爲に敗れて烏有となる。
をんな (折) 連句の體紙の一折をいふ。(連句

作法參照)
をんな (折合) 連句の用語。附合のてはが上句の留りの字と、下句の中の留の字と同一なるをいふこと。
をんな (折掛燈籠) (秋) 竹を折り、角なる板を立て、四隅に紙を張り、一隅を張破して、灯を入るやう作りたる盆燈籠。享保の頃江戸に行はれしといふ。
をんな (折紙) 刀紙又は古書畫の鑿定書をいふ。
をんな (折句) 隱題の一種。短歌又は俳句の各句の頭に、或語の假字を一字づつ置き、誦むもの。例ば「ころもきつゝなれにしつしましあればはるばるきねるたがをしぞおもふ」といふ歌は「カキツバタ」といふ五字を折句にしたるもの。又「夕立や田をみめぐりの神ならば」といふ句は、ユヅカカ三字を折句にしたるものなり。
をんな (折琴) 折りたたむやう作りし琴。
をんな (折助) 武家の下僕をいふ。
をんな (折居) 香道茶道などに用ゐる紙



(籠燈掛折)

折の袋、香札を入る、もの。
をんな (折頭巾) (冬) 頭巾の一種、頂に多くのひだを折りつけたるもの。
をんな (折鶴釣) (夏) 紙にて鶴の形を折り、數箇を糸に綴りて天井に吊す。柱、障子、天井などに鶴の翼を付くるを防ぐ爲なり。
をんな (折端) 連句の一折の終りの句をいふ。(連句作法を見よ)。
をんな (折紙) 長々延ばしての紙。
をんな (折板) 片木板を折り曲げて置れる小櫃。四脚ありて、中に菓子などを盛るもの。
をんな (折紙) (春) 紙などにて折りたる麗人形。紙籠。
をんな (折柳) 若衆の髪を結び方の名。元祿頃流行せしものにして風流洒落なるもの。
をんな (居湯) 釜を附けぬ風呂をいふ。行水の如きもの。又、温泉(ユ)をいふ。
をんな (折燈) 連句の用語。連句の體紙一折の内、同じ種類のことを出すを思むをいふ。
をんな (遠里小野) こほささの。
をんな (大蛇) 素盞男命、山田の大蛇を退治することを作りし謡曲。

ちや。

ありの「有王」使寛僧都の従者、主を奪ねて鬼界ヶ島に赴く。 有王今は東なく奉公。(魚尾奉)

あわの「泡盛草」(夏) 山草なれども庭園に培養す。一二尺葉は羽状に列び、硬質なり。初夏に茎を抽き其分岐し小白花を散らす。升麻の別種なり。

あやの「青軸」(春) 梅花の一種。原産は支那にして寛文頃舶来して日本に多くあり。枝及葉ともに青く花も緑色を帯ぶ。八重のものあり。枝の下垂したるを青軸しだれといふ。 枝等梅 青軸のさくや世の中梅かほる 鳥明

あざの「青」(春) 青桐のこと

い

いかに「浮人形」(夏) セルロイドにて小さき人形を造り足に鉛の重りを入れて水中に浮すもの。 浮人形 奇麗に泳ぎけり 翠淡

いかに「浮世袋」 屠蘇袋の如く三角の袋に綿を入れ糸にて暖簾などに形容に吊しおく物。 花袋

いかに「浮世」 櫻の一種。八重淡黄色にて瓣は十五六枚直径一寸三分の花を開く。

いかに「見」 古原遊女町の通話、羽織を引被りたる容を云。

いかに「牛佛」 關寺建立の時、一匹の牛現はれて五村を運びしが一日俄に疲れて見えたり。京より此彌勒堂に来るべき僧の夢に迦葉佛宮に入滅近しとの旨に急ぎ来れば八月二日迦葉入滅の日に此牛堂を廻りて死せり之を寺内に葬りて牛佛といふ。今昔物語に出づ。 牛佛の跡形ふ草の夕暮に (冬の日)

いかに「海鏡」 花活の具。縁の廣き青銅のもの。 海鏡ばたにもる春の谷水(夏)

其上へ盛る。鮎、鯉、鮒など用ゐる。

いかに「生洲船」(夏) 生魚を船中に鹹水に貯しおく。

いかに「石垣町」 遊女町にて昔は金堀にて蟹を養ひ水晶の合天井に金魚を放ち美酒珍産に飽かしめし所。天和年中禁ぜられて通常の遊所となる。

いかに「同心方」 關原の永観二年に丹波廣領に由て編まれし日本の古書。

いかに「伊勢笠」 草花竹木の細密なる畫ある笠。

いかに「二橋」 洛外紀井郡にあり。京三條の東より南を經伏見登陸橋に至る。即ち山城大和の境方廣寺門前にて俗に大佛門前と云其南に二橋二橋あり。 二橋と云す一二の橋の夜明かな 其舟

いかに「市守長者」 橋路兄の二子市若不幸にして落城し三輪里に市の立日を窺ひては引後引を以て備れし米を掃集め之を糧として兩親を養ふ時の人を市守と呼ぶ。程なく丹波の關司の女吉原に思はれて婿となり櫻井に館を建て高財長者の名を時の帝より賜はりしが人皆市守長者と呼べるといふ傳説。 初船つけば市守長者かな

(懐子)

いかに「一文字笠」 編笠の頂を横より見れば一字を引たる如し昔讀賣など被る。今葬式の施主など冠るものなり。

いかに「一夜松」 北野の松原を云。天曆九年三月十二日普神の託宣に右近馬場の松千本生すべしと果して其ごとし今七本松原といふ。

いかに「寶宮」 文徳帝の皇女伊勢の齋宮たりし時葉平と契る。戀の詞。

いかに「岩淵」 三室戸の東谷にあり。昔宗休といふ者。夢想により此淵より觀音像を引上げ三室に祀る。

いかに「岩柳」(春) 山地の岩石に生ずるを以て名あり。葉は長楕圓形。嫩葉紅色を帯ぶ。春黄色長き二寸許の犬の尾の如き花を着く。

いかに「四拜あやめ」 五月開く黃、白、紫、褐色等あり花壇又は剪花とす。

いかに「伊呂波茶屋」 元祿頃江戸谷中感應寺門前にいろはと書たる暖簾を掛たる水茶屋數十軒並びしを云。

いかに「色茶屋」 大阪道頓堀演劇に板園の水茶屋四十八軒元祿十三年十一月に免許せられ。世人呼ていろは茶屋といふ。

う

うかに「浮人形」(夏) セルロイドにて小さき人形を造り足に鉛の重りを入れて水中に浮すもの。 浮人形 奇麗に泳ぎけり 翠淡

うかに「浮世袋」 屠蘇袋の如く三角の袋に綿を入れ糸にて暖簾などに形容に吊しおく物。 花袋

うかに「浮世」 櫻の一種。八重淡黄色にて瓣は十五六枚直径一寸三分の花を開く。

うかに「見」 古原遊女町の通話、羽織を引被りたる容を云。

うかに「牛佛」 關寺建立の時、一匹の牛現はれて五村を運びしが一日俄に疲れて見えたり。京より此彌勒堂に来るべき僧の夢に迦葉佛宮に入滅近しとの旨に急ぎ来れば八月二日迦葉入滅の日に此牛堂を廻りて死せり之を寺内に葬りて牛佛といふ。今昔物語に出づ。 牛佛の跡形ふ草の夕暮に (冬の日)

うかに「海鏡」 花活の具。縁の廣き青銅のもの。 海鏡ばたにもる春の谷水(夏)

波渡

うかに「歌石」 嵯峨の庵に瀧口入道を訪ひて遺はぬ恨を門前の石に書殘し去りしと云古跡。

うかに「打倒」 鷹餅、鷹犬の餅など入置く袋類に付る。

うかに「内鼠」 世間知らずの人をいふ語。 國外に見る月や世界の内鼠(砂金袋)

うかに「宇治飯」 源氏物語中の人物。 源大將の通ひし女性。

うかに「宇治飯」 源氏物語中の人物。 伊豫介が妻。はまきくの巻に源氏の忍び寄るを藻波の鼓となりて。夫と共に常陸に下り夫殺後尼となる。

うかに「野郎」 野郎の手燈を焚き小刀を腕に刺して見する者。 國あらずのうて香たきやあるくらん (慶筑波)

うかに「表挿」 今いふ信玄袋なり。上のくへり糸を赤紐になし婚禮の時持参す。 普通は兼用とす。

うかに「馬兜鈴」(夏) 山野に多し。葉は山芋に似て惡臭あり或は他物に絡む不正型なる筒状の花を開く。紫暗色なり。

なり。

うかに「運動會」(春秋) 諸種の運動競技を各コートで催すこと。これには多く學校團體の對抗戦ありて人氣を沸す。各地より男女選手の上する者陸上、バスケットボール、フットボール、デットボール。高飛。走高飛。ホッキ。ランニング。砲丸投。擲飛。走幅飛。ホップステップジャンプ。タリケツト。端裏走等々。

うかに「梅草」(夏) 山野に生ず葉は心臓形にして茎を抱へ夏葉頂に一花を開く形梅花に似て白色五瓣なり。

うかに「浦島草」(夏) 山の隙地に生し。葉は羽扇に似て花は天南星の如く其苞葉紫色にて中の花は細長く釣竿のしなへに似て外に垂る。毒草なり。 虎掌

うかに「浦辻」 明暦頃京の筆工の名人。

うかに「彷彿船」(夏) 川納涼の時。物賣船を云。茶船の典次兵衛といへる者寛文頃に興えたり。

うかに

うかに

うかに

え

えいせいし「江市格子」江市の町人江市屋宗助といふ者造り初む、細かき格子を十字形に組み外より内の透見し難く造りしもの、多く派手商業の出入口に建らる。

えんせいの「江戸櫻」(華)櫻の一種、花柄は短く茶色の芽て八重の紅色なり。

えんせいの「延胡索」(薬)木は漢種なれど多年生草木にて塊茎を地中に残し春を地上に出し夫より茎を出す、葉は牡丹の葉の如くして缺刻あり、五月頃花軸を出し唇形花を房の如く附く碧紫色なり、ついで、延胡索をばつまむ木の根(浪速津)

えんせいの「延胡索」家の軒下三尺通を隅から隅へと建を敷きて素足のまゝ行通ふこと。建なき場合も軒下を建道と呼べり。延胡索は年のかすかの立所かな百歳

お

おきり「櫻」(華)舶来のカタバミ草にて葉は三葉三梗綿に四葉あり晩春に開花す播種の時より六月乃至九月に咲もあり白、黄、肉色等なり。園オキザリスの花午見たり日曜日 掛巻郎

おきり「ねむりぐさ」を見よ。

おきり「愚戯男」萬葉集の歌意。石川郎女が大伴田主の許へ隣家の貧女と許り夜中火を借に來しを思ふ女とは知らず唯に火ばかり興へて返しけるを翌日女より「たはれを」と我はきけるを宿借さす我を返せりおぞの戯男」と詠て贈る男返し「戯男に我は有りけり宿かさず歸せる我ぞたはれにはある」

おきり「御臺櫻」飯ひつのこと。園見淡せば花よ紅葉よおだい置 鶴永

おきり「落葉君」源氏物語中の人物、柏木齋門の内室、夫歿後夕霧と逢ふ、故君を憶うて落葉をなにと詠みし女性

おきり「女の髪」落毛を買あるき髪に製する葉、洛外四常盤より出で女が頭に袋をのせて市中をおちやないと呼行く。園たけの髪をもてるおちやない(慶筑波)

おきり「帯取池」鳴瀬の西に在り、中

世此池に妖蟲種て水萍を帯と見せかけ之を取らんとする者を牽入て喰ふと云ふ。

おきり「狼」(華)日本の狼といふは山犬なり口大耳小なり豺と云。狼昔は無季なりしが其感じ冬にありとして今冬季題とす。園捕へたる狼吼へぬ蓋茶屋鳴雪

おきり「大掃除」(華)地方により日定まらざれど毎年五月より行ふ。園大掃除雨に落つく屋根の煤 陶々

おきり「大駱子」(華)人家に栽う、柳の一種、葉は長卵形鋸齒あり、枝葉共に白毛を被り小托葉あり、春大ころ草の如き褐色に赤點ある花を開き後黄色となりて落つ。山柳

おきり「大島櫻」(華)櫻の一種、伊豆の大島に産する山櫻にて花白く香高く青き芽ばえなり、沙風に抵抗の力強し庭園にも栽う。

おきり「大多喜園」上總の名産なり。園 藤毎に綱敷上や小田喜もり 青蓮

おきり「大風合戦」(華)越後白根町にて毎年六月頃二週間東四軍に別れ風の鼓技を行ふ。大さ三間より四間半に至る。糸は直徑一寸ほどあり。

か

かきり「大葉櫻」(華)落葉喬木、酒地に生ず、葉の長さ五六寸、巾二寸許、五月頃に黄緑色の長き懸垂花を開く。

かきり「大山蓮花」(華)庭園に培養す、厚朴の木に似て五六月梢上に直径二三寸六瓣又九瓣白色の花を開く。天女花

かきり「思草」萬葉集に「道のへの尾花が下のおもひ草今さら更に何か思はん」の歌に由り戀の詞に用ゐらる。雲窓襖に云渡の思草は春蘭の如きものにて花は紫色なり美濃尾張地方の古堤の薄の中に秋の末つ方生るものにて葉なきものなりとあり。園 何思ひ草狼のなく(猿蓑)

かきり「織部流」古田織部正重然より起る茶道の名、重然は利休の高弟にて最も高く後世織部好、織部焼等傳はるなりしが大阪へ内通露はれて元和元年六月切腹して死す七十三。

より四季に花あり花色も頗る多く、芳香あるを以て稱せらる。此花の一名を神の花と呼び曾て佛國路易九世が十字軍を率ゐて阿弗利加遠征の時病める兵士を慰めんとして野生のものを採て匂を嗅せて勇氣を養つた逸話あり。

かきり「海軍記念日」(華)明治廿八年五月廿七日日露の大戦にバルチック艦隊を對馬沖に全滅し敵將ロジェストウキンスキヤを生擒せし記念日。園 記念日の卓に天幕の海日強し かな女

かきり「蟹満寺」洛外相樂郡にある寺。此村に法華信者の家の娘七歳の時蟹の捕へられしを憐み請で放ちやりしが成人の後其父田圃に蛇の蛙を呑みしを見て蛙を吐かば汝を解とせんと契りて蛙を救ひ家に歸り之を語り女を一堂に密閉し硬材にて間隙を塞ぎ蛇の來るを待つ美衣の青年至り其用意を見て忿怒し本體を現して園繞す、深夜悲鳴起り翌曉視れば大蟹と大蛇と共に寸断して死せり、女は終夜普門品を誦して事なきを得たり即ち蛇と蟹を葬り一字を建つと、後眞言宗の領となり山鏡を普門山と號すと云傳説。

かきり「柿の葉」(華)暖地に自生し又庭園に栽う、小灌木にて其葉三裂して厚く秋末に繖形花を綴ること八ツ手に似たり。

かきり「掛帯」女子神社へ詣づる時胸より

かきり「柿の葉」(華)暖地に自生し又庭園に栽う、小灌木にて其葉三裂して厚く秋末に繖形花を綴ること八ツ手に似たり。

かきり「掛帯」女子神社へ詣づる時胸より

かげんげろ

肩へかけ背で結び下ぐる頭巾の如きもの鎌倉室町時代に行はる。

かげんげろ【影人形】指にて種々の人形鳥獸の影をうつすもの。影繪 國春の夜や影人形の初芝居 浮石
かきせんか【笠着連歌】洛北北野神社にて毎月二十五日連歌の式あり、参詣の者何人に限らず附句を爲すを得。仍て笠着と云、往來の者の附る故なり。執筆添作して載るもの多し享保中に絶た

かきぎ【笠管】(秋)水田に培養す、高三四尺葉は三四分の巾ありて三尺の長さに及ぶ、夏花穂をなして繁茂す、秋に刈取てすげ笠を編むに用ふ。
かきり【何首烏】一に毛芋と云、春種を蒔き秋白花を穂状に附けむかこの如き實を結ぶ蔓草にて此根一球莖をなし色黄にして髪に如く根あり、採て藥用とす。

かたせはら【菅原】洛七條の西丹波へ越る道。國花のうち引こして居る菅原(菅原)
かたせはら【片瀬】偏屈者のこと。
かたせはら【歩】(秋)陸つかひの鶴。川條にて鶴を使ひ帖を巻しと見れば引上て別

かたせはら

に四の帖を見せ替たるを吐す。
かたせはら【桂帯】女の髪を亂れを白木綿にて包むを云、能狂言の女形は結べど同意なり、一に巾褌子、桂包ともいへり。

かたせはら【桂男】月中に桂樹あり其樹下に人あり、之を桂男といひ月の異名とす、されど總じて美男の稱とす。
かたせはら【首途水】京西陣五辻通の南櫻井辻に橋次が井あり、往昔金寶橋次が邸路にて、牛若丸奥州下向に此井水を以て首途を祝ふと云。
かたせはら【要石】常陸鹿島神社境内にある丸き中四なる石、上代神威を以て地中の惡魔を壓へ封せしといふ傳説。國要石なんぼぼほつてもぬけませぬ (談林十百韻)

かたせはら【釣草】(夏)路傍に生ず、一尺許細長き葉を有し夏穂を出して線柄色なり、小兒此穂を糸に結び蟹の面を撫れば剪みて放たざるを吊り上て取ると云。
かたせはら【貝細工】(夏)海邊などにあり、野菊の一種にて其花硬質にてセルロイドにて造りし如し黄色重瓣。國貝細工都の人を弄り見ん 斗文

かたせはら

かたせはら【鎌風】(冬)冬期氣壓の關係にて屈曲したる所に突如真空を生じ人其場合に遭遇すれば體中の氣膨脹して皮膚を破り殆んど石榴の割れしが如く口を開く之を古へは鎌の如き尖き爪をもてる體ありて突然人の足を研るなりと言ひ傳へたり。國御僧の足してやりぬ鎌 盧子

かたせはら【上爲女】揚屋の座敷の取持する女、上方にていふ話。
かたせはら【乾屎飯】支那にて糞を糞とる糞を云、神家にて役にたゝぬ者を嘗る語。國伏拜め花散おほふ乾屎飯 嵐雪

かたせはら【勸富舟】ちよき舟のこと、吉原三谷通ひに専ら用ふるに由り此名あり。
かたせはら【茶雄】茶師の名、宮崎彦九郎と云、加賀藩の抱へたり。
かたせはら【美人蕉】(秋)美人蕉を見よ。國庭に植うるものは種々の變種あり。美人蕉ひめばせう。國豚を賣る秋なれやカシナ 調むさく 告天子

かたせはら【蚊屋に懸】蚊帳に雁金を染め或は切抜て張る俗、其由来は長時にて蠅蠅を盡しより起るといふ、又九月蠅

かたせはら

かたせはら【休慶】元祿頃仕方咄の上手。
かたせはら【牛鍋】(冬)安俱樂部 國牛鍋に祖母は洗たる炬燵哉 四音
かたせはら【菊花祭】(冬)十一月三日先帝(明治天皇)の天長節なりしが崩御の後も其御高徳を歎慕の餘特に此日を菊花

かたせはら

に秋來ぬる趣を味ふ風流なりともいへり。
かたせはら【上林】宇治の茶園、丹波上林より來り公方家の茶を製す上林並順を初祖とす。
かたせはら【烏籠】面白くなきことの儂語、鴉を籠に飼おくとし其義。國蚊屋に鴉を飼おくとし其義。國蚊屋に鴉を飼おくとし其義。國蚊屋に鴉を飼おくとし其義。
かたせはら【唐花草】(秋)全體むら草に似て自生あり、又培養のものあり、秋梢に房の如く淡黄緑色の花を附く、雄花と雌花とあり、ビールの苦味を附けるに此雄花を用ふ。
かたせはら【唐輪盤】油を附けず頭上にて左右に分け輪をつくる鎌倉時代よりあり男女共に結ひしもの。

祭として祝日とす。國永しへに菊の露てる祭かな 四音

かたせはら【菊人形】(秋)小菊を以て人形の衣裳を綴り芝居狂言の舞臺面或は歴史物傳記などの或場面を飾りて觀世物興行とす。東京谷中園子阪最も有名なりしが明治四十年頃より次第に衰へ今其跡を絶つ。國人去て夜のしじまや菊人形 吟秋

かたせはら【議會開院式】(冬)十二月下旬。
かたせはら【雄子焼】田樂豆腐の味噌を付ぬらちを呼ぶ語。
かたせはら【黄水仙】(夏)庭園に培養す。葉は狭く花は黄色水仙に似たり。夏水仙

かたせはら【喜首座十七】又木曾木とも書く皆宛字なり少年血氣のことを云、きそん十七寅の年などいって男女氣荒く氣まゝ者の義。國むかしになりぬ吉首座十七 (魚尾琴)
かたせはら【北御門】六波羅密寺の西にあり、六波羅の門趾を里人誤て禁闕の門と思ひ御の字を加へたと云。
かたせはら【鬼女籠】(夏)山地に生ずる蔓草、圓形の葉は潤まらず光澤あり、夏葉

かたせはら

かたせはら

腋に銀形白色の花を開く後實の鞘より葉をふく。ふやうらん。國鬼女籠と聞て雄茂よく見て (柿の葉)
かたせはら【夏】原野に生ず、長珠沙華に似たる花にて黄赤色、葉は枯れて花のみ盛なり、有毒の物。
かたせはら【朝糸草】(夏)夏期微細の種子を水盤或綿を水に浸したる上に蒔き細かき糸の如き線草を生ず多く夜涼の露店に賣る。
かたせはら【桐柳】(冬)原野水地に産す、葉は披針形表面は濃緑色にて光澤あり、裏面は絹糸の如き毛茸ありて恰も雲母を布きたる如く美なり、初春に桐柳の如き黄赤色の花あり、美濃に多しと云。
かたせはら【杵に鼓】杵に鼓を張るといふ儂語、不能なること。國宮人のかくるや杵につるあをひ 季吟
かたせはら【紀有恒】ありつねを見よ。
かたせはら【紀關守弓】昔男の夢に戀人來りて我は遠國にゆく別の紀念にと弓を置て消ぬ。男弓を愛しけるに一朝白鳥と成て飛去る其跡を追ければ紀の關守の手取弓がそれなりしと。國手取弓紀關守の頑に (ひさき)
かたせはら【冷ビール】國姿見にら

草んたふ

つる庭樹やビール酌む 浮月
 草んたふ【銀葉】香を匂くに用ゐる板、細き三分四方なる銀の棒に雲母の板を嵌込たるもの香炭園の上へのせ其上にて香片を匂く。
 草んたふ【銀河草】(夏)山地に自生し又園庭に植う、高さ一二尺にて葉の先端二又に裂けるを特徴とす夏草頭の数箇の花を穂着し、白色にして茶の花に類す、托葉あり。
 草んたふ【金魚草】(夏)園庭に植う、長楕圓の葉を對生し一尺許、夏日唇形金魚遊泳の形の花を開く色は黄、紅、白、紫種々あり。うちらん。柳穿魚。
 草んたふ【金鷄菊】(夏)北米の産。高一二尺羽状の葉あり、六月頃長梗ある花を開く花は一重にて菊形をなし瓣に缺刻あり周りは黄色にて内は暗紫色花期長し。
 草んたふ【金鈴】寛永中駿河の大小に金鈴かけてきらめかすこと武士の流行となり裕福者を諷名していふ辭となれり。
 草んたふ【金鈴】(秋)畑地に栽培す、南瓜に莖葉酷似し實は楕圓形にて熟す

草んたふ

れば紅褐色滑澤あり實或は酢にして食す、果物店にて裝飾に置くもの多し。
 草んたふ【金蓮花】(夏)のうぜんはんを見よ。
 草んたふ【京格子】壁に棧組く列べたる格子。
 草んたふ【京照燈】都巡禮を見よ。
 草んたふ【御羅男】御羅は香木遊女は御羅を焚きしより客之を贈る、酒客の金銀不足なきものを御羅男と云。
 草んたふ【魚道】海中に魚の通ふ道筋に擬して水分を盛る器の縁側をいふ、盃中、活花器など。圓蓋の魚道へ花のちりか、り、貞徳。
 草んたふ【御柳】(春)支那原産の柳、元禄頃舶來す、庭園に栽う、高さ一丈許、葉糸の如く梢に似たり、枝は下垂し夏に至り梢に粉紅色の花を開きて美なり。|| 櫻柳
 草んたふ【切懸】垣のこと、又今のシタミ板を打たるを云。
 草んたふ【切組】(夏)暗褐色圓筒状のウジにて湿地に生じ禾本科植物の根根を喰ふ、越年して翌春地上に蛹となり羽化し蚊に似て脚長く飛ぶ俗にガガンボと

草んたふ

云。圓切組の喰たほしたる植たばこ(炭俵)
 草んたふ【切山椒】(春)一月東京市内の菓子舗にて山椒入の餅を細く算木形に切りて賣出す。
 草んたふ【紙團豆腐】京紙團社門前の茶屋にて焼て賣る田樂、麥粉をまぶして吹ふ。
 草んたふ【九階草】(夏)山地に自生す、高さ三四尺、葉は廣き披針形にて四葉對生し間隔正しく層を爲す、夏草頂に穗状に梗を爲し紫色の花を穂着す。|| 草本威後仙。
 草んたふ【釘貫】古く元禄頃迄は關の木戸、町の木戸などに忍び返し釘打たるより釘貫の木戸といふを略して釘貫といへば直に木戸のごとに扱ひたり。
 草んたふ【草類】(夏)山草、又庭園に植う、花はがくに同じ。
 草んたふ【草木瓜】(春)しどみのはな。
 草んたふ【孔雀太夫】堺の能太夫にて延べの名人。圓さる間孔雀の舞のな

草んたふ

がければ、友帯
 草んたふ【香足袋】普通足袋は紐にて結ぶコトにてとむるをくつたびと云。|| 團
 草んたふ【熊毒】(夏)山地に自生の小灌木、莖葉に刺多く葉は三尖大なり、春白色の花を開き夏黄赤色の大なる實を結ぶ。
 草んたふ【熊谷笠】深き圓笠にて僧僧など冠りしと云。
 草んたふ【熊】庭園に培養す、其形若荷に酷似す、高三四尺葉は長く莖を抽て舌状の不整形の花を穂着す花絲長く垂れ紅色の斑點あり。|| 花若荷 高良莖
 草んたふ【熊】(秋)山野にあり、葉牛蒡に似て全體はあざみに類す深紅色の菊頭の如き花を開く。
 草んたふ【熊野炭】(冬)紀州より出づ俗にびんちやうと云、備後屋長右衛門始て抽出す楸材なり。
 草んたふ【熊】熊は栗を好み木に上りて枝を手折て己れの居所を圍ふといふ。
 草んたふ【淀船】淀船の牧方あたりへ來れば物賣の船四方を取巻き釣繩を打懸て船を寄せ、牛蒡喰はんか、酒くらはんかを

草んたふ

と、わめき立て、押賣す、乗客睡る能はずと云。
 草んたふ【車松明】常の松明を車の如く心木に中を結て風車の如くにし火を點ずるもの。
 草んたふ【車屋本】今春能太夫の弟子道説が自筆撰行せし述本の名。
 草んたふ【包和】(夏)心木に黄粉をかけたるなり。今の葛餅と製同じ。
 草んたふ【興渠】茴香の古名なれど、多く山藜の類を詠みたり。|| 圓餅みそとは折にふれたる興渠(熊尾等)
 草んたふ【馬肥】(春)見よ。
 草んたふ【黒川炭】(冬)武州小山田庄黒川村より出づ、佐倉炭に似たり。
 草んたふ【黒田】泥濘の凹所をいふ。|| 圓足袋踏よこす黒はこの道(猿蓑)
 草んたふ【黒文珠】(春)山にある落葉木七八尺にて緑黒の幹を有し細長き葉を簇生す、三月淡黄色の花をつけ秋黒色の實を結ぶ楊枝を製し又楸材とす。|| 鈎樟
 草んたふ【懷石】茶會の料理献立をいふ。
 草んたふ【光悦忌】(春)二月三日日本阿彌光悦(多賀氏太虚庵、空中齋、自得庵の號あり刀劍の鑑定家にして書、畫、

草んたふ

茶道、和歌、漆器、茶器の製作に技藝の名譽あり晩年駕籠に懸り寛永十四年を以て終る八十一の忌を其遺々の人により修す。|| 鷹が峯細雨となりぬ光悦忌 宋斤
 草んたふ【和雜繪】(夏)キヌ、サヨリ、餅、烏賊など色々作りませ酔酔につけて出す食品。
 草んたふ【觀櫻會】(春)宮中にて演舞宮に觀櫻の御宴を開かれ各國の大使公使各大臣高等官を召して御盃を賜はる。|| 圓さい浪や花吹入るゝ小盃 八十八
 草んたふ【粟上水】粟田口にあり、牛若丸金賣吉次を伴ひ奥州下向の道此所にて美濃の豪士關原與市に逢ふ、與市騎馬にて從者と共に馳て水を驅て牛若の衣を汚す、牛若怒り刀を抜て從者を斬り與市の耳鼻を削て之を放つ。
 草んたふ【駿馬會】(春秋)馬匹改良の目的にて東京目黒濱根岸等に催す。衆客皆賭をなして旺んなり。

花手鞠の如く咲出て美観なり形は櫻に似て淡紅色細小なり。

【櫻餅】(櫻) 櫻花の頃菓子屋にて賣出す餅菓子。櫻葉に包む。向島長命寺内のものは古へより有名にて菓二枚にて包みたり。 櫻餅の香を包みけり櫻餅 迷々

【柘榴火】昔公筑紫の配所にて堯ぜし後假山法性坊律師の許に魂魄來り我を護せし月郷雲客を取殺すべし其時大内より僧正を召んに必ず辭して参り玉ふなと告ぐるに僧正諾せざれば怒て佛に供へある柘榴を嚼て妻月に吹掛れば火焔と成て燃上りしといふ傳説。

【証流】(秋) 七月六日の夜或七日の朝櫻の葉流す如くす。 【藤摩紅】(藤) 梅の一種、嫩葉と枝と紅色を帯ぶ、冬春の間に花を開く、八重の濃き紅色にて美麗なり、薩州より出づ。 【佐波島】佐波島傳入といふ芝居の道敷方の名。元祿時代。 【佐保姫】(藤) 地黄を見よ。 【左馬頭】源氏物語中の人物、兩夜の品定に出る博士。 【山枝子】(藤) 樹は叢生し、葉は

菊に似て五裂、春白花を開き夏實を結ぶ紅くして味薄し。

【山茶花】(茶) 支那の原産にて本邦に移植す、高さ一丈許の落葉木本にて春葉に先ちて花を開く、黄色の小花集りて美し、挿花として床に愛す、花後長楕圓形の葉を對生し赤き實を結ぶ。 山茶花のわざしや重き不二風嵐雪

【丹花】(丹) 暖國の産、温室に培養す、高さ三尺四圍莖對生し、葉の形くちなしに似て厚く夏梢に數花を開く形十字四瓣にして丹紅色なり、中秋まで花あり。 【三方笠】道中馬の乗物を云、炬燵櫓の如きものを馬の腹の兩側に結付其中に一人づつ乗るを三方笠神といひ、左右に子供を乗せ中央の脊に大人の乗るを三寶笠神といふ。 松に薄を二方笠神 其角

【三宮】(三) 角倉、十四屋倉、隈關倉。之を洛下三宮人といひ鳥丸西に住す。 【常沙參】(常) 山野に自生す二三尺の草本、葉は卵形花は紫色或は白色にて五分裂して紙手の如く中央の雄蕊長く突出す、八月頃開花す。 【餅或は赤飯又は團子の類すべて神前に供ふる五穀にて製りし食品、神供といふに同じ。 【船來の觀賞草本にて葉は掌狀鈍角にて四月莖を抽て扇形の花を開く一重と八重とあり赤色紫色多く其他白の紋り等あり。 圃土境をのせて葉いとシネナリヤ みさ子

【山路笛】草刈童の笛のこと、鳥帽子折草子に用明帝が豊後の長者の娘を戀て牧童に扮し山路と名を更て住こむことありと云。

【櫻井】京六條堀川に在り、珠光庵を構へし處、東山義政屢此亭に臨み茶を喫す、清水なるを以て後織田有樂齋之を改築し建仁寺の古澗此記を作り石に鑿す。 圃京に汲する瀧が井の水に鑿す。 (初懐紙)

【猿腰掛】枯木の皮にエブリコの如く生ずる硬質なる菌にて大き二三寸より一二尺のものあり殆ど腰掛に適する故名あり。 【猿丸里】深草里の一名。 【猿楊枝】天和貞享頃洛東田口に猿屋の楊枝といふ河内玉越の里の楊を削りし楊枝店名物なり。 圃門の柳猿屋木つたふ誂かな (坂東太郎)

【芝栗賣】(秋) 鞍馬、矢背、大原の里人、九月の上旬三日間山林に入りて茅栗を採取し外皮を去り湯出て之を袋に盛り新嘉市中に賣歩く。 【芝柳】(芝) 山地に自生す、高五六尺葉は楕圓形毛茸あり四月頃穂狀花を開く細長し色は淡黄綠色にて夏實より穂を吐く。 【新古今集】土御門帝の元久二年藤原定家、同家陸勤を奉して撰みし和歌集。古今以來變遷せし和歌の此に其極盛時代となり技巧勝れて眞摯を缺き世に花ありて實に遺しといへり、されど四行長明等の歌多く此集に出づ。 【湯茶磨】しめり茶磨と笠の雪は重いと傳説。 圃時雨にもめぐらぬしめり茶磨かな (早梅集) 圃阿彌 太明時代僧師の名、天下一といふ。 圃大和古野大峯にあり、昔朱雀院の御子道賢此窟に籠りて修行し玉ひ天慶四年八月一日一旦絶息して蘇生し日藏上人と改めらる「寂冥の首の岩屋の静けきに涙の雨のふらぬ日ぞなき」新古今に出し同上人の歌なり。 圃浄味 蓋師の名、大佛の鐘を鑄て

【鏡花】(鏡) 野生あり、庭園にも栽り、落葉灌木にて叢生し高五六尺、葉は卵圓四月開花す、長き柄を有し八重白色の花を下垂す、花の形葩前に似たる故はせばなの名あり。 圃笑鬘花

【豊干禪師】(豊) 山と捨得と虎の四つが眠る圖を四睡と云。狩野派に多くあり。 圃山家く四睡の床を映あらし (虛栗)

【源順】(源) 源順は後撰集撰者の一人にて大中臣能宣等と世に梨蓋五歌仙の稱あり、嵯峨天皇の御子梅梅院大納言四世の孫能登守從四位下なり、博學宏識にて和名鈔三十卷の著あり、永觀元年七十二歳にて卒す。 圃秋の和名に入りし順 (春の目)

【七段花】(七) 八重の紅がくなり、類草を見よ。 圃六七月七日より十八日までなり。此河床にて三絃

ひくを禁ず藤崎小屋(經業)見世物小屋何れも藤を焚く心太、西瓜、ポピン店等列をなす。(加茂河納涼參照)

【常沙參】(常) 山野に自生す二三尺の草本、葉は卵形花は紫色或は白色にて五分裂して紙手の如く中央の雄蕊長く突出す、八月頃開花す。 【餅或は赤飯又は團子の類すべて神前に供ふる五穀にて製りし食品、神供といふに同じ。 【船來の觀賞草本にて葉は掌狀鈍角にて四月莖を抽て扇形の花を開く一重と八重とあり赤色紫色多く其他白の紋り等あり。 圃土境をのせて葉いとシネナリヤ みさ子

【洛外宇治郡に四宮村あり、光孝天皇の御弟人康親王通世のところに於て禪師宮と稱し蟬丸といふ、此所に於て歌を誦して曰「世の中はとてもかくてもありぬべし宮も藁屋もはてしなれば」後世此土地遊女町となる。

【芝栗賣】(秋) 鞍馬、矢背、大原の里人、九月の上旬三日間山林に入りて茅栗を採取し外皮を去り湯出て之を袋に盛り新嘉市中に賣歩く。 【芝柳】(芝) 山地に自生す、高五六尺葉は楕圓形毛茸あり四月頃穂狀花を開く細長し色は淡黄綠色にて夏實より穂を吐く。 【新古今集】土御門帝の元久二年藤原定家、同家陸勤を奉して撰みし和歌集。古今以來變遷せし和歌の此に其極盛時代となり技巧勝れて眞摯を缺き世に花ありて實に遺しといへり、されど四行長明等の歌多く此集に出づ。 【湯茶磨】しめり茶磨と笠の雪は重いと傳説。 圃時雨にもめぐらぬしめり茶磨かな (早梅集) 圃阿彌 太明時代僧師の名、天下一といふ。 圃大和古野大峯にあり、昔朱雀院の御子道賢此窟に籠りて修行し玉ひ天慶四年八月一日一旦絶息して蘇生し日藏上人と改めらる「寂冥の首の岩屋の静けきに涙の雨のふらぬ日ぞなき」新古今に出し同上人の歌なり。 圃浄味 蓋師の名、大佛の鐘を鑄て

有名なり、代々淨味と云常張の釜といつて環付異なり。

【瓜哇薯花】(夏) 莖の高二尺許葉は羽状大小の複葉ありて五月頃鐘状青紫色或白色の花を莖の上に横生す。球莖を食料とす。 園ジャガ芋の花に屯田の時を蒸ふ 鬼城

【藜香草】(秋) 山中の樹陰に生ず、高さ一二尺葉は卵圓にして粗き鋸齒ありて細毛を生ず、秋葉腋に短梗を出し筒状の花を開く白色にして紅葉あり内は黄色にて葉に香氣あり。 園秋の葉のその匂ひより藜香草(さいつこら)

【藜香子】(春) 耶蘇教世軍の行事の一つにて墓の路傍に小さき銅を三本足の脚立の上に据え藜香家の喜捨を仰ぎ其金にて餅を搗き貧民に施す。 園年寒く人足早し社

【沙石集】無住法師の著にて佛法弘世のため因縁、得度の話を集めし書。 園昔無住が書く砂石集(油かす)

【石鏡玉】(春) 春場末の市中を賣あるく小兒の玩弄なり。 掠の實と香茶を煮出して製す霞にて此汁を附て吹けば五彩の玉を出す。 園石鏡玉鼻をうつして腹れけり 季外

【車輪梅】(夏) 暖地の海邊に自生し、又庭園に培養す、三四尺の灌木にてもつこくに似たり故にはまもなくとも稱す、夏一莖に三四の花を車輪状に開く白色五瓣にして形梅花に似たり。

【酒中花】(春) 梅の一種、枝幹粗く香に似たり、花の形は桃に似淡紅色花中の絶品なりとて一に三四の名あり。 園酒中花や見ぬ唐土の吉野川 青雲

【春屋】高僧。相國寺の開基妙庭といふ、夢窓圓師の門、嘉慶二年寂す。今一人大徳寺の法主春屋あり、宗圓といふ笑嶺の門、慶長十六年寂す、古織、小堀遠州等の師。 園春屋の讀すぐれ

【撞木町】伏見に在り慶長九年遊女町起る

【修羅扇】日月を畫きたる軍扇のこと。

【白雲草】(夏) 山草、葉柄根莖より出て心臟形の葉あり、花薄無數に分裂して髭の如し五瓣白色美なり。 園白紙子 普通の紙子は塗を布けども紀州根來にて作るものは女子の手

す

【白靴】(夏) 白靴をたくく扇ヤンダーダ水 零餘子

【白靴】(夏) 白靴をたくく扇ヤンダーダ水 零餘子

【雀餅】(春) 餅、チヤなどの葉に蜘蛛の子或は虫の卵などひり付置が恰も青葉に盛りし餅の如く見ゆるを雀其子の餌料に啄む故雀餅の名あり、福島の雀餅は前に出せり。 園前や菫に雀餅もる (炭俵)

【雀餅】(春) 餅、チヤなどの葉に蜘蛛の子或は虫の卵などひり付置が恰も青葉に盛りし餅の如く見ゆるを雀其子の餌料に啄む故雀餅の名あり、福島の雀餅は前に出せり。 園前や菫に雀餅もる (炭俵)

【水泳】(夏) 夏六月頃より行はる。海邊は海水浴を行ふ場にて、都會は大河に公許の水泳場を設けて教師之を監督す。時に競技を行ふことあり。 園水泳競走 園森を出る月に囀して泳ぎかな 乙字

【水泳】(夏) 夏六月頃より行はる。海邊は海水浴を行ふ場にて、都會は大河に公許の水泳場を設けて教師之を監督す。時に競技を行ふことあり。 園水泳競走 園森を出る月に囀して泳ぎかな 乙字

【原野に多し、ギンギンに似て葉狭く紫色を帯び之を管むれば酸味あり、春穂状淡紅色の花を開く

【冬期積雪の山路をスキ一具を附けて滑走する戯。北越最も熾なり。 園雪艇ぬいて一椀の水呷りけり 枯木

【落壬生村の東に在り、勸學院の森なり、俚語に勸學院の雀は衆求を囀るといふ。 園落壬生村の東に在り、勸學院の雀は衆求を囀るといふ。

【水密桃】(夏) 上海と天津との二種あり七八月頃市場に出る。 園竹

像に醉を吹かれぬ水蜜桃 玉露

せ

せいけんじ【清見寺】駿州清見湯にある風景に富む寺。例今少し奥もあらばや清見寺（雑談集）

せしやう【四湖柳】（巻）枝垂柳の一種、葉間短く葉は披針形背は淡緑なり。

せしやう【聖燭節】（巻）二月二日聖母マリヤの純節を追福する式。

せいぼ【聖母祭】（巻）三月廿五日聖母マリヤの忌日にて祈禱をなす。例香煙に膝つく稚兒や聖母祭可及

せきやまのくら【關山櫻】（巻）櫻の一種、八重の大輪にて花の大き二寸許、花心より二枚の葉突出す、枝上方に向て盛あがり立つ、四月下旬開花す。

せきり【赤痢】（巻）流行病。例檢疫の船ならびけり港口 詩郎

せきり【勢田橋】尻を端折ること。急がば廻れ勢田の長橋といふ俚諺より尻かけを洒落れし語。例勢田折

せちばんぼう【世智辨坊】吉高男のこと。例心みなせちばん坊や文珠院（宗長手記）

せつらん【折檻蠟燭】蜀黍を心にして松脂にて作りしもの、時々頭を叩きて明をとる故名づく、奥州の製。

せいふ【銭持首】衣服の領の折たるをいふ。

せんざいしやう【千載集】後白河法皇の壽永元年藤原の俊成勅を受けて撰みし歌集、源平の武人の詠入選せり。

せんぶく【扇風器】（巻）扇一つ飛び流れけり扇風器 其子

せんのもしろ【千両四郎】茶匠利休のこと。例名さへ數寄ある千の興四郎（誰か家）

せりかは【芹川】嵯峨天龍寺の前を流る、滿川、在原行平の歌に「さがの山御幸たえにし芹川の千代のふる道あとはありけり」

せりつむ【芹摘】主殿司朝清めの時風に御簾吹上て中に後の芹を食し玉ふ姿を見て芹を摘て御簾の邊に置たり。其後其男戀病て失る時一切を女に自白せしかば芹摘て供養しぬ。女後に嵯峨の后に仕へて芹を召れし主を知りしをいふ故事。

そ

そふき【宗易】千利休の名。

そふかや【宗紙蚊帳】實物の蚊屋にあらざ、常の蚊帳を宗紙の蚊帳屋じやと自負して圓り風流めかす詞。例寝ても見ん宗紙の蚊屋にけふの月 野徑

そのまのみつ【宗紙水】美濃郡上郡山田庄に白雲水と云清水あり、宗紙東常縁と袂を別ちし舊跡。

そのだすめ【曹達水】（巻）夏期の飲料。例サイダー、シトロン、炭酸水、平野水

そのぬすみ見る白き頸やソグダ水 冬草

そのたん【宗旦】利休の孫、大徳寺の喝食となり居しを太閤愍みて祖父の遺領の内若干を興へて茶匠となさしむ、千家の祖、萬治元年八十二にて歿す。

そのてつ【宗哲】中村八兵衛と云、千宗守の聖にて寛文頃僧師の上干なり代々宗哲を以て嗣ぐ。

そのへん【宗偏】四方庵山田周學、宗旦に學び一流をなす、小笠原家の茶道。

そがらひたひ【十河頼】昔十河氏の取始めたる總堂の額きは云河こみ多しとな

た

たばな【蕪】山地に生ず、高さ三尺許夏鐘狀の淡紫色の花を下垂す、多くは半開にて萎む。

たばな【秋】山地に自生し、モチの木に似て高一丈葉は草質にて卵形、光澤あり、六月小白花を開き雌雄異なり、秋赤き小粒の實を結ぶ、此實を染料とす。例冬青

たばな【太虚庵】本阿彌光悦が靈ヶ峯の舊趾。

たばな【太神宮札配】（巻）十二月伊勢太神宮の札を戸毎に持あるき三寶に初穂を受けて札を賣る。例冬菴蕪の門を出にけり札配り 一箇

たばな【大文字草】（巻）山草濕地に生ず、莖葉ゆきのしたに類し帯紅色なり、晩夏に七八寸の莖を抽て花を横簇す白色にして舞細く見方によりては大の字の形に肖たり

たばな【大慧】圓悟の法燈、隆興元年歿す

たばな【道安】利休の嫡子、跋にて家を嗣

たばな【折檻蠟燭】蜀黍を心にして松脂にて作りしもの、時々頭を叩きて明をとる故名づく、奥州の製。

たばな【銭持首】衣服の領の折たるをいふ。

たばな【千載集】後白河法皇の壽永元年藤原の俊成勅を受けて撰みし歌集、源平の武人の詠入選せり。

たばな【扇風器】（巻）扇一つ飛び流れけり扇風器 其子

たばな【千両四郎】茶匠利休のこと。例名さへ數寄ある千の興四郎（誰か家）

たばな【芹川】嵯峨天龍寺の前を流る、滿川、在原行平の歌に「さがの山御幸たえにし芹川の千代のふる道あとはありけり」

たばな【芹摘】主殿司朝清めの時風に御簾吹上て中に後の芹を食し玉ふ姿を見て芹を摘て御簾の邊に置たり。其後其男戀病て失る時一切を女に自白せしかば芹摘て供養しぬ。女後に嵯峨の后に仕へて芹を召れし主を知りしをいふ故事。

たばな【唐茶】（秋）山地に自生し殆ど茶の木に類す、秋の末に花を開き花軸共に下垂す、白色にて茶の花より大なり、葉は苦くして飲料とならず。例苦茶 卓座

たばな【道仁】西村道仁、茶道の鑑師、武野紹鴎の額を受け天下一の名あり。

たばな【唐梅】（巻）梅の一種、新唐古唐あり、花大に八重にして花に紋狀あり、萼紫紅色、多く三實を結ぶ。例鶯梅。品字梅

たばな【蕪】山地に生ず、高さ三尺許夏鐘狀の淡紫色の花を下垂す、多くは半開にて萎む。

たばな【秋】山地に自生し、モチの木に似て高一丈葉は草質にて卵形、光澤あり、六月小白花を開き雌雄異なり、秋赤き小粒の實を結ぶ、此實を染料とす。例冬青

たばな【太虚庵】本阿彌光悦が靈ヶ峯の舊趾。

たばな【太神宮札配】（巻）十二月伊勢太神宮の札を戸毎に持あるき三寶に初穂を受けて札を賣る。例冬菴蕪の門を出にけり札配り 一箇

たばな【大文字草】（巻）山草濕地に生ず、莖葉ゆきのしたに類し帯紅色なり、晩夏に七八寸の莖を抽て花を横簇す白色にして舞細く見方によりては大の字の形に肖たり

たばな【大慧】圓悟の法燈、隆興元年歿す

たばな【道安】利休の嫡子、跋にて家を嗣

たむけり

たむけり

たむけり

る (類案) 報恩品に魂祭は往古六盆ありて二月十五日、五月十五日、七月十四日、八月十五日、九月十六日、十月晦日の六度とす。七月の外二月の盆會を修せしと見ゆ。こは魂祭るきさらきの月 (春の日)

たむけり (田村草) (秋) 山野に生ず、葉は對生して羽状をなす八月九月葉頂に枝を分ちて淡紅色の花を附く形あざみに似たり。

たむけり (短冊切) 京五山にて行ひし詩會の名、紙を短冊形に切り三枚重ねて銘々に渡す句成て後之を淨書し讀上る、今の俳句會の式に似たり。

たむけり (一) 天竺牡丹の名あり。高三四尺弘く栽培せらる花期長く赤、白、樽等多し。園退官のダリヤ作りや花白き ツナ男

ち

ちの葉形にて六月中央に花軸を抽き鐘状の花軸の左右に列り下垂す紫紅色なり葉を薬用とす。園 今日に生きて壺しらぬ妻にデギタリス 子風

ちの葉 (稚兒紅) (春) 梅の一種、單瓣の淡紅色なり。

ちの葉 (兒井) 洛陽ヶ峯の北にあり、大徳寺の微童愛所にすみて清水なきを患ふる時に兒童忽然と現はれて其處を示す依て掘りて清水を得たりと云。

ちの葉 (山) 山地に生ずる落葉喬木にて三丈許、楕圓形の葉互生し柿葉に類す、七月梢上に花梗を抽き小白花を開き簇生す、黒實を結ぶりかきのはだまし。ふこのき、松楊、齊墩樹。

ちの葉 (千鳥草) 嵐山下大井川にあり、横濱、瀧口入道に別れて此に投身すといふ。

ちの葉 (千鳥草) (夏) ひえんさう。

ちの葉 (地無小袖) すり箔したる小袖の明らかなるところなき模様を云、園いにてや春地なし小袖のかいどりせる信徳

ちの葉 (地草) こけら屋根を奪くとき地上にて幾枚かを取合せ屋上に釘にて締むるなり。

ちの葉 (定書賣) (夏) 暑氣拂に用ふる散葉を長き角形の箱に引出つきたる中に袋入にして納れ之を摺ひつゝ引出の環を鳴し賣歩く。傳にいふ猿樂師定齋といふもの明の沈惟敬が賣したる方劑を豊太閤より受けて子孫之を商ひ其名を直に定齋と云と本家は大阪にあり現今も猶廢れず。

ちの葉 (長者教) 各商の詞を聯ねた文章、延寶頃の流行。園 長者教終に破れて失にけり (江戸廣小路)

ちの葉 (長次郎) 樂燒茶碗の陶工初代なり、利休より田中氏を譲らる、文祿元年歿す、二代を吉左衛門と云。園 長次郎うぶのうねりや後の月 渭北

ちの葉 (徴兵検査) (夏) 所によりて遅速あれど毎年六月頃行はる。

ちの葉 (茶歌無伎) 茶香服と云、香道の如く又百服茶の變化にて茶銘を中て、優勝を争ふなり。カブキこそ思の種となりぬらめ「あらそひ負てうたて茶の味」(鴉雀併語)

ちの葉 (茶船) 大船より荷物を陸揚するに運送する小船、十石積と云。

ちの葉 (船) 舶來のワゴン香にて高尺餘葉は廣くして白色を帯ぶ四五月葉を

ちの葉

ちの葉

ちの葉

抽て一花を附く六瓣の美花赤色紅色黄色等あり。園 應海ふ書架に日のさすチュウリップ 芳州

ちの葉 (除蟲菊) (夏) オーストリーの原産にて今は本邦に多く植う宿根にして五月白花又赤花を開く菊の如し。此花粉にて蛋取粉を製す。園 家の蛋死ねと植けり除蟲菊 枯山樓

ちの葉 (通圓茶店) 宇治橋の側にあり足代季世に通圓法師といふ者茶を點て、行人に施したりし其跡に設けたる茶屋通圓の像を飾りて客を持つ。園 頭巾とらする通圓が像 (積五元)

ちの葉 (筑波根朝顔) (夏) 舶來の庭園植物。一二尺にて五六月頃より降霜まで朝顔に似たる漏斗形の花を開く花色も種々あり稀に八重咲あり瓣の分裂したるあり洋名ベチユニヤと云。ニベチユニヤ 筑波根草

ちの葉 (附竹) 後の附木にて昔は竹に硫黄を塗りしと見ゆ。園 たばこ吞かと火打つけ竹 宗因

ちの葉 (對王丸) 山掛太夫の册子に出

る姉安壽姫と共に人買の爲に賣られて苦行する稚兒。園 出代に對王丸が葛籠哉 出山

ちの葉 (筒落) 米俵に差込て其處より米を抜き竹筒。

ちの葉 (葛籠笠) 竹笠の緒を笠の上へ貫通さぬ木地のものにて緒に紙を用ふ、之を強たるを強笠と云。

ちの葉 (林鏡) (春) 元和寛永の頃より山茶の花をくらべ合ひて勝負を争ふこと流行す。園 鏡べんと争ふ友の玉椿 (油加須)

ちの葉 (扇笠) 市女笠を見よ。

ちの葉 (燕石) 支那の故事。雨ふれば燕となり止めば石となる。頓阿の歌に「降れば呼ぶふらねばもの石となる雨や燕の命ならん」又燕石を玉と誤つて藏すと云似て非なる譬に用ひたり。

ちの葉 (遊入) 遊女を娼屋にて遊興せず抱主の家に入て興するなりと云。

ちの葉 (雙井) 泉州堺にあり、豊太閤が茶湯の用水なり、井守の番耳遠きゆ此名ありしと。

ちの葉 (梅雨穴) (夏) 京島丸南四の禁城の側にあり、諸所の井水濁る時此を掘れば浄水出づ、梅雨晴には此水濁る。

ちの葉 (買之梅) (春) 梅の一種、枝はあらずにて紫褐色を帯ぶ、花は白色單瓣にて大に緑色を帯ぶ、紀貫之が愛せしものといつて此名あり、清梅

ちの葉 (釣船草) (秋) 山地陰濕の場所に生ず、高さ一二尺葉は長卵形鋸齒あり、莖液汁多く、節々隆起し秋梢上に花茎を抽き數花を附く其花形ポイトの如く尾は鉤をなして曲り舟を吊下げたるに似たり、色は淡紫紅色なり。ほちかひさう。

ちの葉 (釣堀) (夏) 池に魚を放ち料金を取りて糸を垂れしむるもの。又四角の箱形に貯水槽を拵へ金魚などを入れ、て小兒を顧客とする店あり之は市中に多し。

ちの葉 (熟帯) (夏) 熟帯の産にて庭園に栽う、莖葉軟らかにして葉は卵形、晩夏に穗状の花を附く其花始めは白色の小粒にして漸々紅色となり遂に帯紅紫色となる。落葵

ちの葉 (定家畑) 定家卿が山段の歌に

PSUVB381P2

「大原や小鹽の山の横置立は柴屋の烟なりけり」と云に依る。 園送り火や定家の烟十文字 其角
 PSUVB381P2(帝國美術展覧會)(秋) 毎年秋十月二十日間東京上野に開催する繪畫彫刻塑像の會。文部省の主催に係る。 帝展
 PSUVB381P2 傀儡坊のこと。
 PSUVB381P2(手習君) 源氏物語中の人物、浮舟に同じ。
 PSUVB381P2(天人菊)(夏) 庭園に培養する二尺許の草本にて葉長し夏枝梢に花を開く舌状黄赤色なり。 園しなへよき天人菊の素顔かな 月兎
 PSUVB381P2(天人花)(夏) 常緑灌木にて冬期温室に培養す。長卵形の葉對生し、夏紅色の梅花に似たる花を葉腋に開く後結實す褐色なり。 桃金娘
 PSUVB381P2(天龍川) 信州諏訪湖より發し遠州にて海に入る急流、昔西行船にて此河を渡ると同船の武士難破を怖れて西行師弟に下船を促し遂に打擲に及ぶ、西行船を下り、弟子西住と相泣て袂を別ちし逸話あり。 園天龍てたゝかれたまへ雪の喜 越人

4634

と

たのしみ(藤椅子)(夏) 安樂椅子とも 園湯上りの藤椅子による胸かな 東鑑
 たのしみ(秋) 其葉紅葉して深紅となり愛すべし。日光、那須邊は満山を彩る。落葉後藤牙筆の穂の如し。
 たのしみ(春) どうだんつじは山地に自生する灌木にて高七八尺枝細く分れ花梗を抜て壺状の花を葉腋より下垂す。灰白色なり。 園どうだんの花にインコの籠古し 三竹
 たのしみ(藤枕) 藤にて編み兩端に板を張り黒漆にて塗りしもの、嫁入の時女の方より一雙持参する俗習 園殿枕
 たのしみ(初利天) 佛説六欲天の一。初利は風を以て欲とすと云、六欲天は四王天、夜摩天、兜率天、化樂天、他化天に初利を加へたるなり。 園行盡す五天のむかし法もなく (句讀別)
 たのしみ(常盤梅)(春) 野梅に似て幹小さく葉は圓く春芽を出し新條の頭に一花を開く、五瓣白色にて野梅に似たり、四時絶ず花あり。

8V4P2

たのしみ(毒芹)(夏) 池沼等に自生す、芹の如くして大なり故に大芹と云、夏小白花を複繖形に開く、非常の毒物として知らる。 園涼しさや毒芹生る山の沼 園之
 たのしみ(音清水) 吉野山西行庵室の臺跡にて「淺くともよしやまた汲人もあらじ我に事足る山の井の水」とくとくと落る岩間の音清水汲ほす程もなき住居かな」の歌に山り名高し。
 たのしみ(土佐駒) 土佐より出る馬、脊低し。
 たのしみ(登山會)(夏) 毎年夏期を利用して日本アルプスと唱うる信州、飛彈等の高山へ登攀すること。
 たのしみ(兜率天) 執手を以て欲とす 即足を知るなり。
 たのしみ(狼狽する男をいふ) 園夕立にとちめん坊をふる野かな (注植物)
 たのしみ(島羽懸塚) 遠藤武者盛遠誤て袈裟の首を折り上島羽に埋め蓋提を吊ふ之を懸塚と云、永井日向守直清高根の領主の時林道春に撰文せしめて碑を其上に建つと。 園碑になほしたる鳥羽の懸塚 (雜談集)
 たのしみ(番馬)(夏) 一名赤なす本邦に移植

21214

生育す。早きは三四月温床のものを採取す。多く西洋料理に用ふ。 園葉かくれのトマト腐れて落屑たり 宏堂
 たのしみ(領的) 領狂者といふこと。 園とんできな薩摩もこゝに天降り (延寶廿歌仙)
 たのしみ(巴草)(秋) 自生のものあり培養のものあり、二三尺の莖に披針形の葉對生して直立し莖頭に九月頃花を開く淡黄色にして花瓣花字の如き形をなす、一名くさびよりの名あり。
 たのしみ(杜律) 唐の杜甫の律詩を云。 園兼住やひとり杜律を味ひて (熱田三歌仙)
 たのしみ(取葺) 板葺屋根のこと。石など重しに載て風に煽らるゝを防ぐ。
 たのしみ(取坊) 遊女を贖して金にする間夫。 園どりん坊帯ひたまひと言捨て (京三吟)

な

なまの(菜候)(春) 昔、菜賣のことをいふ菜参り候の略。 園摘うるや都は野邊の若菜さう 保友

21215

なまの(蛇屋笠) 動化僧など着たる大なる竹笠 京の蛇屋何某愛心して鉦叩きあるきしより起ると。
 なまの(夏帯)(夏) 單帯 園空どけの帯、呼かくる後より 四番
 なまの(夏足袋)(夏) 單足袋 園二三點泥の走りやひとへ足袋 素石
 なまの(夏服)(夏) 夏着の洋服 園夏服やすつきりしやんと優男 五達
 なまの(浪華踊)(春) 大阪の妓の打揃うて舞踊するもの新町にて唄を浪華踊。難波新地にて行ふを蘆邊踊と云ひ南地にて行ふを此花踊といふ。
 なまの(支那の蝶) 支那の故事。南孝廉といふ者胸を切るに妙を得て宴席に之の手腕を見せし折柄雷雨莽りに奮ひ胸悉く蝶と化し去りしと云。
 なまの(奈良園扇賣)(夏) 古物と換ましよと呼歩き古傘、古幕、古鏡、古足袋などと取かへゆくなり。
 なまの(奈良傳授) 宗祇より古今集の傳授をなせし系統二ありて一方は道透院、稱名院と傳へ、一方は牡丹花宵柏、飯頭屋江人と傳へし此牡丹花に傳授せしを奈良傳授と云。
 なまの(副公) 源氏物語中の人物、玉葛の

君花争ひの時負方の女房。

に

に(入學試験)(春) 三月より四月にかけて中學校、女學校等の入學試験を行ふ。
 に(二筆院) 嵯峨小倉山麓にあり、法然上人曾て在住せし處、宅閑菜、上人が浴後の姿を寫したる足引影あり、又庭中軒端の松あり。
 に(仁大夫) 辻藏人、見世物などの取締にて素は上方浪人なりしが、江戸に來り説經祭文語りをなし遂に其取締となる、揚鏡にて幅を利かせたる者と云。
 に(日々草)(夏) 高一尺許卵圓形の葉ありて夏秋の間に花を莖頭に開く瓣は五裂し下部は筒状多くは淡紫色にて又白色もあり、朝に開き夕に萎むこと朝顔のごとし。 園長春花
 に(日射病)(夏) 暑氣中り。 園日射病松の林をうれしみて 翠淡
 に(二條后) 業平と關係ありしこと伊勢物語にあり、芥川に負行て鬼一口に喰ふ云々の文により戀の詞に通

21216

用す。團すいはらの二條の后こひそめて (守武千句)

ぬ

ぬまどう【沼藤】信長清須城に在りし頃、野間藤六といふ御伽話の名人。

ね

ねじり【猫柳】(魯) 湿地に自生す。葉は細長き楕圓にて毛あり、初春に葉に先ちて花を着く其花穂状にて枝に點々白毛灰色光澤ある實の如し、多く挿花に用ふ。|| 木楊

ねぢり【漆箱】開巻のこと。團難しきねぢり【睡草】(夏) 觀賞用の七八寸の植物にて對生の葉は槐の如く刺戟を受くれば直に閉閉す一にをじ草の名あり、花は蝶形淡紅色球状に附着す。|| 含羞草。おじ草

の

のせんはらん【金蓮花】(夏) 多く鉢植として培養す。直立せず蔓性を帯ぶ葉は蓮の形に似て極小花はのうぜんかつらに似て瓣に爪あり黄色或は紅褐色麗狀にて六月頃より開花す。|| 金蓮は少女の戀に似たるかな 三筆

のせいのを【軒端の萩】源氏物語中の人物、伊豫介の女、華木の巻に繼母と毒を圍み、空蟬の巻にもぬけの衣を源氏誤て一夜契りし女性、軒端の萩を結ばずば露のかごととと源氏の悔みし人。

のまつり【乃木祭】(秋) 九月十三日故陸軍大将乃木希典(明治四十五年先帝陛下御葬儀の日夫妻自刃す)の靈を祭るに伏見桃山乃木神社に於て行ふ。|| 乃木祭や長府の町の秋の風 月斗

のけい【野雞頭】(夏) 田野に自生す、ケイトウに似て一二尺、夏穂状の花を綴る、淡紅色の莖葉花を有し筆頭に育たり。|| ふてけいとう。青箱

のくさ【野稗】(夏) 水田及畔などに生ずる雜草、高一二尺にて穂を抜き小きし、形状稗に同じ。|| いぬびえ

のきり【登月炭】(冬) 下總登月河岸より採出す炭、疎鬆にて鍛冶、鑄物などに専用す。

の

のぼたん【野牡丹】(夏) 庭園に植う、葉は卵形にて四葉對生し、幹は毛茸あり、夏梢頭に淡紫色の花を開く、五瓣にして美なり。

は

はつわをうしなふ【矢梅花】蘇東坡詩を作りて和風梅三細柳、淡月映三梅花といへば東坡の妹見て其作を笑ふ、黄山谷傍らより拙映の二字を換て和風梅三細柳、淡月映三梅花と唱へれば稍や優れど未だ趣を得ずといふ、さらば汝は如何と尋ねしに即時に和風扶三細柳、淡月映三梅花と作りて兩人を感嘆せしめし故事。|| 梅をかくして笑ふ妹 (鮑解)

はつさか【梅形草】(夏) 深山の湿地に生ず、苞直立して三四尺に至り初夏莖梢に穂状に花を着く、六瓣の黄白色にして花柄に脈あり、根に毒を含む。|| 露露

はしら【編取日】(夏) 六月頃舉行す。パイナップル (夏) 鳳梨。

は

はいよせ【灰寄】今いふ骨搦にて火葬した骨を拾ふこと。

はいつのうら【望一紙絵】伊勢の望一盲人なれば俳諧の句を案ずる毎に傍人に書かせこよりとして手近き竹筒に入置しと云。

はひら【白雲木】(魯) ちしやのきに類し其葉三四寸厚く背に白毛あり、五瓣の小白花を穂状に附く、日光足尾等にあり。|| 玉鈴花

はひら【白菜】(魯) 漬菜の一種にて支那の原産、九月頃下種して冬收穫す、莖と同一く煮或は漬物とす、全體白色にて纖維なし、一種朝鮮白菜といふものより大なり、一に杓子菜又は七菜といへり。|| しらくき菜

はひら【博奕汁】汁の實何にても采の目に切りて入る、をいふ。

は

はは【箱庭】(夏) 夏期箱の中に山水を模造して家の前などに飾り置く。|| 箱庭に顔よせはなす姉妹かな さくら

はは【羽衣草】めどはぎ。

はは【箱海老】(魯) 正月十五日奥州金華山の麓より三尺の海老を箱詰として京都御所へ献上する古式。|| 箱みちのくのけふ開越えむ箱の海老 (旅後)

はは【婆娑羅】無法にて取捨りなき義に用ふ、ばさら風、ばさら髪、ばさら女。轉じて伊達のをいへり。

はは【婆娑羅扇】五本骨の扇。|| ばさら扇の裏は葛の葉 (橋南集)

は

はは【鉢木】(魯) 黒地に毎松櫻の織出したる享保頃の流行と云。

はは【初午卸】(魯) 大根を卸して大豆の煮りたる皮を去り酒粕を搗りて流し三品を交へ煮て後醤油を加へ之に酢を注ぎ、赤飯と共に稻荷の祭供とす。

はは【八功德】佛説の極樂淨土にある

はは【花狭間】神殿などの扉に種々の花紋を透し彫して彩色を施したるもの。

はは【花丁子】(魯) 山野竹林中に自生の灌木、高三四尺葉は倒卵形にて梢に密生し冬葉腋に淡黄緑色筒状の花を開く其形丁子に似たり春其實紅く枸杞に似たり夏葉落て坊主となる、故に夏法師の名あり、又幹の皮強くして鬼しばりといひ製紙に用ふ。|| 鬼しばり。

はなせりり

夏はつし。

はなせりり【蕉賞鏡裏】(夏) 露店にてバナ、を鏡賣する夏夜最も昌なり。...

はなせりり【花菱草】(夏) 舶來の觀賞植物一尺許にて葉は細裂し白色を帯ぶ夏長...

はなせりり【花袋】浮世袋の花形なるを云。...

はなせりり【花結】草木の花の名を採題にして歌をよむこと。...

はなせりり【花寄】(春) 鳥原道中を見よ。...

はなせりり

はなせりり【濱菊】(秋) 海邊水濕の地に生ず、越年性にて秋葉上に二寸許の白色の菊花を開く。...

はなせりり【海邊砂地】自生す、地上を匂ひて高三四尺に達す。...

はなせりり【濱草】(夏) 海岸砂地に多し、カヤツリグサに似て分蘖状の茶褐色の花を開く。...

はなせりり【濱防】(夏) 暖地の海岸に生ず、高さ一丈許にして葉は圓く先尖り、裏面に軟毛生して白色なり。...

はなせりり【流行正月】(冬の日) 田舎にて何か凶事ありし年は正月を仕直すなり。...

はなせりり

はなせりり【刺桐】(秋) 山林に自生し高さ七八丈に至る。...

はなせりり【春駒舞】(春) 新春馬の首に鈴を付たる具を頭に戴き太鼓、鉦、三絃、胡弓にて囃立て「春の始の春駒なんど夢に見てさへよいとや申す、こなた様まの成衣の隅に蔵が立ます錢蔵七ツ金蔵七ツ以上合せて十四の御蔵」など唱へ錢を乞ふ。...

はなせりり【波斯菊】(夏) 庭園に植う。高二尺許分枝し葉は細く分裂して對生し六日頃舌状集合菊に似たる花を開く。...

はなせりり【春日傘】(夏) 昔の日本日傘を西洋婦人の好みて用ふるより給時分に

はなせりり

日本の若き女も之をさすこと。...

ひ

ひ【飛燕草】(夏) 一二尺葉は分裂して細く夏秋の間に紫、碧、白、淡紅の花を開く。...

ひ【源氏物語】源氏物語中の人物、玉葛君に通ひ夫人のヒステリーの爲め火取の灰を浴せらる。...

ひ【彦帯】今いふ附紐なり小兒の衣服に用ふ。...

ひ【山野】山野に自生し、あざみに類し晩夏三四尺の莖を出して球状藍色の花を開く。...

ひ

ひ

ひ

ひ

ひ

ひ

ひ

ひ

ひ

ひ

ひ

ひ

ひめかいたら

和の宇多野。駿河の富士。大和の春日山。山城の松崎。同石影山。攝津の關野。

ひめかいたら【姫海棠】(春)山野に自生す、五六尺其花海棠のごとし、後黄赤色の實を結ぶ。||ずみ。

ひめしやん【姫石楠】(夏)高山植物、尺餘の灌木なり、葉は槍身状にて厚く雨邊は後へ巻かへれり、夏梢上に三四の花梗を伸し花を開く荷苞状帯紅白色なり。

ひめしやん【姫沙参】(秋)高山植物、高さ一二尺葉は披針形互生し秋莖頭に四五の鐘状花を下垂す、其色は青紫色桔梗に似たり。

ひめしやん【春】山地自生のものあれど多く製食用に庭園に栽培す、常緑灌木にて二尺許細き葉對生し革質なり、三四月枝梢に黄色の細花を密生す。||黄楊。

ひめしやん【百花草】(秋)舶來の庭園植物、一年生にして高二三尺葉は二葉づゝ對生し葉腋より枝を分ち枝頭に菊の如き單瓣花を開く、七月ころより十月

ひめしやん

に至る紅色橙色紫色等あり。||咲かへて我庭富むや百花草 宇米

ひめしやん【百花草】九代北條氏の頃行はれし御茶の會にて抹茶を點じて各左右に別れ其品種を言ひあてたるなり、正成千破矢城に籠りしとき百花草の催しあり。

ひめしやん【風信子】(春)舶來の觀賞植物にて葉は兩に似て莖状中心に莖を抽き莖を圍みて花を着く單瓣重瓣あり三四月開花す紫紅白青紫などあり。||世に廻りて男やもめやヒヤシンス 草城

ひめしやん【比翼草】(夏)山草、一尺許莖直立し卵形葉對生して夏日葉腋に軸を抽き紫色の小花を穗状に附く一花毎に一托葉あり。

ひめしやん【狗骨南天】(春)庭園に培養す、小灌木にて其葉ヒラギに似たり、四月葉間より穂の如く長き花軸を垂れ之に黄色の小花果着す。||十大功勞。

ひめしやん【平九節】明暦頃流行せし小唄の名。||平九節や古風ながらも年忘(江戸辨慶)

ひめしやん【平野葛】(春)無州住吉平野莊より出る玉にて製す、味良しと云。||ひめしやん【毗蘭樹】(夏)山地に生ずる宿根

ひめしやん

草、高四五寸、葉は披針形、夏花莖を出し莖頭に一つづつ、美花を開く淡紅色五瓣にしてガンピに似る先端二又に裂く。||秋吹くるやびらんじの風 (正章千句)

ひめしやん【風船葛】(秋)蔓草にて數尺に至る葉は分裂し夏嫩形の小白花を開き秋結實するに其兩ふくれて風船の如き形となる。

ひめしやん【風鈴草】(夏)伊太利産の草、高一二尺庭園に栽ち夏日鐘状の花を開く白赤桃色紫もあり、原名をカンパニユラといひ又ビルフラワーとも呼んで居る。

ひめしやん【蔞】(夏)蔞の莖の皮の纖維を剥き集めてかもしとして遊ぶ兒戲。||かもしぞと揃へあげたる蔞の皮 (類柑子)

ひめしやん【復活祭】(春)三月廿一日より四月廿五日までの中で満月ある夜を挟みて八日間を祝祭日として行ふ耶蘇祭。此間を聖週間といひ、其中の金曜

ひめしやん

日に當る日は基督聖別の日として祈禱を行ふ。日曜日には耶蘇復活して上天する喜びの日なり。||上天日。||聖誕日。

ひめしやん【福神詣】(春)一月元日に七福神を安置する寺院へ參詣す。||向島七福詣。||三圓の夷大黒。弘福寺布袋。長命寺辨天。白鹿翁老人。花屋敷福祿壽。多聞寺毘沙門天。

ひめしやん【普濟流】杉木吉太夫といふ伊勢山田の御師より起る茶道の流名。

ひめしやん【武仙】石川丈山が唐宋の詩人廿六人を撰み詩仙と號けしに對し林羅山支那の武將を廿六人撰み之を圖して武仙と云。||此國の武仙を名ある繪にかかせ (初撰紙)

ひめしやん

ひめしやん【二瀬】下女など扮装して旅客の氣限をとること、勝手向と賣笑と二瀬を兼ねる謂。

ひめしやん【藤卯木】(夏)山野河邊に生ずる落葉灌木、高二三尺、方莖にして葉は卵形、ウツギに似たり、夏唇状筒形の花を穗状に密着す、其色紅紫色なり、此葉水中に落れば魚類は癡痺すと云。||醉魚草

ひめしやん【冬葎】(春)山地に生し灌木様の草本にて地に臥し常緑なり、葉間く光澤あり全體に刺毛を生ず、冬に至り五瓣白色の花を開き紅き實を結ぶ。

ひめしやん【冬シャツ】(春)冬シャツの伸びし手首や老教師 蒲人

ひめしやん

ひめしやん【風流懸】(秋)舊七月七日風流をかかるといひて氏神の祭をなし、村落組を立てさまゝの興ある扮装し

ひめしやん【冬葎】(春)山地に生し灌木様の草本にて地に臥し常緑なり、葉間く光澤あり全體に刺毛を生ず、冬に至り五瓣白色の花を開き紅き實を結ぶ。

ひめしやん【冬シャツ】(春)冬シャツの伸びし手首や老教師 蒲人

ひめしやん【風流懸】(秋)舊七月七日風流をかかるといひて氏神の祭をなし、村落組を立てさまゝの興ある扮装し

覺に入て汝が家別に春ある如し、爾今別春と名告るべしと仰せられしと云。圓別春や上野歸りの道すがら (延寶廿歌仙)

ほ

ほろろ (冬) 香稻の一番穀をいふ。ほろ (春) 山中に生ず、葉は芒の如く長く、春花を抽きて淡黄白色の花を開く介字に似たり。春蘭。ほろろ (夏) 山草、二三尺の高さにて六月頃に開花す、鐘状にて下垂し淡紫色なり。山小菫。ほろ (雨竹) 堺の人茶抄作の名人、利休の頃より代々業を嗣ぐ。ほろ (春) 一月小兒の玩具に硝子壺の薄きものを造り之を口にて呼吸して鳴す大阪に行はれたり。ほろ (冬) つべんの吹く息白き曇りかな 横面坊

ほ

ほろ (夏) 米國産の水草にて葉の形奇にして夏淡紫色の涼しき花を開く。アイコニア。ヒアシント。ほろ (佛木) (春) 山地に生ず、高さ五六丈に及ぶ、葉は丸く或は卵形白毛あり、四五月に葉に先ち花あり葉裏花にて深紅色五六寸満開すれば白色となる、越後、出羽、松前に多く此木材にて佛像を刻む、北海道にはデロと呼べり。デロ。どろのき。扶移。ほろ (杜鵑松) (夏) 京四條金蓮寺中庭松庵にあり、足代義教毎年技に子規を聞きしと云。ほろ (法界男) 浮氣な男の稱。ほろ (法性寺笠) 竹の皮笠にて洛東法性寺村より出る茶人の路次笠に用ふ。

ほ

ほろ (夏) 米國産の水草にて葉の形奇にして夏淡紫色の涼しき花を開く。アイコニア。ヒアシント。ほろ (佛木) (春) 山地に生ず、高さ五六丈に及ぶ、葉は丸く或は卵形白毛あり、四五月に葉に先ち花あり葉裏花にて深紅色五六寸満開すれば白色となる、越後、出羽、松前に多く此木材にて佛像を刻む、北海道にはデロと呼べり。デロ。どろのき。扶移。ほろ (杜鵑松) (夏) 京四條金蓮寺中庭松庵にあり、足代義教毎年技に子規を聞きしと云。ほろ (法界男) 浮氣な男の稱。ほろ (法性寺笠) 竹の皮笠にて洛東法性寺村より出る茶人の路次笠に用ふ。

ほ

ほろ (夏) 米國産の水草にて葉の形奇にして夏淡紫色の涼しき花を開く。アイコニア。ヒアシント。ほろ (佛木) (春) 山地に生ず、高さ五六丈に及ぶ、葉は丸く或は卵形白毛あり、四五月に葉に先ち花あり葉裏花にて深紅色五六寸満開すれば白色となる、越後、出羽、松前に多く此木材にて佛像を刻む、北海道にはデロと呼べり。デロ。どろのき。扶移。ほろ (杜鵑松) (夏) 京四條金蓮寺中庭松庵にあり、足代義教毎年技に子規を聞きしと云。ほろ (法界男) 浮氣な男の稱。ほろ (法性寺笠) 竹の皮笠にて洛東法性寺村より出る茶人の路次笠に用ふ。

ほ

ほろ (冬) つべんの吹く息白き曇りかな 横面坊。ほろ (春) 一月小兒の玩具に硝子壺の薄きものを造り之を口にて呼吸して鳴す大阪に行はれたり。ほろ (冬) つべんの吹く息白き曇りかな 横面坊。ほろ (夏) 米國産の水草にて葉の形奇にして夏淡紫色の涼しき花を開く。アイコニア。ヒアシント。ほろ (佛木) (春) 山地に生ず、高さ五六丈に及ぶ、葉は丸く或は卵形白毛あり、四五月に葉に先ち花あり葉裏花にて深紅色五六寸満開すれば白色となる、越後、出羽、松前に多く此木材にて佛像を刻む、北海道にはデロと呼べり。デロ。どろのき。扶移。ほろ (杜鵑松) (夏) 京四條金蓮寺中庭松庵にあり、足代義教毎年技に子規を聞きしと云。ほろ (法界男) 浮氣な男の稱。ほろ (法性寺笠) 竹の皮笠にて洛東法性寺村より出る茶人の路次笠に用ふ。

ほ

ほろ (夏) 米國産の水草にて葉の形奇にして夏淡紫色の涼しき花を開く。アイコニア。ヒアシント。ほろ (佛木) (春) 山地に生ず、高さ五六丈に及ぶ、葉は丸く或は卵形白毛あり、四五月に葉に先ち花あり葉裏花にて深紅色五六寸満開すれば白色となる、越後、出羽、松前に多く此木材にて佛像を刻む、北海道にはデロと呼べり。デロ。どろのき。扶移。ほろ (杜鵑松) (夏) 京四條金蓮寺中庭松庵にあり、足代義教毎年技に子規を聞きしと云。ほろ (法界男) 浮氣な男の稱。ほろ (法性寺笠) 竹の皮笠にて洛東法性寺村より出る茶人の路次笠に用ふ。

み

たる故名あり。四月芽を摘て湯がきて西洋料理に用ふ。一名和蘭キジカクシといふ。原名アスパラカス。石刀柏。庭 籬籠にアスパラカスを摘みて來ぬかな女。み (松虫草) (秋) 裾野に多き草、高二三尺にて葉は菘の如く、莖は直立し、枝を分ちて九月頃花を開く重瓣紫色周囲は不整の花弁にて中心に正しき小花を集む、松蟲の鳴く頃盛りなり。シリんぼううき。山蘿蔔。み (満作) (春) 庭園に培養す、高八九尺、葉は厚く皺ありて倒卵形なり、春葉に先ちて花を開く、其花弁は四つ糸の如く細くして縮み黄金色にて節々に附着す。金梅。み (冬) 學生或は兒童の防寒用としての外套。圓緋マントや身に集りし父母の愛。冬草。み (眉引) 昔婦人眉を抜き或は剃て別に眉を油煙墨にて引なり、黛といふ此引かたに各法あり花々と霞の如くしたる薄墨の中に中心を濃く弓張月の如く入る、眉の名稱に種々あり、鶯眉、三日月眉、わすれ眉、霞眉、大方眉、際立眉、唐眉、その際をばかすを、おき

み (巳午市) (春) 初午に伏見稻荷境内に立つ賣物。土狐。土人形。素焼四行。おやま。土の布袋。土牛。土鈴。てんぼう。つば。瓜蒴種賣。九年母賣。茹菥。小豆飯。水菜の辛子和。み (夏) 多く盆栽となす、べんけいさうに似て肉ある葉を輸出し、莖は淡紅色を帯ぶ、夏草頭に無数淡紅色の花

を密着す。み (御衣賣) (春) 櫻の一種、ウコン根に似て葉は緑と淡紅を交へたり。み (水右衛門) 動物に藝を仕込見世物とする者。み (南茶屋) 大阪島の内の色茶屋の稱。み (身の菱) 身の落度のこと。圓とり得ずば身の菱になる泥まぶれ (毛吹草)。み (耳袋) (冬) 冬寒を防ぐため左右の耳へ嵌むる袋毛皮にて製す。圓代馬に縫上けられぬ耳袋。巨額。み (都通) (春) 延寶天和の頃京の婦女衣裳の伊達を盡し笠指、胸札を掛け洛陽卅三所を巡禮して請ぶる遊興。圓秋の野遠き都巡禮 (花見辨慶)。み (都通) (春) 京都の妓打揃うて舞踊するもの祇園にて行ふを都通といひ先斗町にて催すを鴨川通と云。鴨河通。圓見るものにして都通や旅の興。與年。み (宮雀) 伊勢神宮參の泊りを若越く勧誘する宿引男の稱、或は亦伊勢の宮乞食とも。圓軒に菓をかけてぞ頼

ほ

ほ

ほ

みぶな

む宮雀 正武
みぶな(巻) 海岸に自生するものあり、園圃に栽て嫩葉を食品とす、高一尺許、葉は肉質にて細長く夏葉腋に花あり、裾帯菜に似たりとてヲカヒジキの名あり。

みぶのすぢ【三輪杉】昔伊勢の觀師怪獸を射て血の痕を追ひ山中の塚の前に至るに一人の女立てり、曰く君が射しは此塚の主の魔物なり、妾因はれて年久し、願くは之を殺して救へと、即ち柴を焚て焼き、女を俱して歸り同棲して子を擧ぐ、後男他に出てし後家に歸るに妻も子も在らず、唯一三輪の山本杉立る門」と書て張れり、仍て大和の三輪明神に祈るに御戸を開て妻子現はれ共に誓ひて神去れりといふ故事。 夏櫻の樹のしらみや三輪の神 古遠

む

むらさき【夢窓菖】(巻) 庭園植物、高二三尺に至る葉は長く五生し花は八重依の如く集る故に依夢といふ名あり、花色は多く黄なれど紅、白紅もあり。

むねたき

依むぎ

むねたき【乞食】乞食藝人を云。仁太夫配下にて、京にては興次郎といふもの頭領すと云。
むらさき【紫】(秋) 鱈のこと。 西むらさきの赤鬼うばいわし哉 (綾山井)

め

めいぢてんち【明目地蔵】勢州國の驛にあり、一休和尚の閑眼にて和尚禪を取て地蔵の蓮掛としたり、一釋迦は去り彌勒は未だ世に出てずかゝる浮世に目明し地藏
めいぢてんち【明目地蔵】(夏) 明治四十五年七月三十日崩御あらせらる。 西大徳を御製に仰ぐ日の祭 四香
めいぢてんち【明目地蔵】(夏) 一目を見よ。
めいぢてんち【明目地蔵】(夏) 洛外山崎にある茶室、利休の好に保る豊公此所にて喫茶せしと云。

めろん

を煎じ病眼を洗ふ故にめろん名あり、實を季とす。
めろん(巻) 瓜の一種、舶來にて今多く栽培す、野球大のものあり、普通三四寸直径の圓實にて、皮は網の如き纖維に蔽はる、味甘く甜瓜の如く、香氣室内に漲る、四季温室にて培養す。 西月の座のメロンに食指動くなり 梓石

も

もみぢ【木犀】(巻) 多く庭園に培養せらる、高さ二丈許、葉は倒卵形にて肉厚く光澤あり、七月頃黄白色五瓣の長梗を有する花を開き後赤き實を結ぶ。 厚皮香。
もみぢ【木犀】(巻) 北米の産。 一尺許葉は楕圓にて夏穂をなして花を密集す。 葯黄色にして香氣高し。 西にほひれせし
もみぢ【木犀】(巻) 櫻井を見よ。 西獅子髪結て出る基佐 (末若葉)
もみぢ【木犀】(巻) 晩春の候紅葉の赤く芽を出すを賞す。 西神苑の青きに芽出す紅葉かな 尺庵

もみぢ

もみぢ【木犀】(巻) 庭園植物、高二三尺に至る葉は長く五生し花は八重依の如く集る故に依夢といふ名あり、花色は多く黄なれど紅、白紅もあり。
もみぢ【木犀】(巻) 山地に自生し、高さ丈餘に及ぶ、葉は羽状にして覆葉なり、葉に缺刻ありて六月頃楕圓に圓錐形に花を横簇す、黄色にして赤みあり、實を結び其割れて黒仁あり、丸くして堅く珠數とすべし、之をばだいじゆと稱せり、此樹平家の南都を焚きし時餘燼その木穴に入り燻りし水を注げども消えず、七十餘日けぶりて清盛の死せし時漸くをさまりしこと盛衰記にあり、年經ても枝葉茂りしと、これは南都興福寺中一言主社前のもくげんじなり。

や

やぶぢ【横笛】のこと、昔詠りて呼びしと。
やぶぢ【夜會草】(巻) 夕顔の花を云。夕顔は夕べに咲くを以て古く黄昏草の名あり、其花白色風箏の花と相似たるを以て之と別つ爲に近來命名したるも猶ほゆふがほ及ゆふがほのみを參觀

やぶぢ

やぶぢ【夜會草】(巻) 高山植物小灌木にて他物に懸結することあり、葉は哈ど圓く稍や弱みありて、柄を有す夏帯紅の小白花を葉腋に密着し後實を結ぶ。 西萬。
やぶぢ【安方】(夏) 奥州外ヶ濱にてワトツ鳥其濱砂中に子を産み置く、漁師之を捕る爲養笠を着けて出づ、親鳥ワトツと叫べば砂中にヤスカタと誰は應ずるに由り、所在を知りて之を捉ふ、其子の捕へらるゝを知りて空中の親悲みて血の涙を流す雨の如しといふ傳説、陸奥の外ヶ濱なる呼子鳥なる聲はうとふやすかた
やぶぢ【八代草】(巻) 水邊に生し一二尺の草、長楕圓の尖りし葉は莖を抱き莖頭は聚生す夏秋の交に莖頭に多く花を密着す紫色にて柄梗に似たり。
やぶぢ【八撥】(夏) 羯鼓を打つ撥の拍子。 西八つ撥を打て睡れや十六夜 西武
やぶぢ【柳】(巻) 高山植物、多く庭園に培養す、高二三尺の草本にて葉は柳に類し夏梢頭に花を簇生す、紅色にて觀賞すべし其實は熟して絮を吐く。 西柳葉菜。

やぶぢ

やぶぢ【藪内】宗且の門藪内紹智より傳はる茶道の名、本願寺代々は藪内流なり。
やぶぢ【山海棠】(巻) 山中に自生する灌木、日光、筑波等により、葉の初生は圓く後岐をなす、五瓣白色の花を開く淡紅を帯び海棠に似たり。 西棠梨、やぶりんご。
やぶぢ【山柿】(巻) 山邊赤人、柿本人丸のこと。 西山柿の門にあそばんけふの月 (錦繪談)
やぶぢ【大和窓】(巻) 今いふ引窓のこと。 火の元の窓なれば日の本と解し轉じてヤマトと讀みしなり。
やぶぢ【山吹酒】(巻) 宇治川の名所、源融の大臣別墅を構へ山吹を多く植より名あり。
やぶぢ【野郎登】(巻) 縁のつかぬ巻を云。
やぶぢ【黒野郎登】(巻) 四帖半(むつ千鳥) 巻の黒な(八日花) (巻) 灌佛の日天道へ奉るとしてモチツ、ジの花に枇杷の葉をまじへ竿の先へつけ立ること。
やぶぢ【雪持草】(巻) 深山に生じ一尺

雪の白

餘、形天南星の如くにして其花雪白、苞の中にあり、晩春開花す。
雪柳(雪)こいのはなを見よ。
雪柳(雪)あづきを湯出で
雪柳(雪)あづきを湯出で
雪柳(雪)あづきを湯出で

よ

よつげん(唐軒)藤村源兵衛といふ京の富豪
十二屋といふ反故庵と號す、宗且の門
にて茶道一家をなす、元禄十二年八十
八にて歿す。
よとく(興作)丹波興作とて馬方の通稱と
して用ふ。
よとく(興作)丹波興作とて馬方の通稱と
して用ふ。
よとく(興作)丹波興作とて馬方の通稱と
して用ふ。

吉原夜櫻

よしはらまげら(吉原夜櫻)(雪)東都吉原
仲の町の兩側に櫻を植て燭臺を立て電
燈の光に不夜城を現出す。
吉原夜櫻の
喧嘩にちらす吹雪かな
雪華
よしはらまげら(吉原夜櫻)小唄の名詞時女郎衆な
ど、共に三味線の手ほどきとして昔へ
散へしもの。
よしはらまげら(吉原夜櫻)花申せ吉野三味線園
栖鼓 才豊
よしはらまげら(吉原夜櫻)辻興次郎寅久といふ利休
の差間。
よしはらまげら(吉原夜櫻)尾張鳴海の名所、後
宵月の里と云ふ鳴海湯夕波千鳥立かへ
り友よびつきの園に啼なり
よしはらまげら(吉原夜櫻)梅の一種、紅梅の早
梅なり、江州丁村より出づると云。

ら

らうたうら(秀徳茶)(雪)四月全國の労働
に従事する者組合團長指揮の下に廣場
に集り演説をなし小旗をかざして市中
を練あるく。其數夥しく隊伍廿餘町に
渉り示威の行列一定の場所に着して解
散す。東京大阪最も旺んなり。
らうたうら(秀徳茶)四月全國の労働
に従事する者組合團長指揮の下に廣場
に集り演説をなし小旗をかざして市中
を練あるく。

荷包

ねくし(荷包)夏の飲料。
ラムネ(雪)夏の飲料。
ラムネ(雪)夏の飲料。
ラムネ(雪)夏の飲料。

り

りんご(立鼓柄)刀の柄頭の好み鼓の閉
の形をなせるもの享保頃の流行。
りんご(立鼓柄)刀の柄頭の好み鼓の閉
の形をなせるもの享保頃の流行。
りんご(立鼓柄)刀の柄頭の好み鼓の閉
の形をなせるもの享保頃の流行。

露す、故にはなひりやさと云。
露す、故にはなひりやさと云。
露す、故にはなひりやさと云。

れ

れんごん(了頓)豊臣時代京師南三條に居し
侘茶人なり、秀吉其風流を稱すと、了
頓が辻といふ町名あり。
れんごん(了頓)豊臣時代京師南三條に居し
侘茶人なり、秀吉其風流を稱すと、了
頓が辻といふ町名あり。

ろ

ろり(露休)元禄頃軽口咄の上手。
ろり(露休)元禄頃軽口咄の上手。
ろり(露休)元禄頃軽口咄の上手。

涼味をとること。
露しめる團扇や明けのバルコニー
露しめる團扇や明けのバルコニー

わ

わらわ(三三四寸の矮性で六七寸頃碗形
の花を下垂す白紅藍等美觀にて多く植
れば花毛疵の如し。
わらわ(三三四寸の矮性で六七寸頃碗形
の花を下垂す白紅藍等美觀にて多く植
れば花毛疵の如し。

わ

わらわ(黄金梅)(雪)梅の一種、花單
瓣にして細く白色に微しく黄を帯ぶ。
わらわ(黄金梅)(雪)梅の一種、花單
瓣にして細く白色に微しく黄を帯ぶ。

る

るんご(銀夷菊)(雪)菊の一種。越年生
にて庭園に培養す、葉は綠葉に似て廣
く腋より枝を分ち三四分の頭状花を開
く夏の末まで花あり淡紅褐色稀に白色
紫色あり。
るんご(銀夷菊)(雪)菊の一種。越年生
にて庭園に培養す、葉は綠葉に似て廣
く腋より枝を分ち三四分の頭状花を開
く夏の末まで花あり淡紅褐色稀に白色
紫色あり。

る

るんご(圓悟)支那宋代の禪僧、茶家其筆
跡を珍重して家寶とす。
るんご(圓悟)支那宋代の禪僧、茶家其筆
跡を珍重して家寶とす。

を

をた(暖地の産、園庭に栽う樹
をた(暖地の産、園庭に栽う樹
をた(暖地の産、園庭に栽う樹)

花の葉色

の高さ數十丈葉は長卵形にて群生し光澤あり春より木蓮に似たる七八分の花を開く、白色にして紫色を帯び五月頃まで花あり。
【小倉】俊備師が踊らす人形の唱歌「小倉の野邊の一本芒、いつか穂に出て亂れあを、お玉こがれて秋こがれつゝ」といへるを拍子に合せ舞ふなり。
【蒲伏】昔吉原にて勘定未済の者を捉へて居風呂桶を倒にし其内へ閉込、大道へ出し置き火焚口よりむすびを與へ友人など代金持参すれば放ちやる廓法、寛文時代には名のみにて其實行な

花の葉色

しといへど實曆明和の前句附などには旺んに用ゐるなり。
【乙切草】(夏)山野に多く葉は連翹に似て短く周圍褐色を帯ぶ、夏梢に枝を分ち五瓣の黄色の花を開く小紅色の染物をなすべく又花を土用中に採り胡麻油に浸しおき金創打紙に用ゐて効あり、此名の由来に傳説ありて此植物は養鷹の秘薬として一子相傳のものなりしが或鷹師の弟竊に其秘を獲り之を他に洩して利得を計りしこと露はれ憤りに堪へず終に舍弟を切害して己れも死せしといふ頗る劇的の事により

花の葉色

弟切の名となると實は小連翹といふなり。四見しりたる乙切草の萌出て(俳諧集)
【小野頼風】洛男山の麓に住し京師に隠し妻を置きしが年経て家に歸らざりしかば其本妻捨てられしと思ひ投水して死す頼風歸りて妻の衣が河邊にあるを見て死屍を下流に撿り得て己が非を悟り又河水に投じて死す、土人俗に頼風の妻を女郎花と命じ劇作となる。

新撰俳諧辭典 増補(終)

季寄

季寄凡例

一、季寄は本文に採集せる季題を新年及四季に分ち(本文凡例参照)更に次の各部門に別ちて其月日の順次を追ひて排列す。

- 時候 曆數、時刻、寒暖。
- 天文 日月星辰、風雨霜雪、烟火氣類。
- 地理 山海湖川、堤橋田野、城市國郡、名所舊蹟。
- 宗教 神祭、神社、神官、佛事、忌日、佛閣、僧尼。
- 人事 公事、政令、官位職掌、故事、行事、遊戲藝能、園藝、支躰、居所、器財、衣服、食品
- 動物 獸、鳥、魚介、兩棲、爬虫、昆虫類。
- 植物 樹、草、花、葉、果實、蔬菜、穀類、菌類。

(2)

- 一、季寄に掲ぐる季題の時日は其題の下に()加へ之を示す、干支を用ゐるもの亦同じ。但し記載の月日は本文と同じく舊暦を用ゐ、新暦のものは新の字を加ふ。
- 一、季寄には季題の異名を掲げず。
- 一、俳句の題にあらずして連俳のみ季とするものは季寄に掲げず。
- 一、一の題より生ずる或題、例は「立春」に於ける「元日立春」、「茶摘」に於ける「茶摘唄」「茶摘手始」等は其主題より一字下げて之を掲ぐ。又其枝題より更に枝題を生ずるものは更に一段づゝを下げて記載す。
- 一、部門を類別し難き題、例は春の部に於て、「接木」「種蒔」「蠶」「焼野」「彼岸」等の如く二個又は三個の部門に屬すべく疑はるゝものは便宜上最も關係多き一方に偏入す。即ち上記の「接木」は人事植物何れにも通じ又、「彼岸」の如きは時候、宗教、人事何れにも通ずれども索引には人事にのみ掲げたり。故に搜索する部門になき題は其關係ある他の部門につき檢せらるべし。
- 一、本季寄の項にて其の題の下に(増)とあるは本文増補の部より検索せらるべし。

(1)

<p>新年 〔時候〕</p> <p>新年 明る年 年立返る 宵の年 舊年 去年 今年 年の花 淑氣 春永 明の春</p>	<p>今朝の春 今日の春 君が春 御代の春 日の春 千代の春 國の春 神の春 玉の春 花の春 松の春 家の春 己が春 四方の春 千々の春</p>	<p>江戸の春 老の春 正月 元日 三始 鶏日 二日 三日 三ケ日 松の内 七日 人日 松過</p>	<p>十四日年越 女正月(二、七) 一夜正月(一、一)</p>	<p>〔天文〕</p> <p>初空 初風 初日の出 初明 初日拜む 初東風 御降 初霞</p>
--	--	--	---	---

新年 | 時候 | 天文

(2)

〔地理〕

初富士

〔宗教〕

歳徳神(新年)

恵方

恵方棚

恵方参

門の神棚

星佛

星を唱ふ

若夷

若夷賣

毘沙門功德經

四方拜(元)

祇園創掛

柴神樂

蛙狩神事

鹿島の事觸

すかたん雜煮

萬代精進(元—七)

黄檗放参(元—三)

船靈祭

天狗の宴(二)

厨下

有馬入湯始

元始祭(新三)

往吉踏歌節會(舊三)

若荷祭

箱崎玉取祭

東叡山大黒の湯

堂押

稻荷注連張(五)

初水天宮

御福迎

山王神事能(六)

三輪の初市

三島御田打祭

山入

住吉白馬神事(七)

菜摘川神事

鬻換(鬻)

鍵引

箕面の富

大融寺の富

勝尾寺の富

鉢叩出初(八)

初薬師

宵夷(九)

居籠

初夷

十日夷(十)

寶惠駕籠

米花袋

蜈蚣小判

残福(十二)

佐吉評定始(十二)

熱田踏歌の神事

天王寺金堂手斧始

直會祭

住吉御弓(十三)

豊橋赤祭

(3)

常陸帶神事(十四)

上賀茂御棚飾

伊勢の世様

阿滿の粥占

熱田の的射

丸岡火祭

難波午頭天王綱曳

天王寺午王出

牧岡の御粥(十五)

三保祭

筒粥の神事

石巻の粥占

獅子頭の神事

世計酒

玉替の神事

山崎會合初(十六)

興福寺法起始

遊行の札切

新御靈の御弓

厄神詣(十九)

八幡参

八幡土産

蘇民將來の札

吉田清穢

厄塚撤す

女節分

初大師(廿二)

初天神(廿五)

宵天神(廿四)

残天神(廿五)

天神花

天神旋

鬻換(亀井戸)

初不動(廿八)

北野石不動参

初寅(上寅)

鞍馬詣

春下

福蟻

福蟻

初卯詣(上卯)

卯の札

妙義詣

蕨玉

初辨天(上巳)

柞の居籠(上甲)

初庚申(庚申)

春日御田植祭(上甲)

〔人事〕

四方拜(元)

参賀(新元)

朝賀(舊元)

奏端

小朝拜

院の拜禮

元日の節會

諸司の奏

七陽の御曆

腹赤奏

氷の様

國栖の奏

國栖笛

(6)

重詰	開豆	開午房	兩の物	数の子	押鮎	結昆布	依子	田作	小殿原	乾饅	齒固	防風粥	紫蘇粥	地黄粥
海虎の肉	据調	節振舞	朝節	夕節	節客	節小袖	節汁	椀飯	水飴	萬歳	大和萬歳	三河萬歳	鶴太夫	
才藏	萬歳扇	懸想文賣	夷廻	夷舞	大黒舞	春駒舞	猿曳	鳥追	ちよろ	面被	破魔弓	破魔矢	毬打	袖毬打
ぶりぶり	歌留多	歌がるた	いろは歌留多	畫双六	道中双六	淨土双六	手鞠	手鞠唄	羽子	羽子板	追羽子	凧	繪凧	字凧
奴風	蕪風	切風	落風	かゝり風	ボツペン	寶引	胴ふぐり	餠寶引	福引	歳旦開	歳旦帳	歳旦句	三物寶	三物俳詣

(7)

三物連歌	春興	新年會	飾夜具	初竈	初刷	笑初	初噺	着衣始	密事始	初夢	寶船	御寶賣	湯殿初	髮結初
縫初	織初	機場始	手斧初	讀初	書初	稽古初	初商	初買	初賣	初市	初荷	新通	店卸	船乗始
角倉船乗始	初連歌	能初	謡初	彈初	舞初	吹初	芝居讀初	翁渡	初芝居	初會我	道頓堀初芝居	蹴鞠始	消防出初	乗初
馬乗初	弓始	的始	鐵砲打始	學校始	初飛脚	鐵入	鋤始	鋤始	升つき(元)	加古の物鎮	元日戸を開ず	戸開始(三)	掃初	二日着
三日着	肩三日(三ヶ日)	裏白連歌(三)	棚探	帳綴(四)	淀屋橋祝儀商	初相場	山開	六日年越(六)	子の日の遊(上手)	玉箒	蠶屋拂	七草(七)	七草粥	七草嘸す

(8)

齋賣 七草爪 若菜 若菜摘 磯菜摘 雜菜摘 若菜賣 糝祝ふ 鏡開(八—十二) 具足鏡開 講道館鏡割(増) 蔵開 十日汁(十) 長崎紙鳶會(十一—廿) 綱曳(十三)	藪王祝ふ(十四) 土龍打 削掛 心竹 伊達の墨塗 御方打 水祝 潮の水(上辰) 小豆粥(十五) 粥杖 粥柱 紅調粥 飾取る 門松取る 注連貫	左義長 飾焚く 吉書揚 菱の葩をほこらす 十八粥(十八) 廿日正月(廿) 廿日團子 切山椒(増) 鏡臺祝ふ	嫁が君 初若菜 初若菜 初若菜 初雀	福壽草 若菜 初若菜 磯若菜 春の七草 芹 御形 紫織 佛の座 鈴菜 鈴代
---	--	---	--------------------------------	---

(9)

春 〔時候〕 春 一月 閏一月 二月 三月 閏三月 立春 元日立春 初春 春浅し	上元(一、一五) 雨水 寒明 啓蟄 春分 花朝の節(二、十五) 蛙の目借時 彌生 清明 穀雨 上巳 彼岸 春社	彼岸太郎 時正 中日 八十八夜 春深し 暮の春 三月盡 夏待つ 春の朝 春の曙 春の暁 春の日 永き日 暮遅し	春の暮 春の宵 春の夜 春の間 餘寒 冴返る 凍返る 長閑 麗 暖 温し 氣温む 春の色	春めく 佐保姫 佐保姫の衣
---	---	--	--	---------------------

(10)

〔天文〕

虹初て見ゆ	春の雲	花曇	春の雲	臘月	臘月	春の月	春の日	春の空	浅緑
貝寄の風	鬼北	淫繁風	おしやばえ	やうす	風温む	光風	春風	夕東風	朝東風
春の霞	雪の果	泡雪	春の雪	忘霜	春の霜	春の露	迎梅雨	杏花雨	梅若涙雨
霞の衣	霞の波	霞の籠	霞の沖	霞の海	春霞	夕霞	朝霞	横霞	八重霞
霞の袖	霞の網	霞の棚	鐘霞む	霞波む	霞の命	陽炎	蜃氣樓	狐隊	

初雷
初電
東風凍を解く
東風
朝東風
夕東風
春風
光風
風温む
やうす
おしやばえ
淫繁風
鬼北
貝寄の風

春の雨
社翁の雨
花の雨
梅若涙雨
杏花雨
迎梅雨
春の露
春の霜
忘霜
春の雪
泡雪
雪の果
春の霞

春の雲
霞
薄霞
一霞
八重霞
横霞
朝霞
夕霞
春霞
霞の海
霞の沖
霞の籠
霞の波
霞の衣

霞の袖
霞の網
霞の棚
鐘霞む
霞波む
霞の命
陽炎
蜃氣樓
狐隊

(11)

〔地理〕

氷解	氷の残る	春の氷	春泥	雪崩	雪汁	雪解水	雪解	雪解	雪解
氷の間に	氷の間に	氷の間に	氷の間に	氷の間に	氷の間に	氷の間に	氷の間に	氷の間に	氷の間に
氷解	氷の残る	春の氷	春泥	雪崩	雪汁	雪解水	雪解	雪解	雪解
氷の間に	氷の間に	氷の間に	氷の間に	氷の間に	氷の間に	氷の間に	氷の間に	氷の間に	氷の間に

氷流る
凍解
水温む
春の水
春の山
山笑ふ
彌生山

苗代田
苗代水
苗代垣
春郊
春の野
焼山
焼原
焼野
末黒野

〔宗教〕
元三大師忌
兩大師詣
天王寺生身供
義政忌
高臺寺湖月尼公忌
大元師の法
眞言院の御修法
宿直人
御齋會
神宮寺薬師講
伊刀志祭
比賣古會祭
比賣古會園子

龜戸道祖神祭
御齋會内論義
長谷の唯押
書寫山鬼追
興福寺心經會
西大寺茶盛
裸踊
日野裸踊
七瀬川裸踊
西大寺裸踊
繪踏
踏繪
御忌詣
御忌詣
御忌の鐘

仁壽殿觀音供(十八)	佛光寺餅撒	薪能	興福寺常樂會	太子講
西大寺詣	鬼押	祇園の御八講(八)	天王寺常樂會	法隆寺會式
野里一夜官女(廿)	藥師寺會式(二七)	春日若宮の能(九一十)	嵯峨の柱炬火	淺間祭
義仲忌	二月堂の行(二一四)	神軍(九)	西行忌	比良の八講(廿四)
契沖忌	行基參(二)	遺教經會(十一十五)	兼好忌	北野御忌日(廿五)
孝明天皇祭(廿)	箕面二の富(三)	湯島天神祇餅(十)	積塔會(十六)	龜井戸天神花踊
初鯉の神供	大融寺二の富	天道念佛(十一十二)	貞安忌	道明寺祭
(一月中一二月)	祈年祭(四)	上氷祭(十三)	神宮祈年祭(新十七)	吉福院八講
烏帽子魚	祈年祭班幣(新三)	鹿走(十五)	深草元政忌(十八)	利休忌(廿八)
驅の魚	光悅忌(廿)	彦山權現祭	圓宗寺最勝會	其角忌(廿九)
住吉壇使(二二)	清盛忌	淫樂會	貝寄(十九)	釋奠(丁)
牧岡祭	大石忌	淫樂像	聖靈會(廿二)	獻肝
吉野餅配	泉岳寺詣	雪の果	貝の華	御簾の錢(上手)
	御唐煎(六)	常樂會	太子會	關神祭(上手)
	二月堂の水取	餅花煎る		

大原野祭(上卯)	嚴島鎮座祭	季の御讀經(二月中)	修學寺祭	高雄法華會(十)
八幡初卯	二の午(中)	行茶	鷲の森競馬	安良比花
初午(上午)	梅津蒸講(中)	臨寺仁王會	東大寺華嚴會	神童寺祭(十一)
福參	三の午(下午)	石山祭(三、一三)	藥師寺最勝會	吉野の會式
虫の鈴	春李皇靈祭(春分)	天王寺經供養(二)	住吉大嘗會(八)	植髮堂御得道會
午祭	彼岸	椽の下の舞	泉涌寺開山忌(八一九)	雙林寺墨直
摩耶參	社日	坪井祭(三)	水尾祭(九)	禮拜講(十二十三)
摩耶昆布	彼岸會	竹生島々繫	生玉連歌	後白河院御忌(十三)
水間詣	茶の子	栗津祭	嵯峨大念佛(九一十五)	十二參
本妙寺詣	牡丹餅	栗島祭	野田御坊討死御書	花鎮祭(十四)
東福寺懺法	六阿彌陀詣	初瀬寺千部(三一十二)	中山法華經寺千部	祇園千文拂
烏祭(上末)	天王寺彼岸詣	黃藥開山忌(三)	山崎離宮八幡神樂	壬生念佛(十四一廿四)
春日祭(上甲)	天王寺踊念佛	一乘寺祭(五)		桶取
女使	時宗踊念佛	七里祭		善導忌(十四)
招魂祭				

(14)

奮然忌 比良祭(十五) 祇園一切經會 西大寺道成會 梅若祭 梅若涙雨 中山寺無縁經 (十四-廿二) 惣持寺無縁經 野中辨天參(十六) 行圓忌 廣峰祭(十八) 淺草祭 淺草葺市 人丸祭	御身拭(十九) 池上千部(十九-廿八) 義經祭(廿一) 御影供 東寺御影供 雲林院菩提講 仁和寺詣 高雄女詣 再度詣 永代寺山開 大原春志(廿三) 尊勝寺灌頂(廿四) 先帝會 般若寺文珠會 蓮如忌	鹿子の御影 宗因忌(十八) 二柳忌 松尾御出(中野) 三尾祭 石清水臨時祭(中野) 稻荷の御出 諏訪祭(中野) 神武天皇祭(新四、三) 生田祭(新四、十五) 仁王會(三月中) 東大寺授戒	峰入 瀧飛 谷行 聖燭節(地) 聖母祭(地) 復活祭(地) 開帳詣 千本念佛 水口祭 羽黒參(地)	「人事」 紀元節(新、二十一) 列見 位錄定(二月中) 陸軍紀念日(地) 御燈(三、三) 曲水の宴 雞合 勝鶏 負鶏 勸學會(十五) 春の宮 勸櫻會(新四、月)(地) 葭灰飛ぶ(立春)
---	--	--	--	---

(15)

春盤 春燕を戴く 畫鶏 葦素 中和の節(二、二) 生子を獻す 社日 社羹 治聖酒 寒食 介子椎 青飢飯 青精飯 棗の粥	楊花粥 杏の粥 榊柳の火 ふらここ 拜壇 鶏合 己の日の穢 須磨御穢 油花ト 執蘭(三、三) 青きを踏む 鏝人 學校始(地) 藪入(二、十六) 六の餅	貫湯 念人 妙見寺石賣 精進頭(十七) 辨當始(十八-廿五) 廿日灸 一月場所(中野) 二月禮者(二月) 二日灸(二、二) 出代 居成 前垂被 百日男歸る 事始(八)	正月事納 六質汁 笊を釣る 針供養 初午卸(地) 己午市(地) 初午芝居 二の替 耐市 雁風呂 梅見 瓢箪町夜見世(三、二) 曲水の宴(三) 巴字の水	巴字の盃 羽觴を飛す 雞祭 立雞 内裏雞 豆雞 紙雞 土雞 繪雞 古雞 古今雞 折雞 次郎左衛門雞 雞檀
--	---	--	--	---

山吹の衣	花山吹の衣	裏山吹の衣	青山吹の衣	餅躑躅の衣	岩躑躅の衣	白躑躅の衣	紅躑躅の衣	早蕨の衣	葦の衣	壺葦の衣	藤葦の衣	白藤の衣	鶯の衣	鶯袖
正月小袖	御忌小袖	花見小袖	種痘(増)	紙衣脱ぐ	捨頭巾	春の日傘(増)	小袖納	干鱈	目刺	鮎膾	山吹膾	酢蛤	焼蛤	
蜆汁	壺焼	田螺和	干蕪	干大根	干海苔	酸蕪賣	山椒皮	枸杞茶	枸杞飯	木の芽漬	青鯉	青芥子	芥子和	草の餅
蓬餅	母子餅	蕨餅(増)	櫻餅(増)	鶯餅	間炊									
〔動物〕	春の鹿	鹿の角落つ	孕み鹿	春の駒	獸交む	猫の戀	猫の妻	猫の兒	獺魚を祭る	田鼠化して鶉となる	春の鳥	鳥歸る		

春 人事 - 動物

鳥雲に入る	鳥風	鳥雲	小鳥引	引鶴	引鶴	引鴨	雁歸る	燕至る	鳥轉る	水鳥轉る	鳥交る	鳥の巢	巢立鳥
古巢	雀の巢	燕の巢	燕の巢	鶯の巢	鷹の巢	鷹の巢	鷹化して鳩となる	佐保姫鷹	朝鷹	繼尾鷹	鳥屋際	雉	鶯
鶯鳥	照鶯	雨鶯	駒鳥	雲雀	揚雲雀	落雲雀	雲雀の床	燕	春の雀	親雀	孕雀	雀の子	鳥の子
ひひ啼	松毛鳥	顔好鳥	果鳥	呼子鳥	百千鳥	魚氷に上る	櫻鱒	櫻鱒	浮鯛	櫻鯛	茶種鮫	蒸鮫	柳鮫
柳鮫	鯛	鯛	鯛	鯛	鯛	鯛	鯛	鯛	鯛	鯛	鯛	鯛	鯛
〔動物〕	白魚	初諸子	諸子	上鮎	小鮎	筋魚	鮎子	櫻魚	櫻魚	子持鮎	子持沙魚	子持鮎	子持鮎

春 動物

飯館 烏賊 櫻烏賊 寶貝 帆立貝 常節 榮螺 蛤 淺蜆 雌 細螺 馬刀 甲香 酢貝

龍天に登る 蛇穴を出す 地虫穴を出す 田螺 勢田蜆 業平蜆 寄居虫 楊枝貝 海松喰 鳥貝 櫻貝 簾貝

蛇蟻穴を出す 蛙 初蛙 蛙の子 蛙の目借時 龜鳴く 蜂の巢 蜜蜂 土蜂 熊蜂 似我蜂 虻 牛虻

花蛇 青蛇 春蟬 初蝶 揚羽 春の蠅 春の蚊 花見風

〔植物〕 白梅 紅梅 紫梅 八重梅 枝垂梅 野梅 櫻梅 鶯舌梅 鶯宿梅 六代梅 飛梅 青軸梅

春 動物 植物

豊後梅 信濃梅 八房梅 大梅 花神梅 鎗梅 唐梅 難波梅 常磐梅 座論梅 丁梅 六辨梅 稚兒紅 未開紅 薩摩紅

越中梅 酒中花梅 繪旨梅 行幸梅 貫之梅 櫻紅梅 黃金梅 簾の梅 麗枝梅 軒端の梅 かいしま梅 尋來梅 梅見 梅唇 梅屋敷

臥龍梅 黃梅 白梅 山梅 唐梅 濱梅 二階梅 伊勢梅 白玉梅 八千代の玉梅 つらつら梅 落梅 一重櫻

一葉櫻 彼岸櫻 絲櫻 姥櫻 兒櫻 山櫻 小櫻 八重櫻 熊谷櫻 御所櫻 普賢像櫻 揚貴妃櫻 照君櫻 虎尾櫻 關山櫻

不斷櫻 雲珠櫻 鹽竈櫻 伊勢櫻 江戸櫻 淺黃櫻 朱櫻 梓櫻 緋櫻 犬櫻 法輪寺櫻 桐が谷櫻 有明櫻 布引櫻 曙櫻

春 植物

花軍	花鬘	花笠	花車	花の隨身	護花鈴	花活	花入	花瓶	花桶	花筒	花血	花籠	花筐		
花瓶	花枝	花の顔	花の姿	花の肌	花の粧	花の唇	花の心	花心	花々	近衛花	詞の花	花の繪	花の都	花の聲	花嫁
桃の花	姫桃	毛桃	白桃	緋桃	源平桃	早桃	椿桃	一歳桃	枝垂桃	冬桃	杏の花	巴旦杏の花	李の花		
金絲梅	金縷梅	胡桃花	櫻桃	山桃	梨の花	林檎	海棠	海棠	山海棠	岩梨	山梨	長春	除穢		
連翹	辛夷	紫辛夷	木蓮	白躑躅	紅躑躅	赤躑躅	紫躑躅	蓮華	霧島	平戸	環瑠	環瑠			

鬱金櫻	手鞠櫻	大島櫻	句櫻	雲井櫻	小督櫻	西行櫻	墨染櫻	御衣黃櫻	泰山府君	四手櫻	九重櫻	奈良櫻	秋色櫻	右衛門櫻
左近櫻	金王櫻	歌仙櫻	十六櫻	朝櫻	夕櫻	夜櫻	家櫻	庭櫻	遠山櫻	初櫻	暹櫻	吉原夜櫻	櫻苗	花(正花)
初花	花を待つ	花盛	花の山	花の錦	花の雲	散る花	飛ぶ花	落花	花の雨	花の雪	花の吹雪	花の浪		
花の瀧	花を降す	花を惜む	花の輪	花の房	花の香	花の宿	花の窓	花の主	花の園	花の圃	花造	花守		
花黄	花の屏	櫻狩	花を見	櫻人	花の宴	花の盃	花見車	花見小袖	花見幕	花の衣	花の袖	花の袂		

段脚躑躅 淀川躑躅 浅黄躑躅 岡躑躅 餅躑躅 木瓜の花 槿子の花 草木瓜 花筏 石楠花 姫石南 花丁子 ひめつけ 馬酔木の花 狗骨南天	接骨木の花 沈丁花 小粒園花 小米花 観花 五味子の花 令法 金雀枝 佛木 五加木 五加木垣 枸杞 枸杞の芽 茶莢の花 苗代茶莢	苗代莓 蘇枋の花 山吹 八重山吹 榎機の花 をがたまの木 葡萄の花 藤 白藤 藤浪 藤曼 柳 川柳 桐柳	枝垂柳 筒柳 猫柳 西湖柳 岩柳 大猿子 山柳 大葉柳 絹柳 御柳 芝柳 蜀柳 圓葉柳 芽柳 挿柳	門柳 川添柳 若松 山茶莢花 松の花 榎の花 黒文珠花 白文珠 白雲木 公孫樹の花 竹の花 竹の秋 八汐 柿の葉
---	--	---	---	---

春植物

桜の芽 木の芽 紅葉芽 藤の芽 草の芽 草萌る 菊の芽 萩の芽 萩の芽 菰の芽 若菰 芒の芽 若芝 杜若の芽 芦の芽	草若葉 萩若葉 萩若葉 芥子若葉 菊若葉 律若葉 葛若葉 下萌 若草 春の草 草芳し 薬 浮草生ひ初る 水草生る 萩の焼原	燒野の芒 末黒の芒 刈生の芒 通草の花 他蕪蕪 紫羅欄花 海老根 熊谷草 敦盛草 華鬘草 九輪草 堅栗の花 碓草	東耳 雄東耳 雌東耳 金盞花 勿忘草 春菊 東菊 藤澤菊 麥蘘菊 矢車草 田芥 金鳳花 フリージャ シネラリヤ チュウリップ	風信子 薊 鬼薊 櫻草 丁子草 莖 三色莖 春蘭花 山蘭 紫草 若紫 鬘草 すかんぼ 苜宿 砂草
--	---	--	--	--

春植物

藪蕎麥の花	雉子隠	洲濱草	節分草	雪持草(増)	一華草	蒲公英	蓮華草	茅花	虎杖	水柏	片	芹の花	根芹
三葉芹	恵具	母子草	渡稜草	薺の花	防風	濱防風	杉菜	杉菜蟪螂となる	土筆	松菜	嫁菜	蕎麥	鶯菜
大根の花	野大根	堀入	三月大根	荳	川荳	唐荳	莖立	菜の花	菜の花蝶に化す	水入菜	芥菜	三月菜	苦菜
雀隠	路の蓑	花老荷(増)	老荷竹	獨活	アスパラカス (松葉獨活(増))	蕨	蕨手	早蕨	鐘蕨	狗脊	山葵	野老	蒜
野蒜	大蒜	葱の花	胡葱	蕪	豌豆の花	蠶豆の花	慈姑	黑慈姑	百合の根	煙草苗	茄子苗	菊苗	瓜苗

春植物

春筍	春の松露	海苔	青海苔	櫻海苔	甘海苔	淺草海苔	品川海苔	葛西海苔	十六島海苔	興津海苔	於胡海苔	加太海苔	黒海苔
素麵海苔	鶏冠海苔	日光海苔	若布	佐良布	白藻	水雲	鹿尾藻						

春植物

夏野 夏原 青野 梅雨の井	〔宗教〕 祭 夏祭 虎杖狩(四、二) 筑摩祭 靈岸寺千部(二一七) 山崎日の使(三三) 山王神代 九品佛千部(三十一二) 廣瀬龍田祭(四) 水屋の能(四一五) 山崎祭(八) 譽田の車樂 水無瀬祭	佛生會 灌沸 甘露 五香水 花御堂 八日花(母) 竿躰 卯の花挿す 卯の花賣 花供御餅 戴餅 興福寺佛生會 戒壇堂開帳 花摘 蘭念佛(七月まで)	大峰戸明け(八) 浅間登山 芝祭 芝船 地主祭(九) 家隆忌 信玄忌 練供養(三十三四) 伊勢神御衣祭(十四) 土塔會(十五) 今熊野大般若 五山乗拂 千團子(十六) 夏行(十六九旬間) 結夏	夏節 一夏 夏書 夏經 夏斷 夏花 安居 江湖部屋 日光祭(十七) 和歌祭 雜費踊 淨心寺千部 (十九廿八) 泣祭(廿) 如法經會(廿九)
------------------------	--	--	--	---

高野の花供(廿二) 新日吉祭(廿) 今宮御輿拂	江文祭 當摩祭 松の尾祭(上旬) 當宗祭 卒川祭 大津祭(上旬) 神取 吉田祭(申子) 稻荷祭(申卯) 龍頭太 江州八幡祭 向明神祭(申辰) 久世祭(申巳) 御影祭(申午) 多賀祭	菅の宮祭 山王祭 歩一 午の神事(申午) 神輿落し 横棧敷 御供船 申の神供 未の御供(申未) 宵宮落し 關白賀茂詣(申申) 菅笠を擔ふ 賀茂國祭 賀茂祭(申酉) 御生の日	阿禮男 阿禮引 葵の鬘 神取る 忌竹 中山祭 龜祭(酉) 嵯峨祭(申未) 三枝祭(四月)	宮川の鮎を供す(五) 賀茂の競馬 乘尻 藤森祭 生玉流鏑馬 新宮祭 六所明神祭 靖國神社祭禮(新六) 宇治祭(八) 市姫祭(十三) 室祭 蟬丸祭 關帝祭 神宮神御衣祭(新十四) 今宮祭(十五)
-------------------------------	--	--	--	--

永觀堂大般若(十六)	會我祭	五色網	鷄鉾	蠟燭山
今宮御輿拂(十八)	業平忌	湯殿山上	菊水鉾	保昌山
團扇嶺(十九)	祇園の神輿洗(廿)	勝曼參	月鉾	岩戸山
祇園の囃初(廿)	堺方遠明神祭	信長忌(廿)	船鉾	蛙飛神事
祇園の兒定	富士垢離(五月下)	龍王祭(廿)	天神山	江戸天王祭
兩社祭(廿三)	最勝講	高雄虫拂(三十九)	霞天神山	江戶天王祭
平野長者式	相逢杜火(廿)	六月會(廿)	太子山	笹園子
丈山忌	明治天皇祭(廿)	縣祭(新五)	占出山	鳥越祭(九)
頼政忌(廿六)	鉾の兒祇園詣(廿六)	宵山	白樂天山	九度參
伊勢の御田植(廿八)	黒主祭	祇園會七	琴破山	惠心僧都忌(十)
御田扇	富士詣	鉾の兒	郭巨山	月次祭(十二)
住吉御田植	富士道者	長刀鉾	山伏山	神今食
住吉踊	篠小屋	函谷鉾	木賊山	解齋御粥
大原志	麥藁蛇	放下鉾	孟宗山	山園(十三)

橋辨慶山	祇園臨時祭	名古屋祇園會	座摩御板(廿二)	豐津祭(廿)
黒主山	竹生島祭	神宮月次祭(十七)	愛宕の千日詣(廿四)	火鎮祭(廿)
淨妙山	津島祭	伊勢祭禮	天滿祭(廿五)	道饗祭
行者山	提灯鉾	外宮祭禮(十六)	鉾流の神事	御門祭
鯉山	蘆の御輿	内宮祭禮(十七)	船車樂	大祓
鈴鹿山	津島笛	嚴島祭(十七)	貫沙	名越祓
八幡山	車樂舞	船管絃	水鏡	御祓
觀音山	角豆祭	新御靈夏神樂	天滿御祓	御祓川
鷹山	博多祭	相國寺懺法	橋立祭	小蠅爲神
船鉾	江戸山王祭	北野觀音開帳(十七十八)	文珠會	川社
住吉の潮湯	氷川祭	三井寺札燒	阿蘇祭(廿六)	夏神樂
熱田祭	羽黒祭(十五)	御手洗詣(十九一階)	本國寺虫拂(廿七)	薦枕
明智風呂	季吟忌	鞍馬の竹切(廿)	大山參(廿八)	茅輪
吉田花火	志渡寺祭(十五十七)	稻荷祭(廿二)	妙心寺虫拂	形代
吉田天王祭(十五)	妙音講(十六)			麻の葉流す

賀茂水無月の祓 上賀茂水無月祓 下賀茂水無月祓 水無月の能 住吉御祓 火替 小集 仙島住吉の御祓 上難波の御祓 唐崎參 松尾の能(土用) 夏念佛	〔人事〕 更衣の節會(四、二) 孟夏の旬 扇の拜 擬階の奏(七) 駒牽(廿八) 割瓜刀を献す(五、二) 葛蒲を献す(三) 五日の節會(五) 早瓜を供す 左近の荒手結(三) 右近の荒手結(四) 左近の眞手結(五) 右近の眞手結(六)	引折の日 騎射 有無の日(廿五) 着駄の政 賑給 體を供す(六月) 氷を供す 氷水召す 氷の御物 氷室 氷室守 氷室の買(六、二) 氷室の使 忌日の御飯	御贈物(一人) 御體の御卜(十) 節折(卅) 施米(六月) 雷鳴の陣 雷鳴の壺 水合 萬鬼行 招涼珠 連雜(四、二) 明石の幟立 松前渡る(四月) 犬狩	犬番 犬侍 馬追 池鯉鮒の馬市 大風合戦(増) 蚊帳釣初 端午(五、五) 長命縷 艾虎 艾人 蒲人 天師を畫く 鐘馗を畫く
---	--	---	--	---

儀方を書く 赤靈符 桃印符 就渡 長崎就渡 五月の鏡 藥の日 藥降る 藥草摘 百草を關す 蘭湯 角黍 艾粽 錐粽 鉾穂粽	九子粽 筒粽 百束粽 守宮を搗く 鴛鴦の舌を去る 梟の羹 梟の炙 餛飩を食ふ 葛蒲を献す(三) 葛蒲の輿 葛蒲の御案 葛蒲の鬘 葛蒲の枕 葛蒲の藏人	藥玉 葛蒲引く 葛蒲刈る 葛蒲賣 葛蒲茸く 蓬茸く 棟佩ぶ 棟茸く 葛蒲合 葛蒲の占 葛蒲刀 葛蒲の鉢巻 飾胃 葛蒲胃 削掛胃	上り胃 葛蒲人形 幟 紙幟 鯉幟 座敷幟 吹流 葛蒲打 印地打 茅卷矛 茅卷馬 葛蒲浴衣 葛蒲帷子 葛蒲湯 六日の葛蒲	葛蒲酒 粽 菰粽 笹粽 笹粽 蒲粽 餛飩粽 飾粽 糸粽 柏餅 集汁 白旗餅 神麴製す 竹植日(十三) 結改(廿五) 海軍紀念日(廿七日)増
--	---	---	---	--

鴨河踊 <small>(新五月上旬)</small> 五月場所 <small>(同中旬)</small> 蒼朮焼 <small>(五月)</small> 地久節 <small>(地)</small> 氷餅祝 <small>(六、二)</small> 掛鯛下す 棹飛 安藝の宮市 <small>(六、七、七)</small> 千住綱曳 <small>(九)</small> 銚子の汐干 <small>(十五)</small> 嘉定	太夫饅頭 座頭の涼 <small>(十九)</small> 洲走初賣 <small>(六、中)</small> 登山會 <small>(地)</small> 夏芝居 土用芝居 土用丑の日饅頭 土用餅 雨乞 蛇籠編む 風爐の茶 徴兵検査 <small>(地)</small> 虫干 書を曝す 御船虫干	大掃除 <small>(地)</small> 井戸替 暑中休暇 <small>(地)</small> 夏休 夏期講習會 <small>(地)</small> 暑中見舞 避暑 海水浴 寢寐 三尺寐 風鈴 神時 浮人形 <small>(地)</small> 立板子 箱庭 <small>(地)</small>	落巻 <small>(地)</small> 打水 行水 蚊遣 蚊遣草 蚊遣香 涼 夕涼 川涼 涼臺 床涼 舟涼 橋涼 門涼 賀茂河の涼	大涼 後涼 船遊 扇流 <small>(地)</small> 兩國川開 うろろ船 <small>(地)</small> 螢狩 宇治螢狩 <small>(地)</small> 螢賣 蕉實競賣 <small>(地)</small> 螢籠 瓜刺 水掛合 游泳 水泳 <small>(地)</small>
--	---	--	---	--

水織砲 矢數 箭身 照射 火串 照射笛 川狩 四手 纏 持網 取網 扇網 釣堀 <small>(地)</small> 川普請 替堀	築 築打 鶴飼 鶴川 鶴舟 鶴匠 鶴細 鶴巻 荒鶴 鶴卷 鯉釣 鯖釣 海月取 抱鯉 鯉挟む	山椒魚捕る 自紅狩 麥刈 麥干す 麥打 新麥 麥秋 麥唄 麥藁 麥埃 田植 早乙女 田植歌	田植笠 早苗取 早苗饗 苗賣 田草取 土佐の稻刈 粟時 黍時 稗時 胡麻時 綿時 角豆蒔 芋植る 豆植る 豌豆引く	蠶豆引く 黄麻刈 麻刈 苧 夏苧 糸取 繭煮る 繭干す 繭買 蠶薄 藍刈 菅刈 眞菰刈 蘭刈
---	---	---	---	---

藁干す 藁刈舟 鹿角菜干す 和布刈 荒布刈 昆布刈 干瓢剥く 竹植る 椿接ぐ 藕搗く 瓜小屋 瓜番 皮拾	汗 汗滴 汗押 天瓜粉 熱沸瘡 夏ぶし 夏瘦 暑氣中 日射病 日負 日焼 赤痢 霍亂 虎列拉 瘧冷	五月忌 夏座敷 露臺 青簾 蓆簾 蓆屏風 蓆障子 蓆戸 蓆椅子 蚊帳 母衣蚊帳 紙帳	紙帳賣 籠枕 抱籠 扇風器 脚馬 竹床几 夏座布團 油團 簞 寢蓆 寢蓆賣 花蓆 花蓆 花水 荇蓆 釣床	ハンモック 折鶴 蠅取り器 牡丹の衣 卯の花の衣 若楓の衣 杜若の衣 葵の衣 薔薇の衣 菖蒲重 若菖蒲の衣 根菖蒲の衣 花橋の衣 蓬の衣 苗色の衣
--	---	---	---	---

若苗の衣 百合の衣 蟬の羽の衣 楊子の衣 撫子の衣 花撫子の衣 白撫子の衣 唐撫子の衣 夏萩の衣 更衣 初拾 綿抜 衣脱	下帯 汗衫 白重 夏衣 單衣 浴衣 帷子 辻が花 黄帷子 繪帷子 羅 蜻蛉の袖 夏羽織 麻羽織 絹羽織	夏帯 夏足袋 汗取 汗拭 甚平 掛香 晒布 晒布賣 奈良晒 生布 生絹 腹當 麻頭巾 編笠 夏服	夏帽 麥藁帽 白靴 日傘 繪日傘 扇 繪扇 塗扇 袖扇 透扇 饅鬼付扇 婆沙羅扇 扇折 扇笠 地紙賣	團扇 繪團扇 澁團扇 水團扇 深草團扇 岐阜團扇 奈良團扇 團扇賣 奈良團扇賣 飯笥 生洲船 新茶 古茶 夏切茶 皮鯨
--	---	--	--	---

閑古鳥	練雲雀	鶉の巢	燕の子	鶉	青鶯	五位鶯	翡翠	山鳩	葦切鳥	水鶏	鶉	筒鳥	通鴨	鴨の子
輕鴨の子	輕鴨	鳧の子	水鶏の子	水鳥の巢	鶉の浮巢	鶉の巢	鶉の巢	鶉の巢	鶉の巢	鶉の巢	鶉の巢	鶉の巢	鶉の巢	鶉の巢
飛魚	室鯨	島鯨	小鯨	鯨	鯨	鯨	鯨	鯨	鯨	鯨	鯨	鯨	鯨	鯨
鱒	源五郎鮎	黃鯛魚	金魚	らんちう	目高	蛇舌聲無し	蛇衣を脱ぐ	蛇の殻	夏蛙	枝蛙	墓蛙	疣蛙	疣蛙	疣蛙
蟬生る	おほちがふぐり	蟬初て鳴く	初蟬	熊蟬	蟬の脱	蟬の聲	蟬の諸聲	蟬時雨	夏露	露の蛾	火取虫	夏の蝶	夏の蝶	夏の蝶

毛蟲	自紅坊	尺取虫	百足虫	馬陸	玉虫	黄金虫	夕顔班	斑猫	螢	初螢	螢火	腐草螢となる	蜘蛛	袋蜘蛛
蠅取虫	穀象虫	紙魚	蟻の塔	山蟻	羽蟻	蝸牛	蛞蝓	蛞蝓	山蛞蝓	水蛞蝓	并蛞蝓	馬蛞蝓	蛞蝓の火	蛞蝓の火
蚯蚓出づ	蚯蚓	切蟻	蛆	蒼蠅	小蠅	金蠅	瓜蠅	蚊	蚊	蚊	蚊	蚊	蚊	蚊
蟻	蟻	蟻	蟻	蟻	蟻	蟻	蟻	蟻	蟻	蟻	蟻	蟻	蟻	蟻
〔植物〕	残る花	若葉の花	青葉の花	氷室の櫻	若葉	若葉風	若葉山	結葉	葉櫻	梅若葉	柿若葉	柏若葉	柏若葉	柏若葉

楓若葉 葉柳 錦木若葉 玉卷芭蕉 玉卷葛 茂 樹茂る 草茂る 夏草 薺茂る 夏木立 木下闇 草温 青蘆 蘆茂る

青亡 青鳶 常盤木落葉 松落葉 杉落葉 柏散る 病葉 落文 蚊母草 蚊卵木 椴の花 橡の花 椎の花

樗の花 檳榔花 厚朴花 櫟の花 檉の花 梓の花 御前橋 藪椿 鼠鞠 木槿花 藕の花 要の花 松楊花 黃楊花 青木の花

正木の花 棗の花 柑類の花 橙の花 密柑の花 金柑の花 柑子の花 橋の花 九年母の花 柚の花 青桐 桐の花 柿の花 栗の花 皂角子の花

山梔の花 こくなし 樟の花 百日紅 合歡の花 科の木 芭蕉の花 棕櫚の花 茉莉の花 鳳簾木 佛桑花 沙羅双樹の花 木患樹 山荳の花 柘榴の花

夏植物

車輪梅 榊の花 突羽根 楮の花 雁皮 瓜の木 こくてん木 水臘樹 積穀の花 姫石楠 山椒の花 橘の花 やしやびさく 夏雪の花 卵の花

箱根卵木 毒卵木 唐卵木 三葉卵木 山卵木 岩本卵木 藤卵木 卵の花月夜 卵の花雪 五月躑躅 牡丹 芍薬 紫式部 下毛の花 南天の花

未央柳 山楂子花 海桐花 刺路 泰皮の花 手毬の花 天人花 白丁花 木天蓼花 庭梅 茨の花 野茨 山茨 犬茨 薔薇

夾竹桃 大山蓮花 紫陽花 紅額 草額 七段花 連玉 凌霄花 石藤 葵 蜀葵 錢葵 冬葵 賀茂葵 山丹花

霸王樹の花 美人蕉 カンナ 器粟の花 雛器粟 美女櫻 百合 白百合 紅百合 姫百合 山百合 鬼百合 車百合 兒百合 唐百合

夏植物

袂百合 透百合 鹿の子百合 黒百合 博多百合 鐵砲百合 糸百合 百合の花蝶に化す 鳴子百合 アマリ、ス(地) 撫子 大和撫子 藤撫子 鶯撫子 美女撫子(地)	岩撫子 和蘭撫子(地) 石竹 アネモネ(地) 鶯草 夏水仙 黄水仙(地) 檜扇 布袋草(地) 向日葵 ろべりあ草(地) 朝菊 夏菊 除虫菊(地) 蝦夷菊(地)	鈴蘭(地) 筈木 野牡丹(地) 玫瑰 リヤ(地) 草下毛 天人菊(地) 藜 比翼草(地) 連理草(地) 草石蠶 花菱草(地) 紅の花 ひこたい(地) 虎の尾草	篠懸草(地) 麒麟草 羊蹄の花 羊蹄根 玉簪 大文字草(地) 銀錢化 錦鶏草 螢草 月見草 風鈴草(地) 夏枯草 梅鉢草(地) 菝葜の花 寶鐸の花	ハルシヤ菊(地) 蛇目草(地) 小町草(地) 木犀草(地) 都草 白微 萱草 延胡索(地) 風蘭 柳蘭(地) 金蓮花(地) のうぜんはれん(地) 紫蘭 蕙 錦魚草
--	---	---	---	---

水蝶花(地) 狸、袴 馬鞭草 樊噲草 踊草 緋笠草(地) 文字摺花 車軸草 茶蘭 櫻蘭(地) 雪の下 みせばや(地) 瓜蓮華 花烟草(地) 蕺菜	犛牛兒 道灌草 鬼女蘭(地) 舍羞草 睡草 菟 滑草 そばな(地) 青箱 野鶏頭(地) 歌蓬 庭柳 葛の花 天南星	武蔵鏡 浦島草(地) 麥門冬 胡荽 天門冬の花 梅形草(地) 當歸 山歸來 柴胡 鈴柴胡 香薷 半夏草 香附子 白屈菜 白頭翁	山午房の花 黄精 甘草の花 毒芹の花(地) 知母の花 石薺 一葉 釣葱 樓斗菜 九階草(地) 稻盛草 幣沙參(地) 二人靜 燈臺草 土針の花	川蓼 犬蓼 枸杞の花 山小茶(地) 虎杖の花 獨活の花 毗蘭樹(地) 酢漿 オキザリス(地) 犬酸漿 酸漿の花 馬兜鈴(地) 赤草 きつねのかみそり(地)
--	--	---	--	--

岩煙草 茵香の花 貝細工 野春菊 金雞菊 松葉牡丹 蚊帳釣草 車前草の花 夜會草 泡盛草 飛燕草 葛妻 白牡丹 定家葛 チギタリス	鐵線 ほると草 風車の花 銀河草 時計草 濱防 忍冬の花 金魚草 萬漆	蔓紫 濱芹 はまごう 濱菅 蔓穂	牛皮消 狸豆 蘿摩 日々草 根無葛 谷渡 松風草 畫顔 筑波根朝顔 夏朝顔 朝顔の苗 野豆の花 海芋	蒲の穂	蘭の花 乙切草 九十九草 葛蒲 花葛蒲 唐葛蒲 杜若 一八 著莪 絹糸草 石菖 馬蘭 花勝見 八代草 河骨	慈姑の花 澤湯 蓮 紅蓮 白蓮 蓮の花 蓮の實 蓮の密 蓮の卷葉 蓮の浮葉 睡蓮 菱の花 水路の花 水路の實 薄菜
---	---	------------------------------	--	-----	---	---

若菜 野種 蛇牀子 萍の花 藻の花 水草の花 櫻の實 梅の實 山桃 早桃 水蜜桃 李 すばいもも 杏	巴旦杏 青柚 夏蜜柑 林檎 岩梨 枇杷 枇杷 木莓 草莓 蔓莓 蛇莓 熊莓 夏菜 桑の實	アナス パイナップル 芭蕉の實 生胡桃 青山椒 鸚鵡實 青鬼灯 符 篠の子 若竹 竹の皮 竹の落葉 綿の花 麻	櫻麻 黄麻 麥の秋 麥の穂 烏麥 早苗 豆の花 豌豆 莢豌豆 蠶豆 英隱元 瓜哇芋花 隱元豆の花 青角豆	刀豆の花 瓜 瓜の花 初瓜 早瓜 六皮半 眞桑瓜 初眞桑 眞眞桑 銀眞桑 黃瓜 白瓜 青瓜 金瓜 銀瓜
---	---	--	---	---

夏 植物

夕顔 南瓜の花 トマト(地) きみしり茄子 初茄子 茄子の花 茄子 メロン(地)	大根の花 夏蕨 夏老荷 夏大根 落 根芋 苜蓿 川苳の花 苳の花 紫蘇 夏菜 烏瓜の花 瓢箪の花 糸瓜の花	海松 神馬藻 早松茸 木耳 梅雨茸 苔の花 蟬花	刈葱 辣蕪 唐辛の花 青唐辛

秋 時候 天文

白露 處暑 初秋 今朝の秋 今日の秋 立秋 九月 八月 七月 秋	夕顔 南瓜の花 トマト(地) きみしり茄子 初茄子 茄子の花 茄子 メロン(地)	大根の花 夏蕨 夏老荷 夏大根 落 根芋 苜蓿 川苳の花 苳の花 紫蘇 夏菜 烏瓜の花 瓢箪の花 糸瓜の花	刈葱 辣蕪 唐辛の花 青唐辛
白露 處暑 初秋 今朝の秋 今日の秋 立秋 九月 八月 七月 秋	夕顔 南瓜の花 トマト(地) きみしり茄子 初茄子 茄子の花 茄子 メロン(地)	大根の花 夏蕨 夏老荷 夏大根 落 根芋 苜蓿 川苳の花 苳の花 紫蘇 夏菜 烏瓜の花 瓢箪の花 糸瓜の花	刈葱 辣蕪 唐辛の花 青唐辛
白露 處暑 初秋 今朝の秋 今日の秋 立秋 九月 八月 七月 秋	夕顔 南瓜の花 トマト(地) きみしり茄子 初茄子 茄子の花 茄子 メロン(地)	大根の花 夏蕨 夏老荷 夏大根 落 根芋 苜蓿 川苳の花 苳の花 紫蘇 夏菜 烏瓜の花 瓢箪の花 糸瓜の花	刈葱 辣蕪 唐辛の花 青唐辛
白露 處暑 初秋 今朝の秋 今日の秋 立秋 九月 八月 七月 秋	夕顔 南瓜の花 トマト(地) きみしり茄子 初茄子 茄子の花 茄子 メロン(地)	大根の花 夏蕨 夏老荷 夏大根 落 根芋 苜蓿 川苳の花 苳の花 紫蘇 夏菜 烏瓜の花 瓢箪の花 糸瓜の花	刈葱 辣蕪 唐辛の花 青唐辛

<p>〔宗教〕</p> <p>土佐志那禰祭(七三)</p> <p>柏流(四)</p> <p>建仁寺開山忌(五)</p> <p>北野煤拂(六)</p> <p>高臺寺施餓鬼</p> <p>北野の御手水(七)</p> <p>住吉虫拂</p> <p>部靈祭</p> <p>布留社渡渡</p> <p>星宮祭</p> <p>敷法庭(七十三)</p> <p>烏送(七)</p> <p>薪寺虫干</p>	<p>日向院施餓鬼</p> <p>高野不斷經</p> <p>代の鐘</p> <p>鬼の洞念佛(七十五)</p> <p>文珠會(八)</p> <p>六道參(九)</p> <p>迎鐘</p> <p>槇賣</p> <p>槇買</p> <p>清水千日詣(九一)</p> <p>天王寺千日詣</p> <p>四萬六千日(子)</p> <p>盆市(人事)</p> <p>墓掃除</p> <p>墓の草刈</p>	<p>八幡安居の頭(十二)</p> <p>王子權現祭(十三)</p> <p>王子田樂</p> <p>龍燈</p> <p>魂祭(十三十六)</p> <p>魂迎(十三)</p> <p>迎火</p> <p>攝待(下旬一廿四日頃)</p> <p>長崎盆祭(十三十五)</p> <p>墓場の宴</p> <p>嚴島延年(十四)</p> <p>樺の火(十四十五)</p> <p>盂蘭盆(十五)</p> <p>盂蘭盆會</p> <p>盆</p>	<p>施餓鬼</p> <p>施餓鬼棚</p> <p>施餓鬼舟</p> <p>川施餓鬼</p> <p>魂棚</p> <p>枝角豆</p> <p>青蕎麥</p> <p>籾米</p> <p>青瓜</p> <p>白茄子</p> <p>青柿</p> <p>掛素麵</p> <p>芋幹の箸</p> <p>迎馬</p> <p>間狭垣</p>	<p>棚經</p> <p>生身魂</p> <p>蓮の葉飯</p> <p>差鯖</p> <p>墓參</p> <p>盆踊(人事)</p> <p>燈籠(人事)</p> <p>三井寺女詣(十五)</p> <p>立山精靈市</p> <p>祐天寺千部</p> <p>(十五廿五)</p> <p>魂送(十六)</p> <p>送火</p> <p>施火</p> <p>大文字</p>
---	---	--	---	--

<p>妙法の火</p> <p>船形の火</p> <p>鳥居の火</p> <p>閻魔參</p> <p>經木流</p> <p>水灯會</p> <p>傳法施餓鬼</p> <p>梶原施餓鬼(十六)</p> <p>鬼堂</p> <p>善福寺章相撲</p> <p>解夏</p> <p>解夏草</p> <p>夏書納</p> <p>寶寺開帳(十六十七)</p> <p>冷瓜祭(十七)</p>	<p>御靈の御出(十八)</p> <p>送行</p> <p>文覺忌</p> <p>宗祇忌</p> <p>芝原祭(廿)</p> <p>吉田淺間祭(廿二)</p> <p>吉田火祭(廿二)</p> <p>吉田芒祭(廿三)</p> <p>藥師寺大般若會</p> <p>(廿三)</p> <p>愛宕の火(廿四)</p> <p>地藏祭</p> <p>瀧の宮念佛踊</p> <p>瀧の宮祭(廿五)</p> <p>御狭山祭(廿七)</p>	<p>穗屋</p> <p>穗屋作る</p> <p>御狭山狩</p> <p>仁王會(七月)</p> <p>秋祭(八月)</p> <p>神泉苑祭(八、二)</p> <p>松尾神前の角力</p> <p>三村祭(一一)</p> <p>鬼貫忌(二)</p> <p>塚天神祭(三)</p> <p>北野祭(四)</p> <p>白鬘開帳(五)</p> <p>守武忌(八)</p> <p>太祇忌(九)</p>	<p>敦賀祭(十)</p> <p>西鶴忌</p> <p>敏馬祭(十三)</p> <p>八幡祭(十五)</p> <p>放生會</p> <p>放生鳥</p> <p>放生魚</p> <p>放生川</p> <p>譽田祭</p> <p>箱崎祭</p> <p>宇佐祭</p> <p>門司祭</p> <p>長門一の宮祭</p> <p>三津八幡祭</p> <p>門出八幡祭</p>	<p>御所八幡祭</p> <p>若宮八幡祭</p> <p>萬蒲皮祭</p> <p>志賀八幡祭</p> <p>安濃津祭</p> <p>鶴岡祭</p> <p>富岡八幡祭</p> <p>板鼻八幡祭</p> <p>野口念佛</p> <p>素堂忌</p> <p>菅大臣祭(十六)</p> <p>九品佛來迎會</p> <p>面被</p> <p>御靈祭(十八)</p> <p>桑名祭</p>
---	---	---	--	--

西大寺會式 (十八、廿四)	秋の釋奠(上丁)	鞍馬火祭	四の宮祭	住吉相撲會
定家忌(廿)	秋の彼岸(秋分)	醍醐祭	南禪寺祭	寶の市
菩薩祭(廿二)	秋季皇靈祭(後序)	醍醐宵祭	新田祭	升買ふ
菩薩踊	季の御讀經(八月)	貴船祭	去來忌	取鉢買ふ
太秦會式	死活杖祭	御香の宮祭	例幣(十二)	龜山祭
太宰府祭(廿四)	氷室祭(九、一)	生玉祭(九)	例幣使	天王寺一乘會(十四)
木瓜明神祭	繩棟	一の宮祭	寶永祭	太秦牛祭
龜井戸天神祭	奈良八幡祭(一、二)	鳥相撲	芝神明祭	摩陀羅神
東山安井祭(廿六)	日野祭(五)	牛乘	根勝生妻	岩倉祭(十五)
なもて踊(廿七)	飛神祭(七)	しのぎ祭	千木箱	栗田口祭
松永煙火祭(廿七、廿八)	旬當の内侍祭(八)	長崎諏訪祭	國阿忌	布留祭
西院祭(廿八)	桂の宮相撲	九日踊	多武峯祭(十二)	豐浦祭
永平寺開山忌	泉涌寺舍利會	金山祭	御難の餅	小倉祭
	鞍馬祭(九)	五條天神祭(十)	白川祭(十三)	神田明神祭
		下鳥羽祭	乃木祭(地)	築土祭

牛の御前祭	吳織祭(十八)	大原の秋志(廿三)	權馬	〔人事〕 七日の御節供(七七) 新綿の奏(十六) 相撲會(廿八) 童角力 部領使
東寺灌頂	高津祭	御手洗祭	鳴瀧祭(廿八)	
黒主祭(十六)	今宮夷祭	鹿谷祭(廿四)	住吉神送(廿)	
三島祭	子規忌(新十九)	十禰師祭	夢窓國師忌	
岡崎祭	久世祭(十九)	關の明神祭	胡麻千代祭(上辛)	
犬鷹の鉾	八幡花の頭(廿)	逆髮祭	山口祭(申巳)	
神嘗祭 (十七、新十、十七)	城南神祭	言水忌	山口祇園祭	
度會新嘗會	旅夷祭	木幡祭(廿五)	葺割(九月)	
伊勢御遷宮	娑利女祭	北野芋莖祭	鯖山頭陀坊	
野の宮の別(十七)	天王寺結縁灌頂	天満の流駒馬	逆の峰入	
桂川の御祓(十六)	仁徳祭(廿二)	どうび(廿五、廿)		
由豆の妻櫛(十七)	久世灰形祭	晴明祭(廿六)		
群行	座摩祭(廿二)	北山祭(廿七)		
穴織祭(十七)	淀祭	津村祭		
	天王寺念佛會			

上野の駒 望月の駒 霧原の駒 司召(八月)	御燈(九三) 不堪田の奏(七) 重陽の宴 菊瓶 勸會(十五)	天長節(新十一、三) 天長節(八、廿二) 秋の葉を戴く(立秋)
七夕(七七、七) 七夕祭 二星 牽牛 織女	七夕の七姫 星の契 年の渡 星迎 二星の屋形 七種の船 妻迎船 妻送船	七箇の池 鶴の橋
天の川 秋去衣 乞功羹 願の糸	庭の立琴 星の薫物 星の貨物 貸小袖 七寶枕 石枕 星合の演 梶の葉 梶の葉賣	乞功針 乞功瓜
笹流し(増) 芋の葉の露 紅葉の帳 火取香 九枝燈 化生	洗車雨 酒涙雨 七夕竹 短冊竹賣 硯洗ふ 机洗ふ 牛洗ふ 素餅 七日の御節供	
池の坊の立花 本願寺の籠花 飛鳥井の鞠 七夕踊	盆市(七、十、五) 燈籠賣 提灯賣 蓮の葉賣 芋設賣 盆太鼓賣 燈籠 切子燈籠 高燈籠 繪燈籠 花燈籠	

折掛燈籠 舟燈籠 影燈籠 廻燈籠 箱燈籠(増) 岐卓提灯 本願寺燈籠 禁裏御燈籠 新吉原燈籠 風流懸く(増) 盆踊 踊子 懸踊 小町踊 念佛踊	題目踊 燈籠踊 伊勢踊 木曾踊 ツンツク踊 摩尼踊 土佐踊 踊浴衣 梅花皮 盆踊唄 六齋念佛 後の敷入 盆仕着 盆帷子 中元	盆禮 中元贈物 衝入 盆芝居 八幡宮濱の市 寶劍市(一四) 廿六夜待(廿六) 八朔(八、二) 田の實の節 繪行器 藤の花 造雀 造雉 造鷺
造松虫 尾花の粥 八朔白小袖 田の面行灯 姫瓜の節句 後の二日灸(二) 秋の出代 百日男 生駒松明引(十二) 月見(十五) 片月見 月の主 月の宿 月の友 月の宴	難波堀江の月見 鹿兒島綱引 秋の彼岸(秋分) 重陽(九九) 重陽の宴 菊花の酒 菊合 着綿 茶菓の袋 高に登る 温酒 鬼の眉 九日小袖 後の雛	

(62)

茵香刈 茜堀る 萱刈る 萱刈る 萱の軒端 木賊刈 菅植る 茸狩 菌取 岩茸取 寄昆布 竹伐る 牡丹の根分 芍薬の根分	棍の衣 萩の衣 萩の衣 萩の衣 女郎花の衣 花芒の衣 藤袴の衣 桔梗の衣 朝顔の衣 月草の衣 菊の衣 茗菊の衣 黄菊の衣 白菊の衣 蘇枋菊の衣 紅菊の衣	移菊の衣 龍膽の衣 紫苑の衣 紅葉の衣 檀の衣 初紅葉の衣 黄紅葉の衣 青紅葉の衣 楓紅葉の衣 槿紅葉の衣 葱の衣 濃栗の衣 落葉色の衣 朽葉の衣 青朽葉の衣	黄朽葉の衣 柑子色の衣 秋の袷 鶉衣 秋の蚊帳 蚊帳に雁を畫く 捨扇 捨團扇 瓜提灯 鳴の羽盛 鱸胎 鱸胎 夜蛤 裂膽	鯉漬 鯛の黒漬 鱈 柿膾 菊膾 新米 新米 新走 古酒 袋洗 中波 諸味 利酒 猿酒 葡萄酒
---	---	---	--	--

(63)

佛香碧 釣柿 甘草 胡麻柿 酥柿 柿餅 柿餅 柿子搗(母) 橡餅 柚味噲 柚餅子 勝栗作る 燒栗 栗粉餅 栗飯 新豆	新豆腐 新蕎麥 熱麥 菌飯 松茸飯 松露飯 零餘子飯 角豆飯 燒米 茄菱 衣被	〔動物〕 狼獸を祭る 鹿 鹿 鹿 牡鹿 牝鹿 妻戀ふ鹿 鹿の聲 霜踏む鹿 夢野の鹿 肩拔鹿 鷹の堀出 片鶴	諸鳥 諸鳥 諸片鶴 鳥屋勝 初鷹 鷹の山別 若鷹 差羽 兄鶴 悦哉 雀鶴 鶉 荒鷹 枝句 野曝 渡鳥	小鳥渡る 朝鳥渡る 坂鳥 色鳥 雁 白雁 野雁 腹斑 鴻 海雁 初雁 田の面の雁 天つ雁 雁字 雁陣
---	---	--	---	--

〔植物〕

桐一葉 一葉舟	柳散る	銀杏樹	名の木散る	色替へぬ松	飲憩木	八朝梅	木芙蓉	梵天花	桂の花	木犀
槐の花	桜の花	目木	漆の花	唐茶	はしかん木	楸	刺桐	濱楸	常山木の花	隠蓑
初紅葉	薄紅葉	群紅葉	下紅葉	照葉	梢の錦	かつ散る	楓紅葉	槿紅葉	柞紅葉	漆紅葉
檜紅葉	栴紅葉	柿紅葉	梅紅葉	櫻紅葉	どうだんつじ	正木紅葉	銀杏紅葉	蔦紅葉	槿紅葉	柞紅葉
裏枯	秋草	秋の七草	草花	千草	千草の花	色草	野の花	草の紅葉	草の錦	草の色
								竹の春	芭蕉	

芭蕉破る	濱木綿の花	檀特花	黄蜀葵	菊	初菊	承和菊	承和の色	百菊	狸々菊	醉楊妃
大白	大般若	金目貫	黄菊	白菊	殘菊	菊の淵	野菊	貴船菊	岩菊	紺菊
糸萩	小萩	白萩	木萩	小萩	本荒の萩	萩の錦	葛	葛の葉	芒	芒散る
尾花	初尾花	尾花散る	穂芒	十寸穂の芒	旗芒	篠芒	糸芒	鷹の羽芒	縞芒	鬼芒
女郎花	男郎花	藤袴	朝顔	朝鮮朝顔	刈萱	桔梗	澤枯梗	紫苑	秋海棠	鶏頭
葉鶏頭	カーネーション	三七	萩の聲	濱萩	萩	吾亦香	龍膽	杜鵑草	風鳥草	鳳仙花
百日草	衆耳	釣船草	秋櫻	額草	千日紅	白粉の花				

茅 蘆の花 蘆の穂 鬼灯 花紫 仙翁花 仙慶草 濱菊 千壽菊 午時花 草薺の花 牛蒡の花 釣鐘草 笠首 刈安	水引の花 蕎麥の花 蕎麥の花 益母草 松虫草 小車草 姫沙参 狗尾草 くまとりばくち 縷紅草 風船かつら 項羽草 こまくさ 燕尾香 草牡丹	鼠尾草 朝霧草 露草 前胡 廣陀草 麝香草 茜の花 鬱金の花 藍の花 弟切草 煙草 煙草の花 翁草 巴草 遠志	薄荷 薄荷の花 鳥兜 烏頭 何首烏 川芎の花 田村草 黄岑の花 羌活花 苦参 玄参 當藥 蘭 石蘭	駿河蘭 星草 曼珠沙華 鬼督郵の花 相摸草 吉祥草 岩蓮華 小蓮華 忍草 幽靈草 正木の蔓 五味子 伊豫葛 鴨上戸
--	---	---	--	--

秋植物

金律 唐花草 灸花 蓼の花 蓼の穂 狼地草 水葱 小水葱 蕨 龍舌草 破蓮 木の實 木の實の雨 柚 橙	九年母 蜜柑 柑子 橘の實 雲州橘 金柑 香樂 枳殼 朱槿 梨 大殺梨 紅瓶子梨 観音寺梨 松尾梨 水梨	圓梨 空閑梨 軒の妻梨 芋生の浦梨 山梨 沫雪梨 菴羅子 玄圃梨 柿 澁柿 熟柿 木練柿 御所柿 圓座柿 伽羅柿	似柿 筆柿 蜂屋柿 猿柿 田舎柿 桃の實 毛桃 葡萄 榎柑 佛手柑 柘榴 無花果 木瓜の實 椶櫚の實 棗	茶葉 栗 小栗 茅栗 ひよひ栗 丹波栗 出打栗 三度栗 落栗 稔栗 剝栗 燒栗 熊栗棚を掻く 椎の實 椎柴
---	--	--	--	---

秋植物

雪の花 雪しまき 雪明 金雪 雪折 雪空 雪催 雪雲 雪起 雪の聲 雪女 風花 冬の雲 冬の空	寒空 鱸落 冬霞 小春風 狐火	氷 初氷 薄氷 厚氷 垂氷 月氷 星氷 氷の聲 氷の衣 氷の楔 氷の鏡 氷の花 氷の橋	諏訪湖氷る 水潤る 瀧潤る 冬の水 寒の水 冬の山 山眠る 二見の汐干 冬の見 冬野 冬田 冬の川 冬の海	枯野 朽野 朝凍
--	-----------------------------	---	---	----------------

〔宗教〕 神の旅(十二) 神送 神の留守 神在餅 神立風 拜墳 智積院論議(一十二) 宗鑑忌(二) 菊花祭(増) 來山忌(三) 琴浦祭(五) 達磨忌 十夜(五十五)	十夜柿 興福寺法華會(六) 宮市天神祭(七十五) 薪の讀(八十二) 浪化忌(九) 金刀比羅祭(十) 維摩會(十) 加羅佐手の神事(十一十五)	聖一忌(十五) 鹿王院舍利開帳 夷講(廿) 誓文拂 平安神宮時代祭(新廿二) 几童忌(廿三) 法勝寺大乘會(廿四廿八)	智證忌 和佐の笑祭(十、上卯) 大社の神事(中辛) 神集 神在 御火焚(十一月) 祇園御火焼(十二、二) 永観忌(二) 吹革祭(八) 御忌定(十二) こくそ祭(十二) 新玉津島の御火焚(十三)	空也忌 當麻祭(十四) 貞徳忌(十五) 道祖神祭(十六) 一茶忌(十九) 獸改(廿一廿五) 大師講(廿一廿四) 大師粥 淨藏忌(廿二) 伊勢忌 親鸞忌(廿二) 御講 御講風 近松忌 北野御火焼(廿五)
---	---	---	---	--

掛鳥(廿六) 興福寺法起納 春日若宮の祭(廿七) 春日日の使 春日後日の能(廿八)	梅宮祭 大神祭 山科祭(上巳) 鳥祭(上志) 平野祭(上申) 杜本祭 春日祭 卒川祭(上酉) 三島酉の市(酉) 酉の市 一の酉 二の酉 三の酉 熊手賣 唐の芋賣	大原野祭(申子) 園神祭(申丑) 鎮魂祭(申寅) 新嘗祭(申卯、新廿三) 豊明節會(申辰) 日蔭の鬘 心葉 大忌 小忌衣 鶉の祭(申巳) 吉田祭(申申) 日吉の臨時祭 山神祭(十一月) 藏祭	神樂 神樂歌 庭火 阿知女 採物 片折 諸舉 韓神 大前張 宮人 難波湯 木綿志手 前張 階香取 猪名野	小前張 脇枕 閑屋 磯等 篠波 植槻 總角 大宮 淡田 蚕 千歳 早歌 吉々利々 得銭子
---	--	--	--	---

木綿作 晝目歌 湯立 湯立 朝倉 其駒 酒殿歌 酒殿歌 庭火 東三條の御神樂 里神樂 鉢叩(十三より) 寒行(寒) 寒垢離 寒念佛	寒參 天智天皇御國忌(十一、三) 臘八(八) 臘八粥 無實講 大佛煤拂 月次祭(十二) 神今食 解齋の御粥 花園院御忌 妙心寺開山忌(十二) 智積院開山忌 大明忌	鳴瀧大根煮供養 星佛賣(十三) 最勝寺灌頂(十五) 神宮月次祭 御佛名(十九) 被綿 名講 名講 栢梨の勸盃 大徳寺開山忌(廿二) 一遍忌(廿三) 窟の神送る(廿四) 窟の祓 クリスマス(新廿五) 蕪村忌(一) 鉢叩結願	齋宮の繪馬掛(廿) 太宰の貢 賀茂の臨時祭(下酉) 荷前使 東大寺米(今暮) 札納 蟹拂 内侍所の御神樂(十一月) 山神樂 吉田の大祓(節分) 厄塚立る 五條天神參 勝の餅	白朮賣 雜喉寢 長谷の豆撒 道饗祭(晦) 御門祭 年越參 年籠 年の終の魂祭 和布刈の神事 オケラ參 オケラの火 王子の狐火 浅草観音の追儺 百八の鐘
---	---	---	--	--

(78)

和讃講(冬) 平太郎参 箕祭 納庚申(終庚申)	〔人事〕 更衣の節會(十二) 孟冬の旬 氷魚を賜ふ 氷魚の使 殘菊の宴(五) 射場始 亥子餅(上子(下に出づ)) 宇和鯛 献る(亥子) 初雪の見参 御曆の奏(十一、二) 郁子献る 五節	五節帳臺試(申丑) 五節御前試(申寅) 殿上の淵醉 童女御覽(申卯) 狩の使 忌火の御飯(十二、二) 御躰の御卜(十) 御贖物(廿) 節折 水無瀬家筈を献す 土牛童子の 像を立つ(大寒) 着駄の政(十二月) 追儼	爐炭を献る(十二) 燂爐會 燂爐食ふ 獸炭 履長の賀(冬至) 宮線を添ふ 臘日 虚耗を照す(十二、廿四) 分歳(晦日) 後の更衣(十月) 亥子餅(十、五)	能勢餅 八木の亥子餅 爐開 日待(五) ベツタラ市(十九) 夷切(廿) 黄精賣 冬至の賀(冬至) 柚湯 赤柏(十一、二) 芝居乗込 顔見世 袴着(十五) 髪置
----------------------------------	--	---	---	--

(79)

帯直 轆初 鐵漿初 天王寺牛市(十一月) 除隊(十一月下旬) 入營(十一月二) 乙子朔日(十二、二) 乙子餅 川浸餅 角力籠(廿) 避寒(寒) 寒見舞 寒聲 寒稽古	相撲寒取 寒彈 寒乘 寒施行 野施行 粥施行 寒紅 寒磨 寒灸 正月事始(十二、八) 事納 六質汁 笹を釣る 年貢(余暮)	餅搗 餅米洗 質餅 引摺餅 餅筵 餅配 餅花 餅の札 長崎の柱餅 年の市 飾賣 飾松賣 飾竹賣 注連賣	齒染賣 標賣 葩煎賣 飾海老賣 勝栗賣 榎賣 橙賣 折敷賣 焙烙賣 土器賣 羽子板賣 破魔弓賣 破魔矢賣 破魔賣 毬打賣 双六賣	數の子賣 何彼賣 淺草年の市 年取物 年の用意 門松營む 宵飾 齒染列る 太神宮札配(増) 曆賣 古曆 曆卷納む 曆卷返す 煤拂 煤竹
---	--	--	---	---

狸汁 納豆汁 根深汁 蕪汁 搔餅 水餅 霰餅 寒の餅 燒芋 風呂吹 蕎麥湯 蕎麥搔 鍋燒 牛鍋 杉燒	初海苔 調味噌 生味噌 宗太郎漬 藥食 鹿實 田猪賣 鯨汁 鯨賣 河豚汁 河豚鍋 乾鮓 鮓 鹽鯉 雲鰻	煎海鼠 海鼠腸 牡蠣船 牡蠣飯 煎牡蠣 酢牡蠣 干菜 新干大根 新干蕪 切干 莖漬 莖菜 澤庵漬 淺漬製る 酸莖漬る	熊 穴熊 狼 冬鹿 冬毛 鯨 鷲 鷹 大鷹 兄鷹 熊鷹 鷓鴣	鷓鴣 準 鴨 暖鳥 狩場の雉 木兎 巢 鷓鴣始て乳む 鷓鴣始て巢ふ 寒苦鳥 霜夜の鶴 冬の雁 水鳥 浮寝鳥 鷓鴣
--	---	--	---	--

冬 人事 動物

鷓鴣の食 離鷓鴣 鷓鴣の脊 思羽 劍羽 鳴 鷓鴣 沈覺 尾長鴨 胴長鴨 秋沙 青頭鴨 嘴廣鴨 鈴鴨 蘆鴨	冬鷓鴣 友千鳥 夕波千鳥 小夜千鳥 島千鳥 濱千鳥 浦千鳥 磯千鳥 河千鳥 群千鳥 千鳥 鷓鴣 鷓鴣 真鴨	雀の乞食 鷓鴣 寒雀 寒鴉 寒鴉 雀の乞食 鮓 しび 初鮓 追鮓 河豚 針千本 鮓	鱈 鱈 火魚 杜父魚 寒鯉 寒鯉 鯛 潤目鯛 氷魚 紗魚 海鼠 虎海鼠 金海鼠 牡蠣	冬の蠶 冬の蜂 冬の蝶 冬の蠶斯
--	--	---	---	---------------------------

冬 動物

玉葱 葱 赤蕪 京蕪 近江蕪 天王寺蕪 蕪 胡蘿蔔 大根 虎落筍 寒筍 枯笹 枯芝 枯律	冬菜 白菜(増)
冬菜 白菜(増)	冬菜 白菜(増)
冬菜 白菜(増)	冬菜 白菜(増)
冬菜 白菜(増)	冬菜 白菜(増)

冬植物

冬椿 寒櫻 冬木の櫻 冬櫻 蠟梅 年の梅 寒紅梅 室の梅 早咲の梅 冬の梅 冬至梅 室咲 歸花 早咲の椿	早咲の椿 冬牡丹 茶の花 山茶花 山茶花 冬牡丹 葉牡丹 冬薔薇 批杷の花 八手の花 榎の花 柊の花 冬菊 冬葵(増)
冬薔薇 霜枯 草枯 冬枯 葉柏 澤山橋 藪柑子 萬兩 青木の實 冬桃の實 冬木立 朽葉 落葉の時雨 木の葉 落葉の雨 紅葉散る 冬紅葉	冬薔薇 霜枯 草枯 冬枯 葉柏 澤山橋 藪柑子 萬兩 青木の實 冬桃の實 冬木立 朽葉 落葉の時雨 木の葉 落葉の雨 紅葉散る 冬紅葉
冬草 枯蘆 枯葱 枯蕪 枯夕顔 枯蔞 枯雞頭 枯蓮 枯尾花 枯薄 枯葛 枯女郎花	冬草 枯蘆 枯葱 枯蕪 枯夕顔 枯蔞 枯雞頭 枯蓮 枯尾花 枯薄 枯葛 枯女郎花

冬植物